

高井田遺跡 I

—区画整理事業・河川改修工事に伴う—

1986年3月

柏原市教育委員会

はしがき

『開発と文化財保護』これは、言い古されてきた言葉ではあります
が、絶えず私たちの眼の前に現われてくる言葉です。開発が優先か
文化財が優先かというような問題ではありません。いかに開発をし、
いかに文化財を保護していくかということです。私たちにとって、
そして私たちの子孫にとって、どのような開発が必要なのかということ
です。もちろん、埋蔵文化財だけでなく、自然環境や伝統的な
町並み、民俗的な遺産をも含めて考えるべきことです。

平尾山古墳群は千数百基からなる古墳時代後期の大群集墳です。
現在はぶどう畑の開墾などによって、かなり破壊されていますが、
それでも縁に囲まれた古墳群であり、できれば現状のまま残してお
きたいものです。しかし、年々、虫食い状態の開発が進んでおり、
思うにまかせない状態です。

今回の調査でも、発見された2基の古墳と住居跡群を保存するこ
とはできませんでした。しかし、柏原市都市計画課、高井田土地区
画整理組合と協議を重ね、安堂第6支群3号墳の石室を移築する
というささやかな成果を残すことができました。もちろん、周囲の景
観は一変してしまうのですが、この石室を復元、公開することによ
って、古墳を築造した人々や、未来の私たちの子孫に対して、僅か
な償いをしたいと思います。

これからも、各地で開発は続けられることでしょう。しかし、本
当に私たちにとって、必要な開発であるのかどうかということを、
絶えず考えておきたいものです。

昭和61年3月

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、高井田川改修工事用の盛土掘削工事に伴って実施した柏原市高井田川所在、平尾山古墳群安堂支群の緊急発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、昭和60年4月2日から6月6日まで実施し、それに伴う整理作業は、昭和61年3月31日まで実施した。
3. 当該地は平尾山古墳群安堂支群に含まれるが、遺跡の性格から、高井田遺跡の仮称を与え、今後、名称を検討したいと考えている。
4. 発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課 安村俊史が担当した。
5. 遺物・図面等の整理は安村が担当し、石田成年、伸井光代の協力を得た。
6. 本書の編集は安村が担当し、執筆は第3章2節の一部を石田が、他を安村が担当した。第4章『古墳の石材について』は、八尾市立刑部小学校教諭 奥田尚氏に原稿を頂いた。
7. 本書で使用した方位は磁北、標高はT、P、である。真北は磁北より約6°東に振っている。
8. 調査・整理の参加者は下記の通りである。

石田 博	竹下 賢	北野 重	桑野一幸	田中久雄	谷口京子
石田成年	秋田大介	伊藤芳匡	稲岡利彦	今中太郎	清瀬健二
伸井光代	麻 栄三郎	朝田行雄	井上岩次郎	奥野 清	川端長三郎
谷口鉄治	西岡武重	分才春信	道藤基蔵	森口喜信	山田貞一
山本芳一	乃一敏恵	松成早苗			

目 次

第1章 調査経過	1
第2章 遺跡の概略	2
第3章 調査成果	6
1. 安堂第5支群16号墳	6
2. 安堂第6支群3号墳	22
3. A地区の調査	38
4. B地区の調査	45
5. C地区の調査	50
第4章 古墳の石材について	54
第5章 まとめ	61

図-1 調査地位図	3
2 古墳分布図	5
3 調査地区全体図	7
4 安堂第5支群16号墳測量図	9
5 安堂第5支群16号墳周溝土層図	9
6 安堂第5支群16号墳石室実測図	11
7 安堂第5支群16号墳石室掘方土層図	13
8 安堂第5支群16号墳石室上層平面図・断面図	15
9 第5支群16号墳周溝内出土甕	16
10 第5支群16号墳周溝内出土遺物	17
11 第5支群16号墳羨道部出土遺物	18
12 第5支群16号墳石室内出土遺物	20
13 第5支群16号墳石室床面出土遺物	21
14 安堂第6支群3号墳地形測量図	22
15 安堂第6支群3号墳周溝・地山整形面土層図	24
16 安堂第6支群3号墳全体図	25
17 安堂第6支群3号墳北側土層図	27
18 安堂第6支群3号墳石室実測図	29
19 安堂第6支群3号墳石室地山面実測図	32

図-20 安堂第6支群3号填敷石平面図	33
21 安堂第6支群3号填敷石調整痕拓影	34
22 安堂第6支群3号填出土遺物	36
23 建物-1・2遺構図	38
24 A地区遺構全体図	39
25 建物-3遺構図	41
26 土塹-1遺構図	43
27 A地区出土遺物	44
28 B地区遺構図	45
29 B地区溝内出土遺物	46
30 B地区出土遺物	48
31 B・C地区出土石器	49
32 白磁碗出土状況	50
33 白磁碗・土師器小皿	50
34 古墓遺構図	51
35 古墓出土鉄釘	51
36 C地区出土遺物	53
37 安堂第6支群3号填石室石材	54
38 安堂第5支群16号填石室石材	57
39 鳥坂寺跡出土石棺蓋	61
 表-1 安堂第6支群3号填・凝灰岩敷石計測表	34
2 安堂第6支群3号填・石室敷石の岩石種と長径	55
3 安堂第5支群16号填・石室壁石・天井石の岩石種とみかけの長径	58
4 安堂第5支群16号填・石室敷石の岩石種と長径	59

第1章 調査経過

柏原市建設部都市計画課において、高井田土地区画整理事業の一環として昭和59・60年度に高井田川の河川改修工事が実施された。工事に際しては、発掘調査の指示をしていたにもかかわらず、一部で事前着工が行なわれるなど、調査に当たっての問題点が数多く生じた。この河川改修工事に伴う発掘調査、およびその経過については別報告を予定しているので、ここでは省略するが、今回の調査は昭和60年度の高井田川改修工事に際して必要となる盛上用の土砂採掘工事に伴う緊急発掘調査である。

協議の結果、土砂採掘地は高井田川の北側に位置する南斜面に決定し、発掘届が柏原市高井田土地区画整理組合（代表・谷口俊春）より提出された。予定地は昭和57年の試掘調査によって遺物包含層が確認されており、隣接地では、古墳も発見されている地域である。斜面地であるため遺跡密度は低いと考えられたが、集落および古墳の存在が予想されたため、柏原市教育委員会では採掘予定地全域に対して発掘調査を実施することにした。調査対象面積は約5,100m²。調査に際しては、盛上工事が緊急を要するため、調査を速かに実施して欲しいとの申し出が都市計画課、および区画整理組合から出された。そのため、調査終了地で遺構が検出されなかつた地点から土砂採掘を認めることに同意せざるを得ず、発掘調査と工事が平行して行なわれるという不本意な調査であった。

発掘調査は4月2日に着手し、6月6日をもって終了した。調査の進行に伴い、住居跡群が2ヶ所で確認され、統いて2基の古墳が確認された。また多量の遺物も出土した。そのため、5月7日、検出された遺構の保存について、都市計画課、区画整理組合、社会教育課の三者で協議を行ない、その結果、住居跡群の保存は不可能となり、2基の古墳については現地保存が可能か否か検討することにし、とりあえず新聞発表、現地説明会を開き、その成果を公開することにした。現地説明会は5月12日に実施し、約200名の参加者を得た。参加者には地元の人も多く、地元の方々の文化財に対する強い関心を感じることができた。

その後、発見された古墳は計画地盤高よりもかなり高く、設計変更を行なっても古墳を現況保存することは不可能であると説明があった。教育委員会では現況保存を望んでいたが、都市計画課・区画整理組合から、1基（安堂第6支群3号墳）は移設し、公開できるような措置を構じるとの申し出があり、適切な移設方法、公開方法について検討を加えていくことで、移設することに合意した。現況保存できなかったことは非常に残念であるが、都市計画課・区画整理組合が努力をし、移設が可能となったことはささやかな成果であると考えている。また、安堂第5支群16号墳は移設工事に多くの困難を伴うため、記録保存に留め、破壊のやむなきに至った。

第2章 遺跡の概略

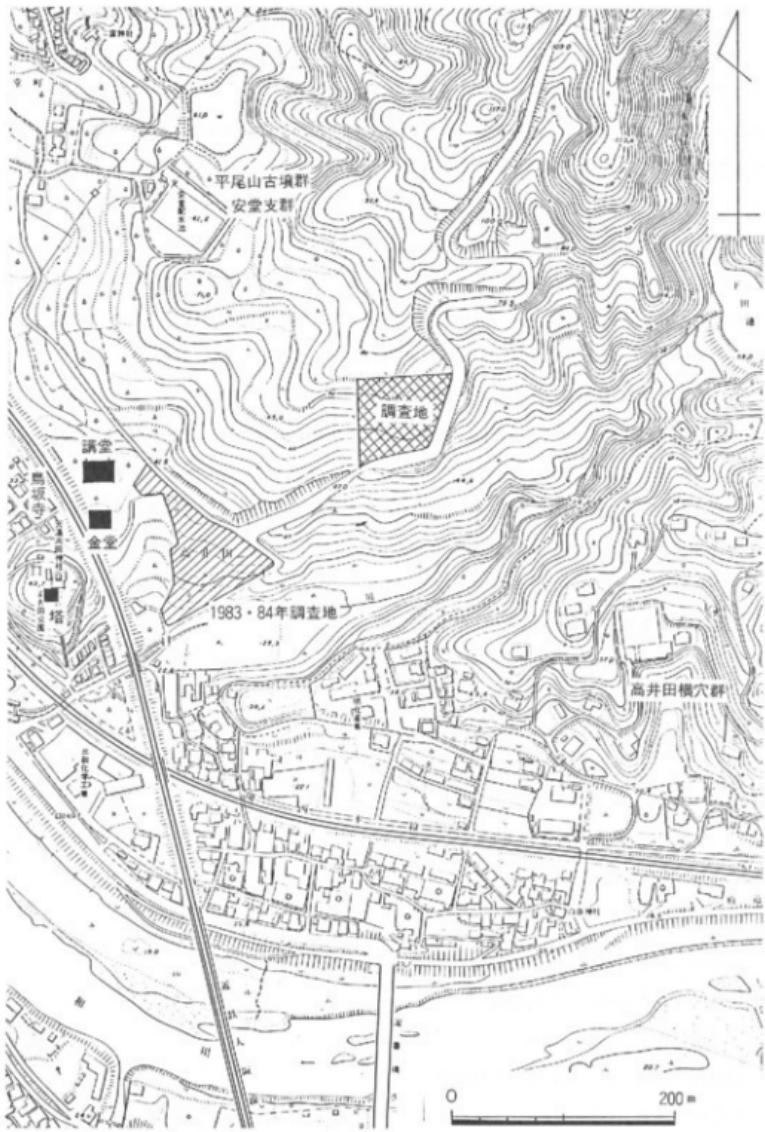
奈良県から亀ノ瀬を経て大阪平野へと流れる大和川は、南から舌状に張り出す玉手山丘陵にさえぎられ、北西へと流れを転じる。本来は、そのまま北流していたのであるが、宝永年間の付け替え工事によって、現大和川は石川との合流点から再び西へと流れを変えている。その大和川が北西へと向かう地点の右岸に今回の調査地は位置する。標高は50mから80mを測り、谷川である高井田川にのぞむ南斜面にあたる。調査地最高所は平坦地となり、獨立柱建物群が検出されているが、そこからは南河内が一望でき、大和川の背後に玉手山丘陵を控えた景色は、非常に美しい。大和川までの直線距離は約600m、比高差60mである。

調査地は『柏原市文化財地図』において、平尾山古墳群安室文群に含まれている。調査地の北側の尾根上には前方後方墳、前方後円墳、円墳が並び、東側、南側にも数基の円墳が存在する。古墳については後述することにするが、この周辺では古墳ばかりでなく、1980年の分布調査の際に、弥生時代から奈良時代にかけての遺物が採集されており、1982年の試掘調査によつても奈良時代の遺構や遺物が確認されている。⁽¹⁾このように集落の存在も予想される地域である。⁽²⁾

高井田川を挟んで南側には高井田横穴群が抜がり、一部は国の史跡に指定されている。高井田横穴群は凝灰岩層に横穴を掘り込んだものであり、壁面に人物などの線刻壁画が描かれていることで著名である。

また、調査地の西方400mには鳥坂寺跡（高井田庵寺）が位置する。1961、62年に塔・金堂・講堂の調査が実施され、凝灰岩壇上積基壇による堂塔であることなどが確認されている。⁽³⁾金堂・講堂は南へ張り出す舌状台地上に南北に並び、現在近鉄大阪線の通過する浅い谷を挟み、南西に塔が位置する。塔跡は天湯川田神社の前庭に位置する。主要堂塔から谷を隔てた東側で1983、84年に発掘調査が実施された。その結果、僧房・食堂と推定される建物群が検出され、寺域の一部であることが確認された。また、鳥坂寺と墨書きされた土師器が出土し、高井田庵寺が鳥坂寺跡であることを裏付ける結果となった。鳥坂寺の創建時期は、文献等から670年頃とする説があるが、軒丸瓦の型式や、周辺から出土する土器の年代等から、もう少し遡らせて考えるべきであろう。

鳥坂寺の大和川対岸には、片山庵寺が位置する。これまでに塔跡以外は確認されていないが、塔跡は1982年の調査によって、凝灰岩壇上積みの基壇が、後に部分的に瓦積みに補修されていることが判明している。更に、鳥坂寺跡の北には、家原寺、知識寺、山下寺、大里寺、屯倉寺の各古代寺院址が並び、大和川の南側にも田辺庵寺などの寺院址がみられる。このように、飛鳥時代から奈良時代にかけて、調査地周辺に華やかな文化がくり広げられていたことをうかがうことができる。



図一 調査地位置図

再び、調査地周辺の古墳について述べるが、1974年の分布調査の際に、柏原市東山一帯に分布する古墳群の総称として平尾山古墳群の名称が採用され、地形等によって一定のまとまりをもつ地域を支群として把握し、更に小文群にグルーピングされ、小支群内の古墳に1から順に番号を付す方法がとられた。⁽⁴⁾明瞭な方法であるため、柏原市教育委員会でも基本的にこの方法を踏襲している。それによると、調査地は安堂支群に含まれ、第4～7支群に囲まれた空白地となっている。そのため、まず調査によって発見された2基の古墳の位置づけを試みておく。

まず、調査地北東部で発見された古墳は、南東へ派生する尾根上に位置するため、その北側の主尾根上に位置する第5支群に含めることにする。一方、南西部で発見された古墳は、終末期の古墳であり、尾根に挟まれた谷の奥部に位置する。新たに支群を設定することも検討したが、主尾根上に位置する第5支群と区別するために、第6支群に含めることにした。

第5支群は1974年の調査によって、前方後円墳、前方後方墳各1基と円墳5基が確認され、⁽⁴⁾その後1980年の調査の際に、前方後円墳1基を含む6基が新たに確認され、⁽¹⁾1982年の調査によって更に円墳1基が確認された。⁽²⁾これらの古墳に順に番号を付していくと、新発見の古墳は16号墳となる。第5支群は前方後方墳や前方後円墳を含むことから、安堂山古墳群として理解されることの多い支群である。第6支群は過去に横穴式石室を有する円墳2基が確認されており、発見された古墳は3号墳になる。

安堂支群第5支群一覧

1号墳 前方後方墳。堅穴式石室。

2号墳 前方後円墳。堅穴式石室。

3号墳 円墳。

4号墳 円墳。

5号墳 円墳。

6号墳 円墳。

7号墳 円墳。

8号墳 円墳。

9号墳 円墳。径10m。墳丘流失。

10号墳 前方後円墳。全長30m。

11号墳 円墳。径10～15m。

12号墳 円墳。横穴式石室。石材露出。

13号墳 円墳。径10～15m。

14号墳 円墳。横穴式石室。石材散乱。

15号墳 円墳。径10～15m。周溝の一部のみ確認。

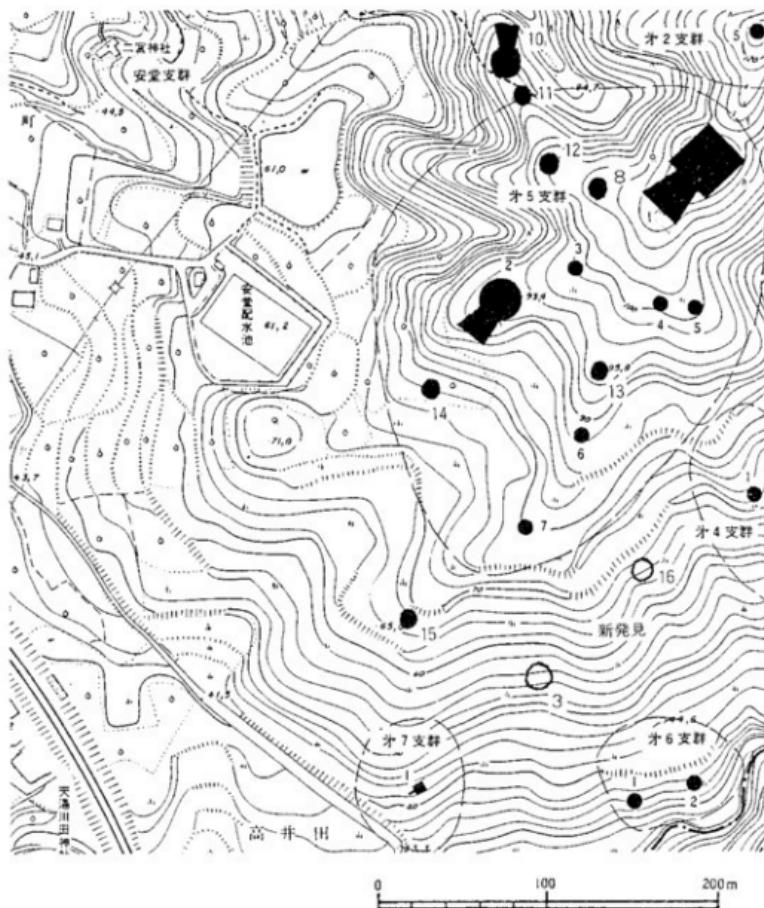


図-2 古墳分布図

註

- (1) 大阪府教育委員会・柏原市教育委員会『柏原市東山地区における遺跡分布調査報告書』1980
- (2) 柏原市教育委員会『高井田横穴古墳群試掘調査概要報告書』1983
- (3) 大阪府教育委員会『河内高井田・鳥坂寺跡』1968
- (4) 大阪府教育委員会『平尾山古墳群分布調査概要』1975

第3章 調査成果

1. 安堂第5支群16号墳

安堂第5支群16号墳⁽¹⁾は、調査地の北東隅で発見され、南東へのびる尾根上に築かれている。墳丘の封土はほとんど残っておらず、二次堆積土を除去すると、4個の天井石が露出し、南端の天井石下に石室内へ入ることができる穴が開いた。おそらく、周辺に開泉の手がのびる以前は、石室が開口していたのであろう。石室の残存状態は、ほぼ完全である。

① 墳丘・周溝・墓道

現地形から古墳の存在は予想されず、かなりの封土が流失しているようである。しかし、石室の西側で弧状にのびる周溝が検出され、円墳であることが確認された。周溝は石室北側から南西部で確認され、東側は道路によって削平されている。周溝は正円形をなさないが、周溝底から復元すると、直径21m前後の円墳となり、平尾山古墳群内ではかなり規模の大きいものである。周溝断面はU字形を呈し、北側で幅約400cm、深さ30cmを測るが、西側では最大幅540cm、最大深度120cmとなる。そして、石室南西部で二又に分かれて消失する。おそらく、古墳築造当初から、浜道前面には周溝がまわっていなかったと考えられる。

周溝土層図中、第10層暗黄褐色砂質土は封土の一部であり、第7～9層が周溝埋土である。石室の北西部では、周溝の墳丘側肩部に正置された状態で、土師器の甕（1）が出土した。層位から判断すると、古墳築造時、もしくは築造直後に意識的に置かれたものと思える。やや浅く地山を掘りくぼめて正置されていた。また、石室北側でも、ほぼ完形となる土師器甕（14）と羽釜（15）が各1点、密集状態で出土している。掘方等は明らかにできなかつたが、周溝埋土やや上層に位置し、土器館の可能性も考えられる。

周溝内からは、他にも7世紀前葉前後の土器が出土しており、墳丘上、あるいは周溝内で祭祀等が行なわれた可能性が考えられる。第6層の黒褐色粘質土からは、7～8世紀の土器が出土しており、円筒硯の出土もみる。また、周溝西側の溝状の地形（第4・5層）は、自然地形と考えられる。遺物については後述する。

石室前面には、浜道の南端付近から浜道前面へとのびる細い溝状の遺構がみられる。この溝状遺構は、排水溝かとも考えたが、石室内に続く施設が認められないため、墓道と考えられる。墓道は浜道西壁の4石目付近から、やや屈曲しながら石室中軸線の西側を前面へとのびている。幅は50～100cm、深さは30～50cmを測る。また、底面には数個の人頭大の自然石がみられ、踏段として置かれていた可能性が考えられる。埋土内からは若干の須恵器が出土している。



图一3 调查地区全体図

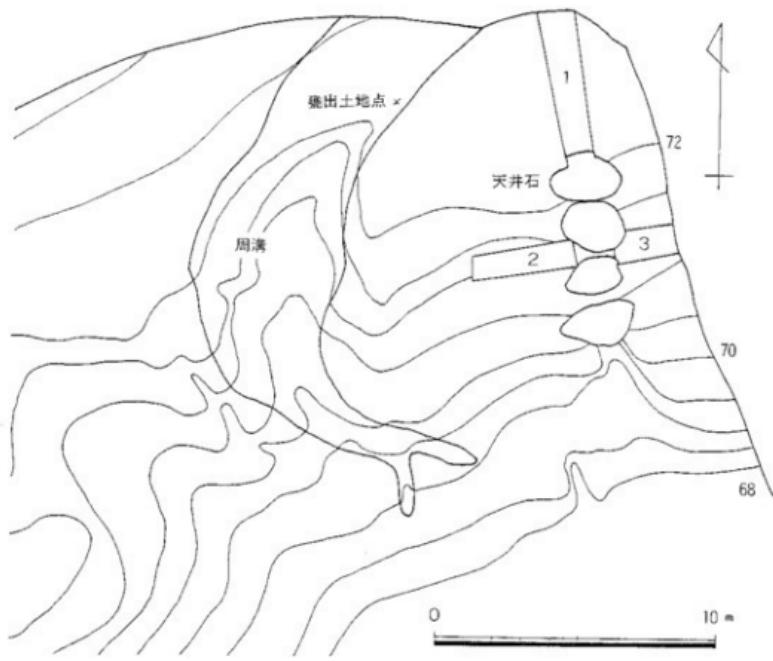
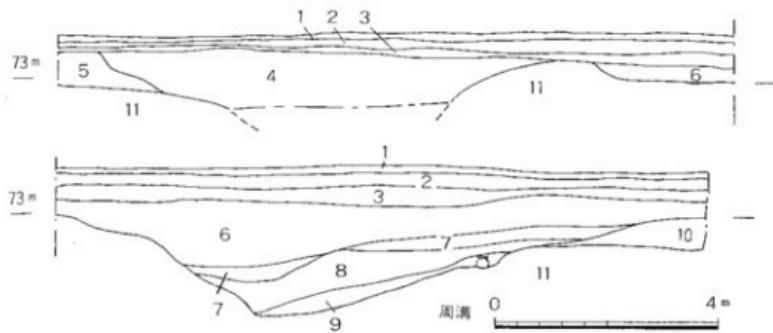


図-4 安堂第5支群16号墳測量図



- | | | |
|-----------|------------|-------------------|
| 1. 表土 | 5. 褐色砂質土 | 9. 灰褐色粘質土 |
| 2. 旧耕土 | 6. 黒褐色粘質土 | 10. 暗黃褐色砂質土(埴丘封土) |
| 3. 床土 | 7. 暗黃褐色粘質土 | 11. 明黃褐色粘質土(地山) |
| 4. 暗褐色砂質土 | 8. 灰色粘質土 | |

図-5 安堂第5支群16号墳周溝土層図

②横穴式石室

横穴式石室は、自然石の乱石積みによる両袖式石室である。袖は両袖共に不明瞭で、巨石の角を30°前後の角度で約20cm幅に打ち欠くことによって、12cmの幅の袖を作り出したものである。通例のように直角をなさず、無袖に近い形態である。羨道南端は、東壁では崩壊しており、西壁では一石が抜き取られている。しかし、これより南側には石材を据え付けた痕跡が認められないことから、この位置が羨道端と考えられる。

以上のことから、石室規模は全長966cm、玄室長374cm、奥壁での玄室幅216cm、玄室高220cm、後退長592cm、玄門での羨道幅176cm、羨道高165cmを計測する。平尾山古墳群では中規模の石室である。更に詳細に検討すると、玄門付近での玄室幅は205cmであり、玄室平面プランは、やや奥が広くなっている。奥壁での天井幅163cmに対し、玄門での天井幅は176cmとなり、大井は逆に奥が狭くなっている。側壁は弱い持ち送りによって築かれているが、奥に近いほど持ち送りがきつくなっていることを示している。これは、羨道側壁が1石のみで築かれているため、ほとんど傾斜がみられないことに対応するものと思える。また、東壁の持ち送りは約85°であるが、西壁は80°とややきつくなっている。玄室高も玄門付近で200cmと低くなっている。一方、羨道幅は羨道端で190cmを測り、前面に向かってやや開いている。石室主軸はN-9.5°-W。すなわち、南よりやや東向きに開口する。

石室材は、石室内面が平滑になるように意図されており、自然面を利用するもの、石の目に沿って割ったもの、ノミ状の工具で打ち欠いたものがみられる。石材は花崗岩が多いが、安山岩も使用されている。

奥壁は巨石の二段積みであり、一段目の石は長径約250cmを測る。巨石の隙間は、角のある三角形状の石や板状の割石を埋める。

玄室側壁は二段積みの上に、やや小さい横長の石を積んでいる。自然石を使用しているにもかかわらず、東壁と西壁に使用されている石の形状、および位置は、ほぼ左右対称形となり、計画的に構築されていることがわかる。

羨道側壁は玄門から1、2石目は縦長の石を1石のみで築いている。玄門にあたる石は、前述のように角を打ち欠くことによって袖としている。3石目は方形状の石の上に、横長の石を積みあげた二段積みとなっている。東壁の崩壊状況から、4石目も3石目と同様の構築法であったと考えられる。玄室と同じく、やはり奥壁は対称をなしている。3石目の上段の石材が、2石目の肩にかかっている点まで同様である。

天井は、玄室2石、羨道2石からなり、更に羨道には1石架構されていた可能性がある。天井石は、最初に玄門にあたる、いわゆる見上げ石が架構され、順に置かれている。玄門部分は、側壁と同様に約30°の角度で打ち欠くことによって、玄室と羨道の境界を明らかにするものである。

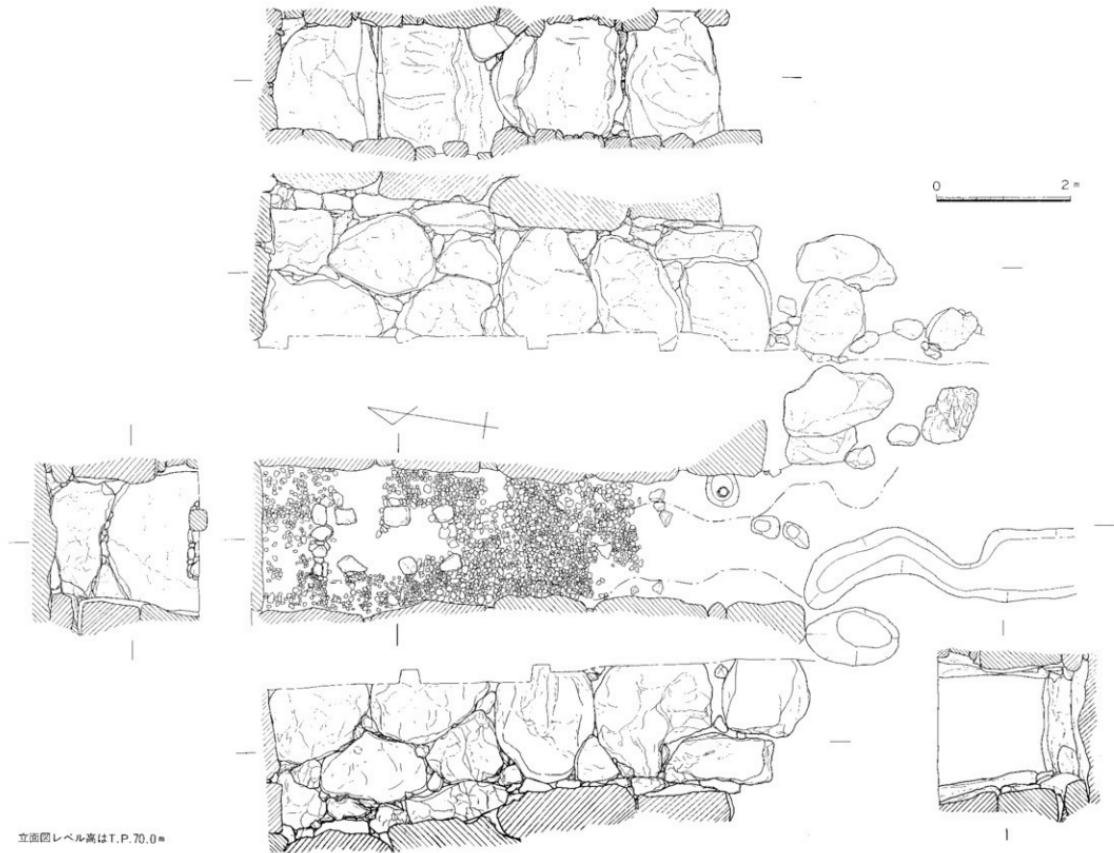


図-6 安塙第5支群16号埴石室実測図

側壁が左右対称となっていることは、既に石材選定の時点から計画性をもって構築されたことを示している。また、石材の一部に加工が加えられていることや、一石のみで築造壁面を築いていることは、切石造りの石室への発展段階にある技法を駆使して築かれた石室であると考えができるのではないだろうか。

石室は、黄褐色、灰白色、赤褐色などの粘質土からなる地山を掘り込んで構築されている。石室の構築方法を確認するため、石室北側に第1トレンチ、西側に第2トレンチ、東側に第3トレンチを設定した。第1トレンチでは、二段積みの奥壁を設置するため、地山掘方も二段に掘り込まれている。特に、1段目の奥壁と掘方の間隔は非常に狭く、石室構築時に、奥壁が最初に設置されたことがわかる。掘方の埋土は赤褐色粘質土の單一層であるが、1段目の掘方埋土、および掘方底面を確認するには至っていない。

第2、第3トレンチでは、側壁最下段の根石まで確認することができた。掘方の埋土は、赤褐色系の粘質土と黄褐色系の粘質土が20~30cm間隔で交互にみられる。各層はやや内傾するが、上面は叩き締めているようである。奥壁と異なり、小さめの石材を利用し、複数に積み上げた側壁を安定させるためには、異なる土質の土を叩き締めながら積み上げていく必要があったものと考えられる。また、第2トレンチでは第9層黄褐色粘質土と第4層赤褐色粘質土の境に青灰色砂質土の薄層がみられる。この層は偶然に混入したものと考えられ、2段目の側壁の下端に一致する。この層序から、第4層赤褐色粘質土まで埋められた後、2段目の側壁が積み上げられたものと考えられる。1段目の石材掘方は、渓道部分の側壁で確認したものによると、1石ずつ石材よりやや大きく浅い掘方を掘り、根石等をつめることによって、石材を安定させていることが確認できた。

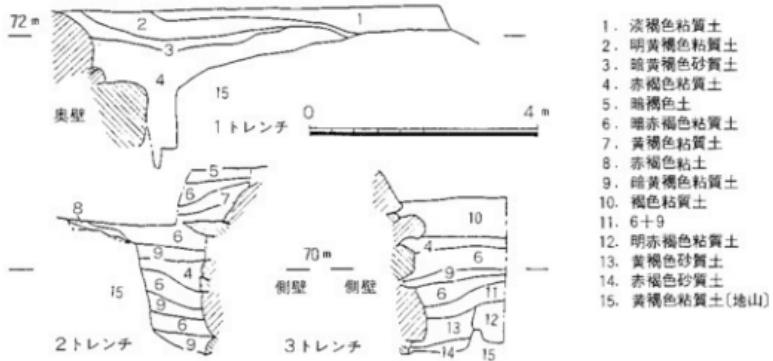


図-7 安堂第5支群16号墳石室掘方土層図

床面はやや凹凸のみられる地山上に、20cm前後の厚さに玄室では淡茶褐色粘質土を、狭道前面では淡赤褐色粘質土を敷いて床面としている。地山の凹凸は石材設置時に生じたものであろう。床面はTP 69.0mではほぼ平坦である。狭道前面の淡赤褐色粘質土には、一部で焼土が混じっていた。墓前祭祀に伴うものであろうか。

玄室中央には、主軸と平行に長さ224cm、幅104cmの範囲に棺台が置かれている。棺台は30cm前後の大きさの上面が平坦な自然石を主に使用している。北辺は扁平な石を2段に積み、その間に小石を用いて直線状に並べている。東辺と西辺には各3ヶ所に自然石を置いて棺台とする。南端の2ヶ所は共に扁平な石を2段に重ねることによって、他の棺台石とのレベルを等一している。棺台上面のレベル高は、TP 69.15m前後。床面からの高さは約15cmである。

棺台の周囲には、5~10cm大の礫を敷きつめている。礫敷の厚さは最も厚い部分で10cm前後を測るが、均一ではない。奥壁から6m付近には20cm前後の石がみられ、その部分から南には礫は認められないため、礫敷の南端を示すものと考えられる。また、奥壁付近では礫が少なく、棺台に開まれた範囲には礫が認められない。このことから、棺が安置された後に礫が敷かれた可能性が高いと考えられる。特別な排水施設は認められないが、棺を高くあげ、周囲に礫を敷くことで、排水を考慮したものであろう。

狭道3石目の東壁際で、土師器の杯(61)と甕(63)が出土した。床面を掘り込んで埋置されたものと考えられ、正置された窓内から破片となって杯が見出された。しかし、杯の口径のほうが甕の口径より大きく、本来は甕の口縁部に上向きにのせられていたものと考えられる。甕内からは、他に何も出土していない。

また、狭道の淡赤褐色粘質土内から須恵器杯身(60)が出土しており、築造時期を決定する資料となる。床面からは、他に土師器甕(62)や須恵器の小片が出土したのみであり、他に副葬品は認められなかった。

狭道中軸線上に、ピットが2個検出された。ピットは小柱穴状を呈するが、性格は不明である。

次に、棺についてであるが、第7層淡灰色砂質土内に多量の凝灰岩片が含まれており、面取りを行なっている石材も認められることから、石棺が置かれていたと判断できる。また、第8層淡茶褐色粘質土が棺台の北西部で直角に落ち込んでいることから、石棺が安置されている状態で第8層が堆積し、その後、石棺が破碎され、持ち出されたものと考えられる。第8層が、棺台部分では棺台上面より低く、その周囲では棺台より高くなっている事実も、これを裏付けるものである。

床面からは釘は全く出土しておらず、築造時と考えられる棺台が玄室中央にあることから、埋葬は石棺による一度限りの埋葬であったと考えられる。第8層上面から土師器皿(30)が1点出土しており、石棺が持ち出された年代を示すものであろう。

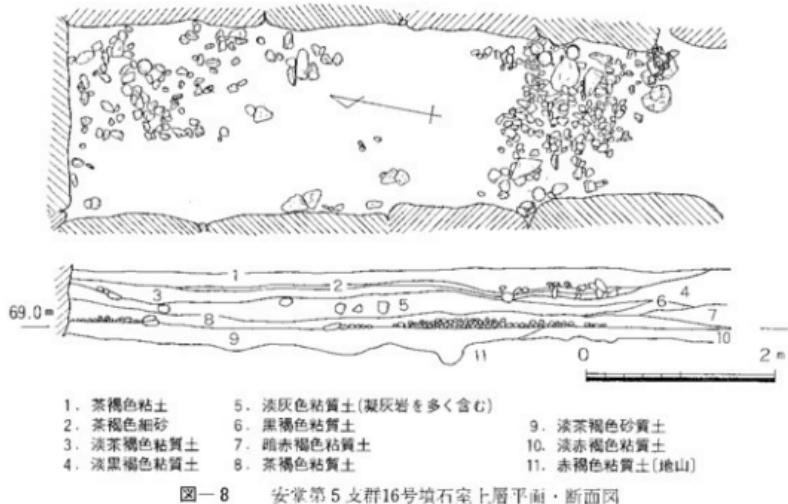


図-8 安塚第5支群16号墳石室上層平面・断面図

第5層淡灰色砂質土上面には、部分的に角礫が散かれ、瓦器椀、土師器羽蓋などの出土をみた。礫敷は玄室隅北東部分と奥壁から450~640cmの渋道部分の二ヶ所にみられ、前者では礫敷中央部分から完形の瓦器椀(45)1点と土師器羽笠片(43)が出土した。また後者では、礫敷の周辺部分、側壁近くから土器が出土した。東壁北寄りからは完形、もしくは完形に近い瓦器椀(46~49)4点が出土し、北端の瓦器は倒立状態、南側の瓦器は二個体を重ねた状態で出土した。東壁南寄りからは、土師器の皿、羽蓋片が多数出土している。また、この部分には、若干の焼土、炭が認められた。西壁際からは、瓦器椀(52)、土師器皿(42)、瓦器椀(54)の順に3個体を重ね、その上に倒立状態の瓦器椀の破片がのった状態で土器が出土しており、やや離れて倒立状態の完形の瓦器椀(53)と瓦器椀の破片が出土している。

これらの遺物は、層位からも型式からも一時期のものと判断され、12世紀後半頃と推定される。この時期に、石室内で追善供養のような儀式が行なわれたのではないだろうか。如何なる人々が、如何なる目的のために行なったのか不明であるが、横穴式石室内からは瓦器がしばしば出土し、当時の信仰形態等を考えてみる必要がある。本古墳の場合、土器出土状況、層位から、この時期以後、石室内が荒らされた形跡は認められず、瓦器等はほぼ原位置を保っていると考えられる。

以上の遺物以外に、渋道前面埋土から、土師器、須恵器、黑色土器、瓦器などが出土している。

③遺物

遺物は、周溝、石室上層、石室床面から出土している。以下、順に記述していく。

1は、周溝内肩部に安置されていた土師器甕。球形の体部に短く外反する口縁部を有する。

口縁端部は丸くおさめる。体部外面は指頭調整、内面はナデ調整。口縁部はヨコハケ後、ヨコナデを施す。

2～17は、周溝内から出土した遺物である。2～5は、周溝下層、他は上層から出土している。

2・3は、須恵器杯身。2の杯身は、立ち上がりが比較的高く、口縁端部はつまみ上げている。6世紀前半頃と考えられ、本古墳に先行するものである。おそらく、17の埴輪などと共に、周辺に存在した古墳に伴う遺物であろう。3は、非常に短い立ち上がりを有する杯身である。小片であるが、焼造時に伴うものであろう。

4は、須恵器小形高杯の脚部。脚は大きく裾広がりとなり、端部は外方へ突出し、下方へつまみ出している。

5は、土師器の小形碗。器壁は厚く、体部外面ナデ、内面ヨコハケ後ナデ、口縁部はヨコナデを施す。3～5は、周溝北西部下層から出土し、占墳焼造時に伴う遺物であろう。埴丘上、もしくは周溝での祭祀に伴う遺物であろう。

6～11は須恵器、12～16は土師器である。いずれも周溝上層から出土している。

6は、須恵器杯蓋。蓋内面にかえりを有する。7は、短い立ち上がりを有する杯身。

8は、須恵器台付壺。口縁部を欠失する。肩部に1条の凹線がめぐる。

9は、須恵器平瓶。全体の7割を残すが、口縁部、底部を欠損する。肩部は比較的、張りが強い。

10・11は、須恵器円面碗の破片である。10は碗部、11は脚部の破片。共に脚部に長方形の透し窓が開く形態のものであるが、同一個体ではない。透し窓は、鋭い工具によって切り取られ、

内面はケズリによる面取りがみられる。

12は、土師器杯。表面刺離のため、暗文の有無は不明である。口縁部はやや外反する。

13は、土師器鉢。深く、半球形の体部を有し、口縁部は肥厚し、端部上面は面をなす。

14は、土師器甕。体部最大径は、やや上方に位置し、内外面共にナデ調整。

15は、土師器羽釜。脚は短く、口縁部は短く外反する。体部外面タテハケ、内面は指頭押圧による調整。口縁部ヨコハケ後、ナデ調整。

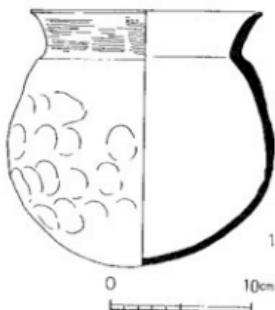
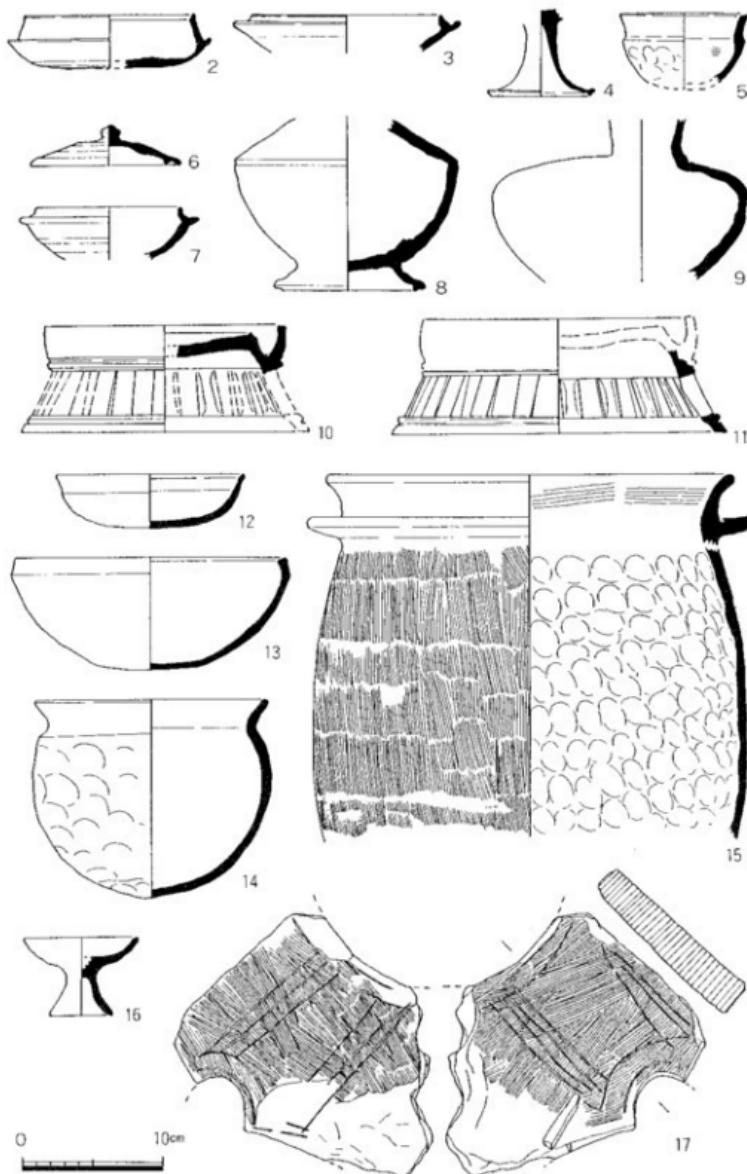


図 9 第5支群16号墳周溝内出土甕



图—10 安堂第5支群16号填周沟内出土遗物

16は、土師器小形高杯。手づくねで、浅い杯部、短い脚部を有する。

17は、埴輪。蓋の立ち飾り片である。下辺には半円形の切り込みがみられる。画面共、周囲には外形に沿った二重の刻線が施され、その間に平行する直線を施す。

18~26は、狭道部上層から出土した遺物である。

18~20は、須恵器杯蓋。18は、凹線状の稜線がみられるが、19・20ではみられない。18は、天井部にヘラ記号「×」がみられる。

21は、須恵器杯身であろう。類い立ち上がりを有し、非常に小形である。

22は、須恵器高杯の杯部。やはり短い立ち上がりを有し、脚部は欠失する。

23は、土師器鉢。半球形の体部はやや内窓し、口縁部はつまみ上げる形態となる。

24は、土師質の羽釜。鋸は短く、口縁部は外反し、厚い。体部は、やや張り出した形態をなす。口縁部外面、体部内面は板状工具によるナデの後、ナデ調整。体部外面には煤が付着している。石室内出土の羽釜（43・44）と同時期であろう。

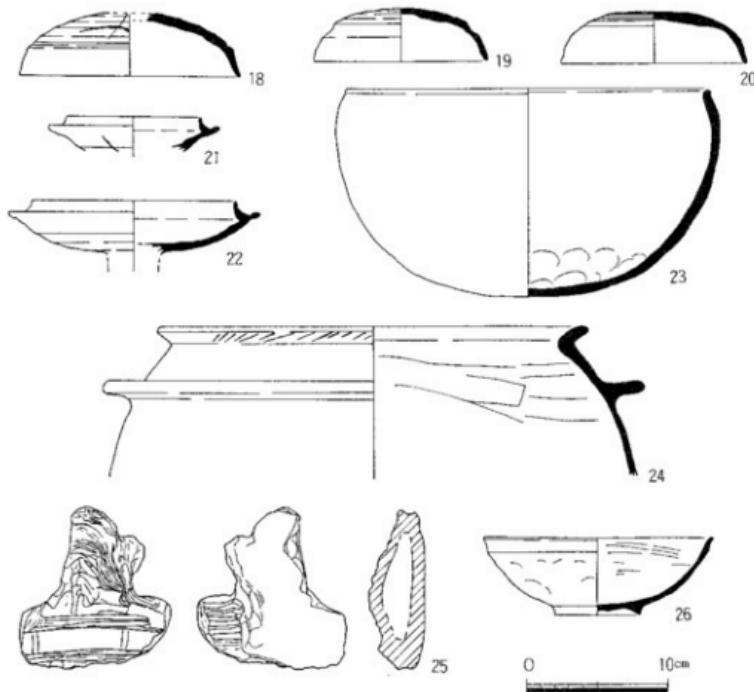


図-11 第5文群16号墳狭道部出土遺物

25は、須恵質の遺物であるが、性格が十分に把握できない。おそらく、仏を表現したものであろう。下端の縦横の直線は台座を表現したものと考えられ、上方は仏衣の裝を表現したものではないだろうか。裏面は平滑に仕上げられている。内部は中空になっており、型押しによって製作されたと考えられる。埴仏のようなものであろうか。

26は、瓦器碗。高台は低く、断面三角形状を呈する。

27~59は、石室内上層の遺構内から出土した遺物である。各遺物を出土地点別に分けると下記のようになる。

玄室北半出土 29、30、43、45

浹道北半出土 31、32、42、46~56

浹道南半出土 27、28、33~41、44、57~59

27は、須恵器壺の口縁部。口縁端部は肥厚する。

28は、黒色土器の杯底部。高台は断面三角形を呈する。

29は、土師器の甕。口縁は斜外方へのびる。体部内面ヘラケズリ。

30は、棺台の北東部から出土した土師器の皿。浅く、大形で、口縁端部は内方へ巻きこんだ形態を呈する。見込みにラセン暗文、内面に放射暗文を施す。石棺が持ち出された時期を示す遺物であろう。

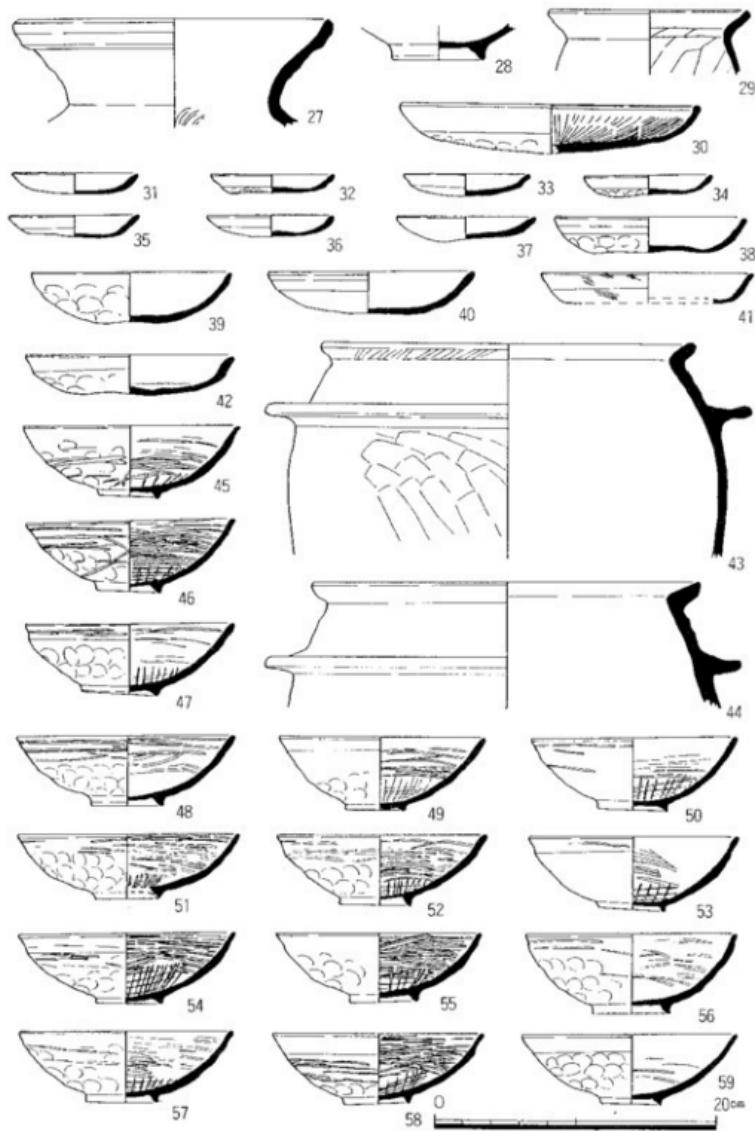
31~37は、土師器小皿。いずれも内舟気味の口縁部を伴い、端部は丸くおさめる。

38~42は、土師器杯。38・39・42は、外面に指痕痕を残す。

43・44は、土師質羽釜。43は胴張りの体部を有し、口縁部は短く外反する。体部外面ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部外面には工具の当り痕が残る。体部外面には、煤が付着している。44も同様の形態を呈すと考えられるが、口縁部は外方へ直角に屈曲し、上端は平坦面をなす。内面ナデ調整、外面には煤が付着する。

45~59は、瓦器碗。いずれも低く、断面が三角形状を呈する高台を伴うが、比較的高く、しっかりした高台を伴うもの（52・56）や、非常に低い高台を伴うもの（49）もみられる。口径はいずれも15cm前後、器高は5cm前後である。口縁部のヨコナデは弱いものが多く、48は口縁部外面に2条の凹線がみられる。磨耗のために不明なものを除くと、見込みの暗文はいずれも正格子である。内面のヘラミガキは密に施されるが、外面のヘラミガキは粗である。また、外面下半には指痕痕を残すものが多い。

これらの遺物は、やや下層から出土した30・39を除いて、ほぼ同一面から出土しており、31~38、40~59は同時期と考えられる。瓦器碗の形態からは、12世紀後半から13世紀初頭の間に遡ると考えられる。瓦器碗の微妙な形態の差は、出土状況から考えると、時期差を示すものではなく、同時に使用された瓦器碗のバラエティーと考えるべきものであろう。瓦器碗はほとんどが完形、もしくは完形に近いものであった。



圖一22 安堂第5支群16号墳石室内出土遺物

60～63は、いずれも石室内狭道部床面から出土した遺物である。

60は、狭道床面を形成する淡赤褐色粘質土内から出土した須恵器杯身片である。出土状況から考えると、床面形成時に混入したものと考えられる。

立ち上がりは非常に短く内傾する。

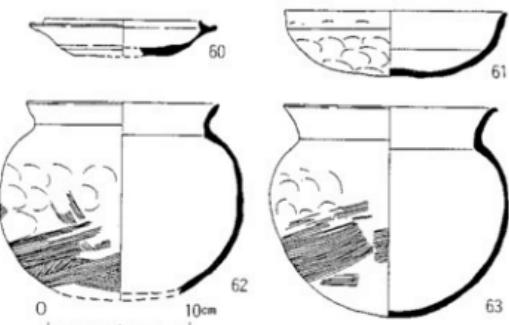


図13 第5支群16号墳石室床面出土遺物

61の土師器杯と63の土師器表は、狭道部東壁際から出土した。床面を掘り込んで表を正置しており、その内部から杯が出土しているが、前述のように、杯の口径のほうが表の口径より大きいため、おそらく、表内に何かを入れ、杯で蓋をしていたのであろう。

61は、やや深い杯部から短く外反する口縁部に至る。外面指頭調整、内面ナデ調整、口縁部ヨコナデを施す。ヘラミガキ、ヘラケズリ、暗文は認められない。口径15.6cm、器高4.6cm。

63の表は、球形の体部を呈し、口縁部は外反する。体部上半には指頭痕が残り、下半にはハケ調整。体部内面ナデ、口縁部ヨコナデ調整。口径15.2cm、器高15.1cm。

62の土師器表も、狭道西壁近くの床面から出土した。やや幅広の体部、口縁部は弱く外反する。63に比して、口縁部はかなり短い。調整は63と同様に、体部上半には指頭痕が残り、下半にはハケメがみられる。内面はナデ、口縁部はヨコナデである。口径13.5cm、器高14.2cm。

60～63は、出土状況から、一応埋葬時に伴う遺物と考えられ、その時期は7世紀前葉頃と推定される。周溝内から出土した遺物の一部（1、3～9）も、ほぼ同時期と考えられ、安堂第5支群16号墳の築造時期を示していると考えられる。

註

- (1) 正式には、平尾山古墳群安堂支群第5支群第16号墳とすべきであるが、安堂第5支群16号墳と簡略化する。安堂第6支群3号墳についても同様。

2. 安堂第6支群3号墳

安堂第6支群3号墳は、調査区の南西隅で発見された。切石造りの構穴式石室を内部主体とするが、天井石や西壁、および東壁の一部が既に失なわれていた。北側は最高所の住居跡群のA地区から急傾斜面となる。そのため、数回の土砂崩れが起こっているようであり、地山の崩壊土と地山の区別に困難を生じ、古墳の全容把握に苦労した。土砂崩れは、斜面下方に位置する本古墳の築造に伴う地山整形も一因となっていると考えられる。

土砂崩れによる堆積土内には、A地区の住居跡群に伴う遺物が含まれている。これらについては、C地区として後述する。

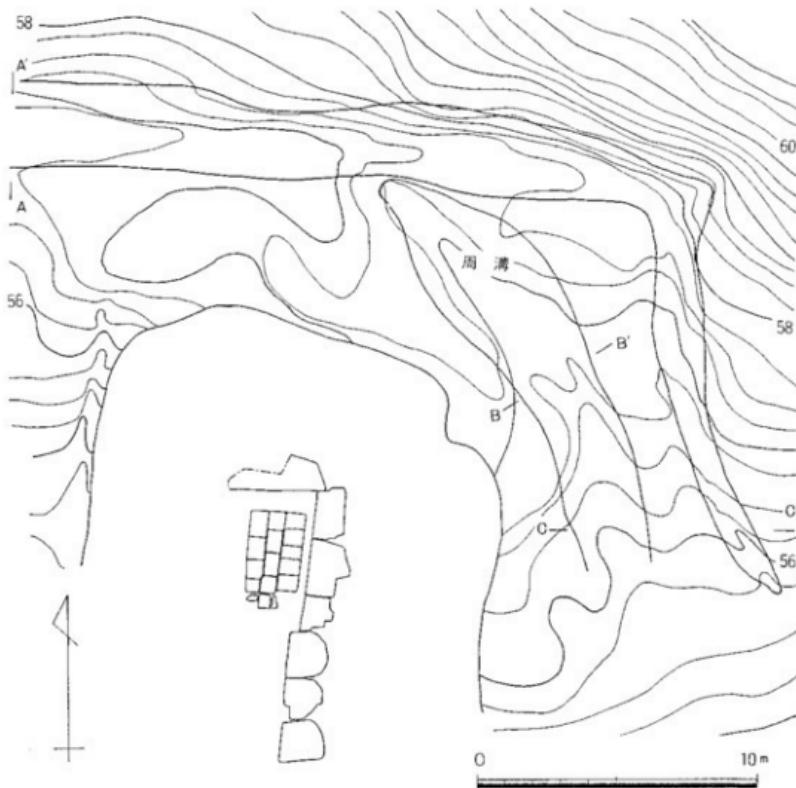


図-14 安堂第6支群3号墳地形測量図

①墳丘

第6支群3号墳は、南へ張り出す二本の尾根に挟まれた谷状地形の奥部に位置し、終末期古墳に一般にみられる立地条件に一致する。しかし、両尾根の中間地点よりやや東に位置するため、古墳の東側で高く、西側で低い地形を呈する。古墳は斜面地に築かれているため、当然のことながら、平坦面を得るために地山整形が行なわれている。奥壁から約11m北側で、地山を削平し、幅300cm前後、深さ30cm前後の東西方向の浅い溝状遺構が築かれ、それより南はほぼ平坦面をなす。この溝状遺構は、古墳の北東部ではほぼ直角に南へ屈曲し、その後、尾根に沿ってやや東へ振りながら南へ続いている。溝状遺構底面で、最も高い地点は北東角にあり、TP 58.0mである。西端は未調査であるが、周辺地形を考慮すると、南へ曲がることなく、消滅していると考えられる。石室中軸線を基準に、この溝状遺構によって画された平坦面の広さを復元すると、東西約24mとなる。この方形平坦面は、方形の墓域を意識したものと想像されるが、それと共に、墳丘盛土の確保や石室材の仮置き等にも利用されたのではないだろうか。

溝状遺構の北側では、10°強の斜面となり、更に20m北側で再びテラス状の面をなし、30°強の斜面となる。このテラス面が、人為的なものか、自然地形であるかは明らかにできなかった。

石室の北東では、弓状をなす周溝と考えられる溝を検出した。周溝は幅300cm前後を測り、最も深い部分で約60cmの深さを有する。長さは約17mまで確認できたが、石室東側で消滅し、北側では次第に浅くなり、全周していない。おそらく、古墳築造時から全周しておらず、地形の最も高い北東部にのみ造られたものであろう。それは、周囲から流れ込む雨水が墳丘に影響を及ぼすことを考慮したものであったと考えられ、必ずしも全周させる必要を認めなかつたのであろう。周溝の北端は、地山整形時の溝状遺構に接しながらも合流されていない。この2本の溝が、斜面上からの雨水から墳丘を保護する役割を果たしていたのであろう。

石室北西部には、周溝は認められないが、浅い不明瞭な凹地が弧状にみられ、墳丘裾にあたると考えられる。

墳丘封土は、石室の周間に数十cm、奥壁の北側で約1m残っていたのみであり、流失が激しい。そのため、周溝等から墳形、規模を復元せざるを得ない。復元すると、直径22~23mの円墳と考えられる。また、これらの数値から墳丘の中心部分を求めるとき、玄室奥壁から100cm前後南側、すなわち玄室中心よりやや北寄りに、その中心があると考えられる。

本古墳は、封土の流失、背後の斜面の崩落によって、築造後間もなく、その整美な姿は失なわれたと推定される。

(安村)

②外部施設

石室は、地山を掘り込んだ後、石を据え付けて構築させている。石室掘方は隅丸方形を呈するが、北東角でやや内側へ入り込んでいる。西側は攪乱等で破壊されており明瞭ではないが、東西約14mを測り、やや東側が大きくなっている。掘方は石室の規模から考えると、非常に大きなものであるが、これは後述する自然石を充填した排水施設の設置に関連するものと思われる。

掘方の深さは奥壁部分で約270cmを測り、底面はTP 54.3m前後ではほぼ一定である。壁面は北壁で約80°、東壁で約35°の傾斜を示し、東壁で緩やかになっている。また、東壁では1・2段のテラスが認められ、これが北東隅で掘方外形が乱れる原因になっているようである。掘方東側の幅が広く、テラスが築かれていることは、石室石材を東側から搬入し、作業時の資材仮置き、出入り等に利用したものではないだろうかと考えられる。また、このテラスの上面に、幅20cm前後の平鋸らしき工具痕が残されていた。

石室は玄室のみ2段積みであったと考えているが、1段目を設置した後、掘方内を版築によって埋め戻し、2段目の石材を設置した後、版築ではなく盛土によって古墳を築いていると考えられる。掘方内には、石材を設置する際に使用されたかと思える直徑30cm前後の小柱穴が数個みられる。掘方壁面に横方向に穿たれているものもある。

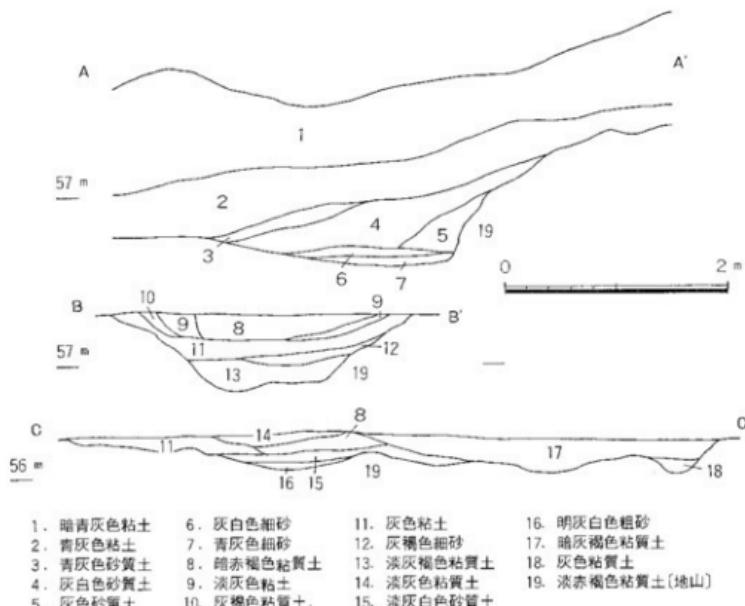


図-15 安堂第6支群3号墳周溝・地山整形面土層図

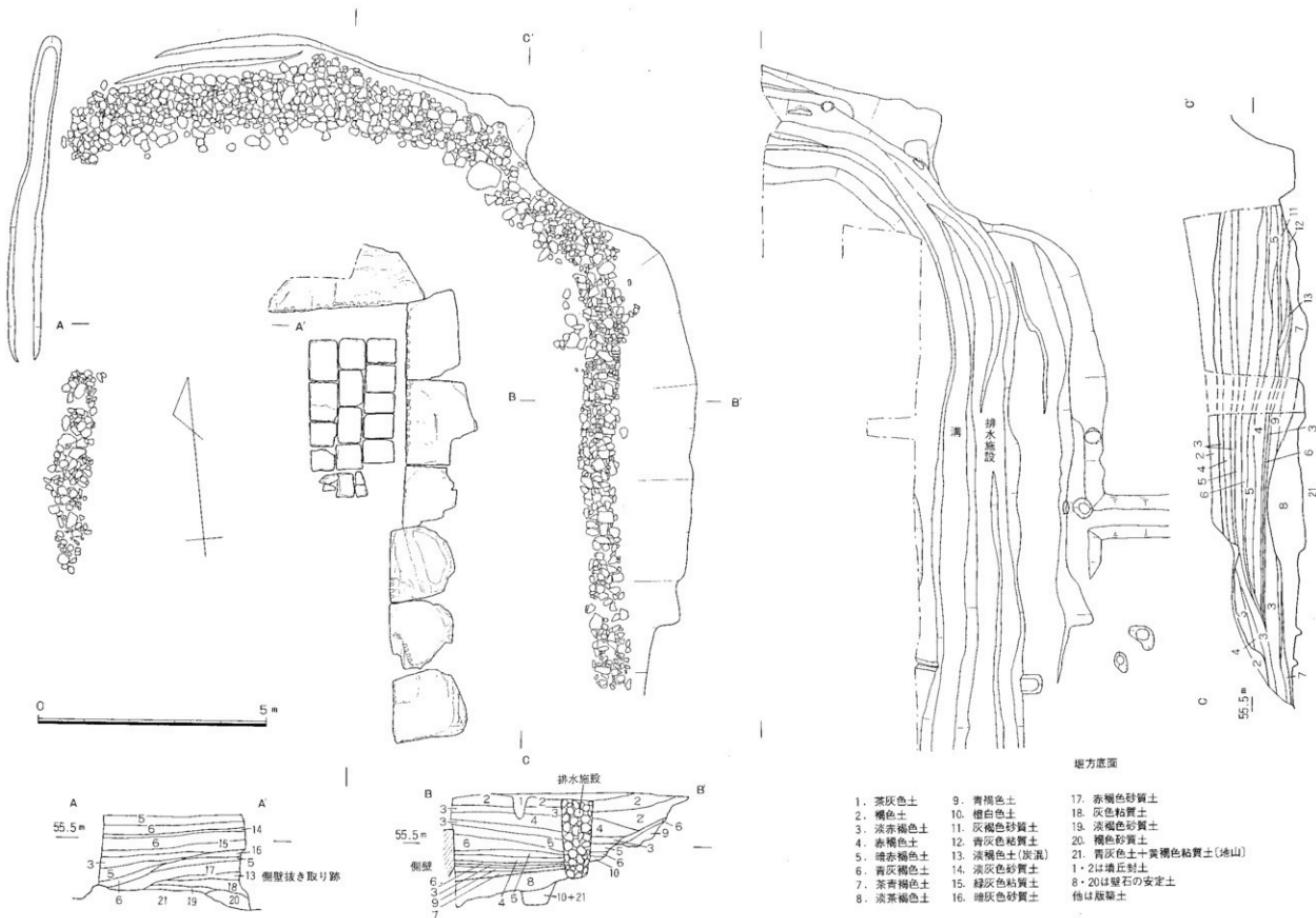


図-16 安室第6支群3号墳全体図

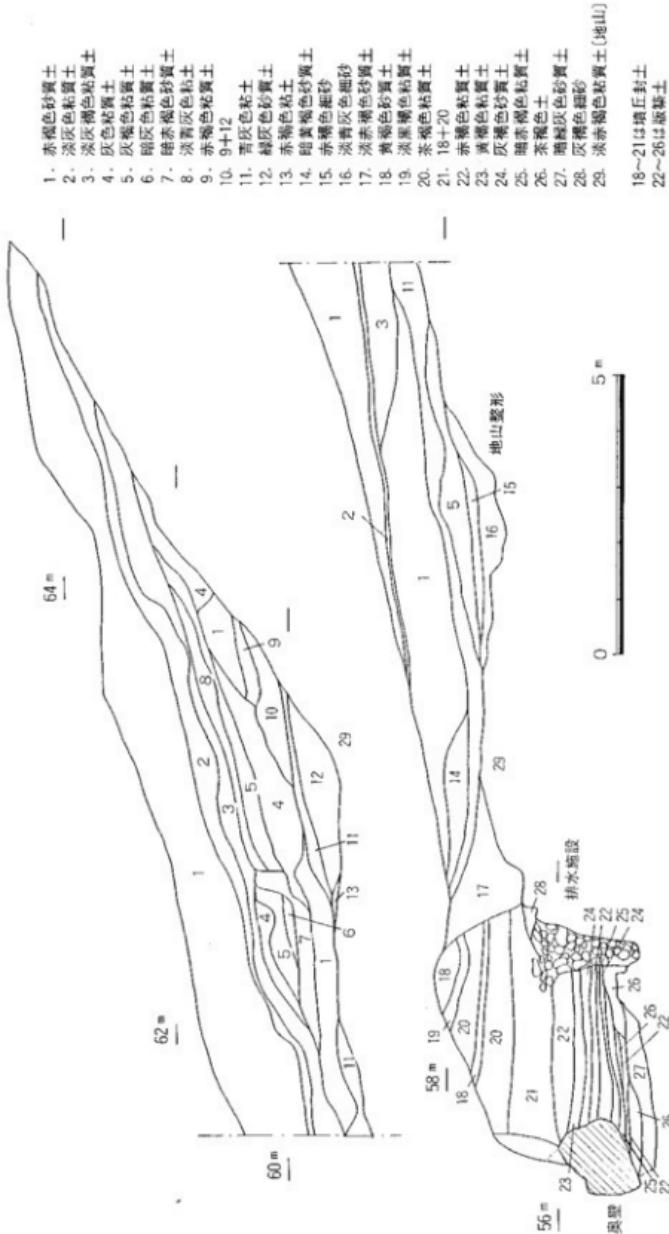


図-17 安堂第6支群3号墳北側土層図

石室材は、第8層や第20層によって安定され、版築状に数層を埋め戻した後、TP 55.2m付近から明瞭な版築を行なっている。各版築層は、やや外側へ下がっているものの、ほぼ水平層をなし、1層の厚さは2~3cm程度である。版築上面の観察によると、先端が丸味をおびた直径5cm前後の棒状の道具で突き固めているようである。版築層は土層間に示すように、厚さ10~20cm前後で土質が変化する。基本的には赤褐色系の粘質土と青灰色ないし黄褐色系の粘質土を交互に積んでいる。版築はTP 56.2m前後の高さで終えられ、それ以上は盛土である。版築上面は石室1段目上面より約40cm低く、版築終了後、第2層などの若干の盛土がなされ、2段目の石材を積み上げたものと考えられる。2段目の石材積み上げ時に使用されたと思われる小柱穴（第1層）が認められる。

石室掘方の排水施設は、この時点で版築層を掘削し、自然石を充填して塗かれている。排水施設上面は幅70~140cmを測るが、底面では約30cm幅となり、1人が掘削可能な最小の幅と考えられる。排水施設に使用されている石材は、花崗岩等の角礫が多く、大きさも20cm前後のものを中心に、均一でない。地山内にはあまり礫が含まれていないため、これらの礫は高井田川などで採集してきたものと、自然石を破碎したもののが含まれていると考えられる。排水施設は調査時でも十分に機能を果たしていた。この排水施設は、墳丘外から浸透してくる水が石室内に入ることを防ぐための施設である。

同様な施設を築いている古墳として、奈良県忍坂第8号墳・第9号墳をあげることができる。地山を掘り下げて、石室周囲に排水施設を築いている点では一致するが、忍坂例では安山岩の板石によって暗渠状に築かれており、石室が磚椁式石室である点が大きく異なる。時期は7世紀中葉~後半とされており、本古墳に近い時期と考えられるが、直接関連があるとは考え難い。⁽¹⁾

石室掘方底面の溝は、石室北側では排水施設の底面に一致しているため、排水施設の底面とする目的で掘られたものではないかと考えられる。版築上面から幅の狭い排水施設を掘削し、更に堅い地山を掘削することが困難なため、事前に地山を掘削しておき、排水施設を設置する予定であったと考えられる。ところが、排水施設は石室北側ではこの溝を使用しているものの、北東部から東にかけて、この溝の100~150cm外側へ塗かれている。そのため、東側の排水溝底面はわずか10cm程度、地山を掘り下げているだけである。なぜ、東側で排水施設と溝の位置がずれてしまったのかは明らかでない。

排水施設を築いた後の盛土は、厚さ30~50cm程度に、茶褐色系の粘質土と黄褐色系の砂質土を交互に盛っている。しかし、その上部の天井の構造や墳丘高等は明らかにできなかった。

（安村）

註

(1)「忍坂第8号墳」「忍坂第9号墳」「桜井市外縁山北麓古墳群」奈良県立橿原考古学研究所

土層凡例

- 1 積 (灰色砂質土混じる)
- 2 褐灰岩層
- 3 灰色粘土
- 4 褐灰色土 (地山少々混じる)
- 5 棕色土
- 6 白色土 (地山)

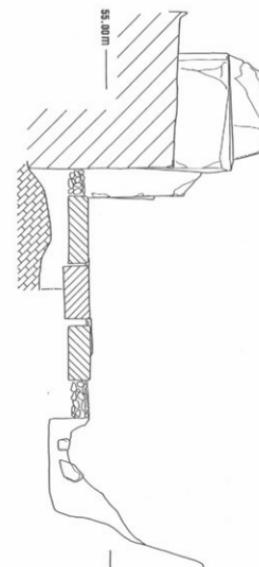
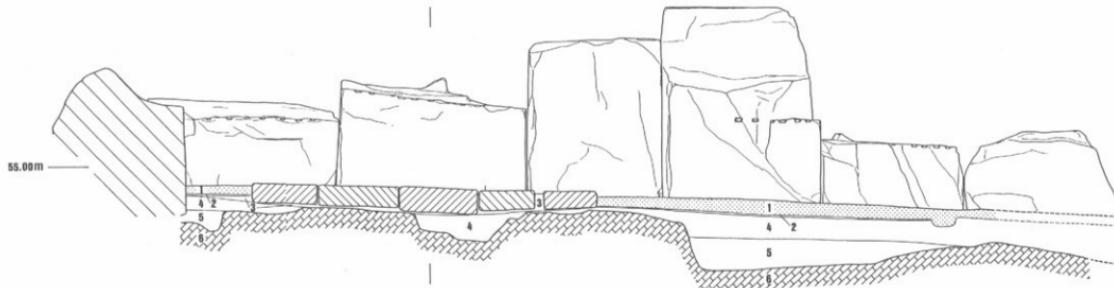
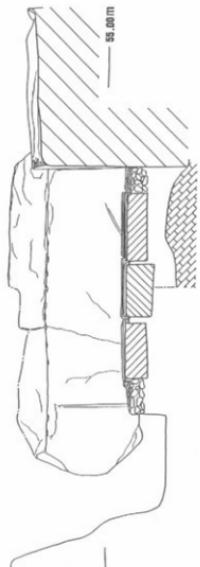


図-18 安堂第6支群3号填石室実測図

③石室

本古墳の内部主体は切石を用いたいわゆる岩屋山式の横穴式石室である。石材抜き取り痕の状況からみて、両袖式である。石室は玄室と狭道からなり、玄室には凝灰岩の切石による敷石、石室全面には5~10cm大の小礫が敷かれていた。石室の主軸方向は磁北に対してN-6°-E、つまり真北方向を示す。石室石材はすべて生駒山脈の南部で産出される黒雲母花崗岩である。

現状では、石室西側壁、天井石は後世の破壊によりすべて欠失している。奥壁は1石、東側壁は玄室3石、狭道3石が遺存しているが、破壊の際の失による損傷を受け、基底石の一部を残すのみで、わずかに玄室側壁第3石目だけがほぼ原況に近い状態にある。破壊の時期は西側壁の石材抜き取り痕から出土した磁器片から18世紀頃と考える。調査区周辺では、本古墳から持ち出されたと思われるような巨大な石材は確認されない。本古墳の石室構成を畿内に存在する他の岩屋山式石室を参考にして復元すると、奥壁は2段積み、玄室両側壁は2段積みで1段目は3石、2段目は2石で構成される。また狭道は東側壁裏側の土層の観察状況から1段3石で構成される。天井石は玄室、狭道とも1~2石で構成されるとそれぞれ推定される。

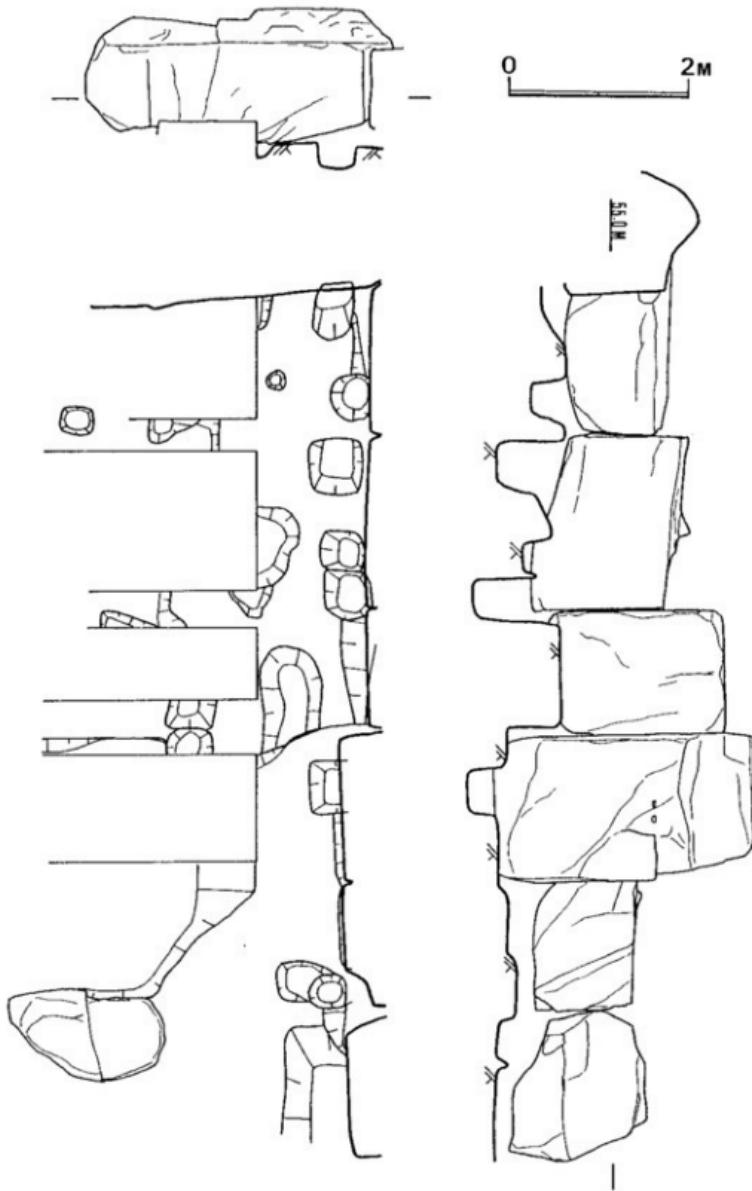
平面的にみると、奥壁西側がやや前へせり出しており、玄室平面プランは正長方形をなさない。また狭道は石室内軸線と平行せず、開きながら狭門に向かう。

石室床面には、褐色土、茶灰色土、灰色粘土を順に敷き、次いで凝灰岩の敷石を設置し、最後に敷石と壁体の間に河原石を充填する。硬屑の厚さは玄室奥では5cm、狭道南端では10cmと奥に行くにつれて薄くなっていく。傾斜は狭門に向って低くなり、高低差は25cmである。石室外に抜ける排水溝等の施設が他にみられないことから、この礫層が排水施設として機能していたのであろう。敷石については後述する。なお狭道南端附近で、硬屑下、茶灰色土を穿っている、石室中軸線に直交する長さ120cm、幅28cm、深さ10cmの溝を検出した。溝内には須恵器甕の破片が投入されていた。その溝が排水施設か、狭道東壁2石目の欠損箇所に位置的に対応することから閉塞施設に伴うものか、あるいは葬送儀礼に伴うものかどうかは不明である。

褐色土下において、石室中軸に対してほぼ平行する柱穴群を検出した。直径はいずれも50~60cmを測る。間隔、深さはまちまちである。それらは平面的に壁体に接する位置にあることから、石室架構に伴う遺構とみられる。また各石材を安定させ、日地高を整える方法としては、使用石材の形状に応じた地山掘削を行い、土を充填することで調整している。地山掘削の段階では玄室部では浅く、狭道部では袖石の大きさに合わせてか深く掘削している。

本古墳の内部主体構造の特色として、太平塚古墳（大阪府南河内郡太子町所在）にもみられる、奥壁両端に穿たれたり込みをあげることができる。奥壁の両側壁との接合部に、深さ2~3cm、東端での幅36cm、西端での幅68cmを測るくり込みがあり、その表面は壁体表面と比較して非常に平滑、丁寧に調整され、両側壁との接合をより一層密にしている。

石棺の遺存はない。ただし敷石上面に径5~20cmの凝灰岩片を多量に含む厚さ15cm前後の流



圖一九 安堂第6支群3号墳石室地山面実測図

入土層があった。その量、大きさ等から、敷石調整に伴う単なる削りかすとみるより、ことごとく破壊を受けた石棺の残片とみることができ、石棺の存在を充分想定しうる。

石室の破壊が著しい為、玄室2段目の内傾、いわゆる持ち送りの状況は不明である。また現状では、各石材間、壁面への漆喰の使用は全く認められない。

計測した石室各部の計測値は以下のとおりである。

全長	9.50m以上		
玄室長 東側壁	4.95m	漢道長	4.55m以上
玄室幅 奥壁	2.40m	漢道幅 玄門	1.80m (推定)
玄門	2.30m (推定)	漢道高 玄門	1.90m (推定)
玄室高 中央	2.40m (推定)		
(砾層上面から)			

(石室)

④凝灰岩敷石

床面検出時、玄室中央部に凝灰岩の切石による敷石の存在を確認した。全体の平面的な規模は、東西長1.85m、南北長3.40mを計測するものである。奥壁とは70cm、両側壁とは30cm隔たり、壁体との間には前述したように河原石が充填されている。敷石上面は、砾層上面より平均5cm高く、南に向かって傾斜している。敷石の設置は、茶灰色土で石室床面を整え、灰色粘土を玄室部に薄く敷いた後に行われた。敷石は南北方向に3列に配列されており、現状では東列5石、中列5石、西列4石の計14石が遺存している。敷設当初は16石で構成されていたようである。東南隅および西南隅の欠損箇所の精査により抜き取り痕が認められたことから、その存在が確認できた。欠損箇所周辺の破片は、いずれも構成していた石材の一部であろう。3列のうち、東列では各石材を横位置に配しているのに対し、中・西列では縦位置に配する。また東列の石材の平面形態はほぼ相似している。しかし中・西列の石材には相似性がない。これらのこととは、石材の設置が東列を基準に、順に行われたことを示すものである。

敷石は設置前にすでに細かな調整が施されていたようで、設置の際、接合面となる各面は調整痕を識別できないほど丁寧、平滑になされている。上面は、設置後、各石材の高さを合わせる為に再調整されている。

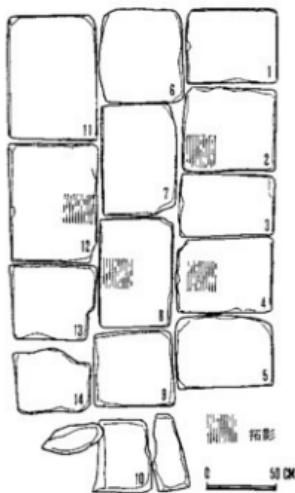


図-20 安堂第6支群3号埴板石平面図

番号	東西長cm	南北長cm	厚さcm	工具幅	方向	番号	東西長cm	南北長cm	厚さcm	工具幅	方向
1	64.5	54.0	20.0	3.5	E→W	8	53.5	80.0	26.5	3.5	S→N
2	66.0	60.0	22.0	5.0	NW→SE	9	58.0	55.0	18.0	3.5	S→N
3	68.0	46.0	20.0	3.5	NE→SW	10	34+α	51.0	16.5		
4	68.0	54.0	19.5	3.5	E→W	11	59.0	88.5	20.0	5.0	
5	69.5	52.0	18.0	3.5	SW→E	12	59.0	86.0	21.0	5.0	W→E
6	59.0	68.5	20.0	5.0	S→N	13	55.0	51.5	20.0	3.5	SW→NE
7	53.0	81.0	22.5	3.5	S→N	14	51.5	47.0	18.0	5.0	SE→NW

表-1 安堂第6支群3号墳凝灰岩敷石計測表

(空白箇所は、表面の風化が著しい為、計測不可)

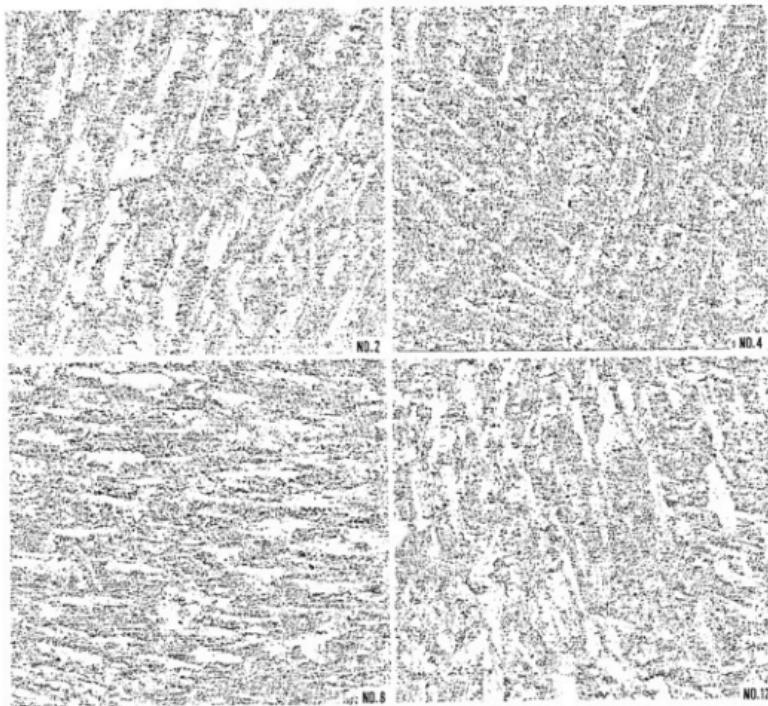


図-21 安堂第6支群3号墳敷石調整痕拓影(1:4)

しかし各石材ともに工具痕の凹凸がはげしく、「削る」というより「刻む・彫る」という状態に近い。また全体的にみた方向性も一定していない。使用工具は、残された工具痕から刃幅が約3.5cmのものと約5cmのものの2種類に大別できる。工具の種類、方向性、粗密さなどから、2~3人の手によって仕事がなされたことが窺える。

表1は各石材の計測値を示したものである。

(石田)

⑤出土遺物

遺物のはとんどが石室内礫層から出土した。磁器片のみ西側壁抜き取りからの出土である。

1、2は須恵器の蓋。1は敷石東南欠損部から出土。口径14.7cm、器高2.9cmを測る。胎土は精良、焼成は良好、色調は明灰色を呈する。中央からずれてやや扁平なつまみが付き、内面にはかえりを有する。調整は外面上部等は回転ヘラケズリ、外面下部等と内面は回転ナデ。2は敷石北側礫層中から出土。口径13.0cm、器高2.1cm。青灰色を呈し、焼成は良好。0.5mm~1mmの砂粒を含む。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。口縁端部は内側へ屈曲し、断面は三角形。つまみは扁平で端部は斜めに張り上がりシャープである。

3は土師器の蓋。出土位置は敷石の南、礫に混在。口径15.6cm、器高3.3cm。天井部中央につまみが付く。内外面ともナデ調整で、外面には6~7本/cmのヘラミガキを施す。赤褐色。

4、5は須恵器杯。「ハ」字状の高台が貼り付く。接地面は平らである。4は口径9.7cm、器高4.1cm。胎土は1mm前後の砂粒を含み粗い。色調は青灰色、焼成は良好。内外面体部は回転ナデ。外面底部は不定方向ナデで調整としては粗い。体部はやや内寄気味に立つ。5は口径15.5cm、器高4.6cm。青灰色を呈し、焼成は良好。胎土には1mm前後の砂粒を含む。内外面体部は回転ナデ。外面体部下部から底部にかけては不定方向ナデで粗い。体部は外反気味である。出土地点は4、5とも敷石東南欠損箇所附近で散乱していた。

6~8は土師器杯。6は口径11.8cm、器高3.1cmを測る。内外面ともナデ調整。外面底部には指頭圧痕が残る。内面はナデ調整後、側0.5mmの放射状の暗文を施す。赤褐色を呈し、0.5mmの砂粒を含む。7は口径17.8cm、器高3.7cm。内面と外面体部はナデ調整、外面底部は指押えによる。内面には斜め放射状の暗文を施す。見込みには螺旋状の暗文。底部は平たく、体部から口縁にかけては外反するが端部は内側に巻き込む。8は口径19.4cm、器高4.7cm。平たい底部から斜めに立ち、口縁端で軽く巻き込む。内外面とも摩滅が著しく、調整、暗文等は不明である。6は炭化礫層中、7は敷石東北辺、8は敷石東南からそれぞれ出土した。

9は土師器高杯。脚部はなく杯部のみ石室東北部礫層中から出土した。口径は27.4cm、現存高3.0cm。杯部底部から扁平に開き、口縁部で水平方向に屈曲する。端部で軽く巻き込み、丸くおさめる。内外面ともナデ調整。外面体部下半にはヘラケズリも施される。内面には斜め放射状と螺旋状の暗文。内面は赤褐色、外面は黒赤褐色を呈する。

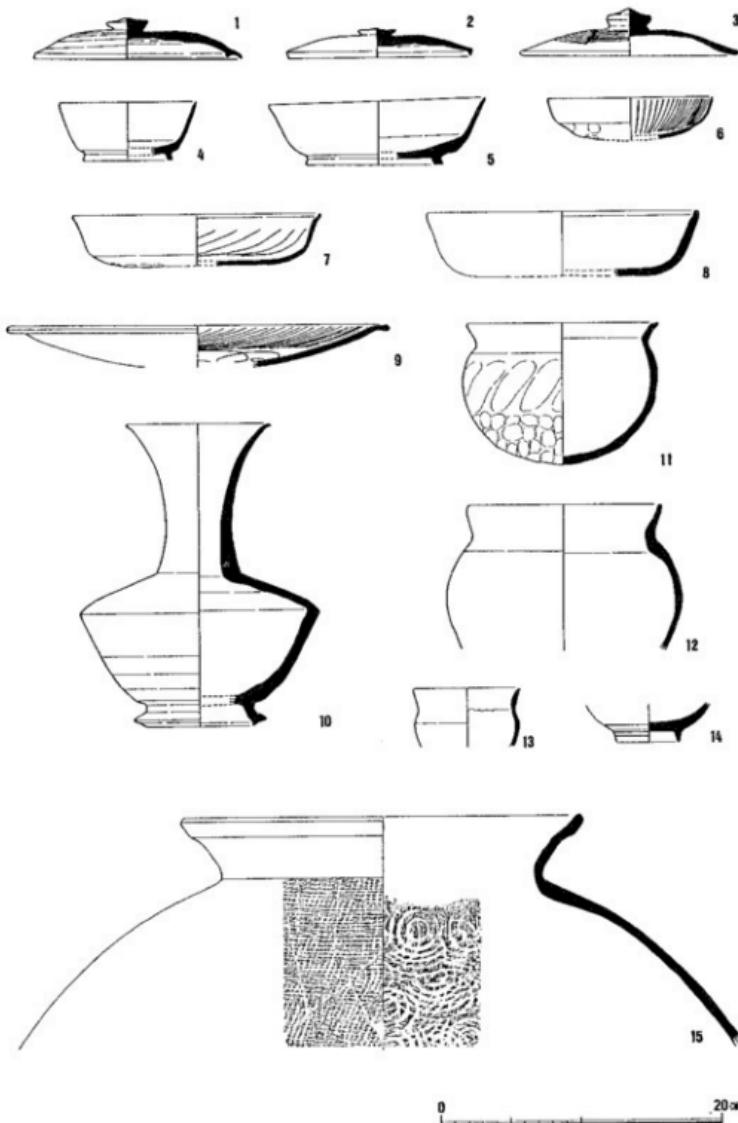


図-22 安堂第6支群3号墳出土遺物

10は須恵器長頸壺。口径10.6cm、最大径17.2cm、器高21.4cmを測る。内外面とも回転ナデ調整。外面体部は回転ヘラケズリ調整を施す。色調は青灰色を呈する。焼成は堅敏、良好。胎土には1mm前後の砂粒を含む。高台は底部に「ハ」字状に貼りつく。接地部の稜は明瞭で断面は三角形。体部はやや内弯し、肩部が張り、最大径はここにもとめられる。頭部は基部から大きく外反する。口縁端部は水平に近く、先端は丸くおさめる。口径は頭部基部径より大きい。淡道東壁第1石と第2石の接合部に沿う位置に散在していた。

11～13は土師器丸底壺。11の口径13.7cm、最大径14.0cm、器高10.1cm。内面と外面口縁はナデ調整、外面は指押えで圧痕が顕著に残る。口縁端部は水平な面をなす。外面のほぼ全面に煤が付着する。12は口径14.0cm、最大径16.9cmを測る。色調は淡い赤褐色。調整は外面体部は指押えと粗いナデ。指頭圧痕が若干みられる。口縁部は回転ナデ、内面は不定方向ナデ。体部は丸く、口縁はやや内弯気味に立つ。端部は丸い。頭基部での器壁が最も厚い。13は口径7.7cmを測り、色調は明褐色、胎土は砂粒が少なく細かい。全体的にナデ調整で外面体部は粗い。口縁はやや外反気味。内面頭基部に接合痕が残る。11～13いずれも敷石東南欠損箇所に散在する。

14は伊万里の楕。西側壁抜き取りから出土した。高台部のみ。断面は三角形を呈する。

15は須恵器甌。淡道南端礎層下溝状遺構中から出土。外面体部にはカキ目調整、平行タタキ調整を施す。内面は同心円タタキである。口縁はゆるやかに外反し、端部はわずかに肥厚する。

時期は14を除き、7世紀後葉～8世紀初頭のものである。

遺物がほとんど同時期を示し、それが追葬に伴うと考えられないことから古墳築造時期はそこに求められる。また奥壁のくり込みが岩屋山古墳にはみられない技法であること、7世紀後半に比定される太平塚古墳には同様の技法がみられる^[1]ことから、遺物がなく年代比定が困難な太平塚古墳の時期が若干下がる可能性があるとして、本古墳の年代を7世紀第Ⅳ四半期と比定する。次に敷石敷設の時期であるが、敷石除去中、No.7の下から須恵器蓋（遺物No.2）の破片が出土した。このことは敷石敷設が石室築造に伴わない可能性を示唆するものである。しかしそれを2次以降の埋葬に伴うと考えた場合、1次埋葬の痕跡、たとえば木棺であったなら釘等、墨結金具の遺存、また石棺であったなら敷石下からの石棺片の検出がそれぞれ全くないことが、敷設時期、埋葬形態については依然決定し難い状況である。

（石田）

註

（1）大阪文化財センター 山本 彰氏の御教示による。

3. A 地区の調査

調査地北西部の最高所は平坦地となり、1,000m²以上の面積を有する。今回の調査では、平坦地の南東部約340m²を調査し、その結果、ピット74、土塙4、溝13を検出した。地山は平坦に削平されており、周辺に括がっている平坦地は、検出された建物群の造営に伴って、削平、整地されたものと考えられる。現地表下30~50cmで地山に至り、遺物包含層はほとんど認められない。

ピットには建物の柱穴と考えられるものと、杭跡と考えられるものがある。検出されたピットから3棟の掘立柱建物と柵列が考えられ、杭跡も規則的な並び方がみられる。

建物-1・2は、調査地中央で検出され、建物-1の柱穴が建物-2の柱穴を切っていることから建物-1のほうが新しいことがわかる。建物-1・2は、共に南側が地崩れによって失なわれており、建物の全容は不明である。

建物-1は、東西3間、南北2間以上の規模を有し、東西の柱間寸法は124cm等間隔、南北の柱間寸法は166cm等間隔を測る。軸はN-9°-E。中央に間仕切りの柱と思えるピット-8

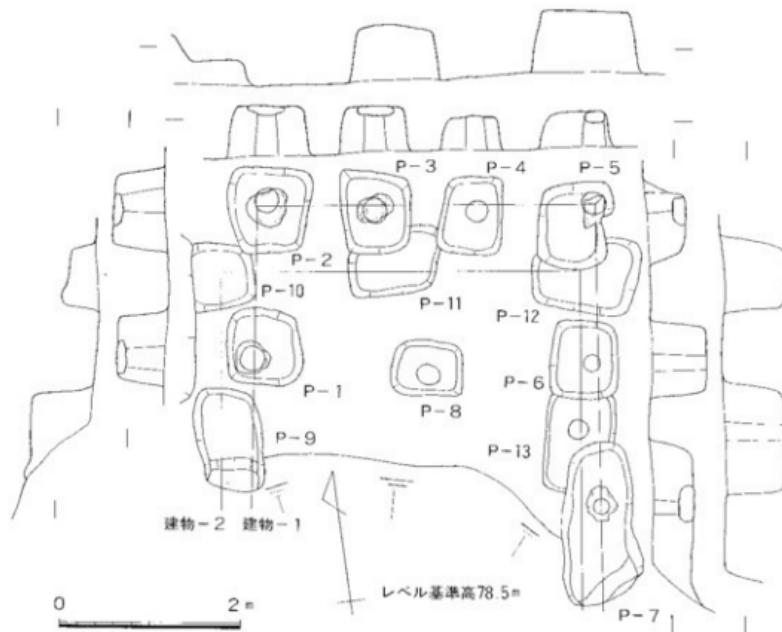


図-23 建物-1・2 造構図

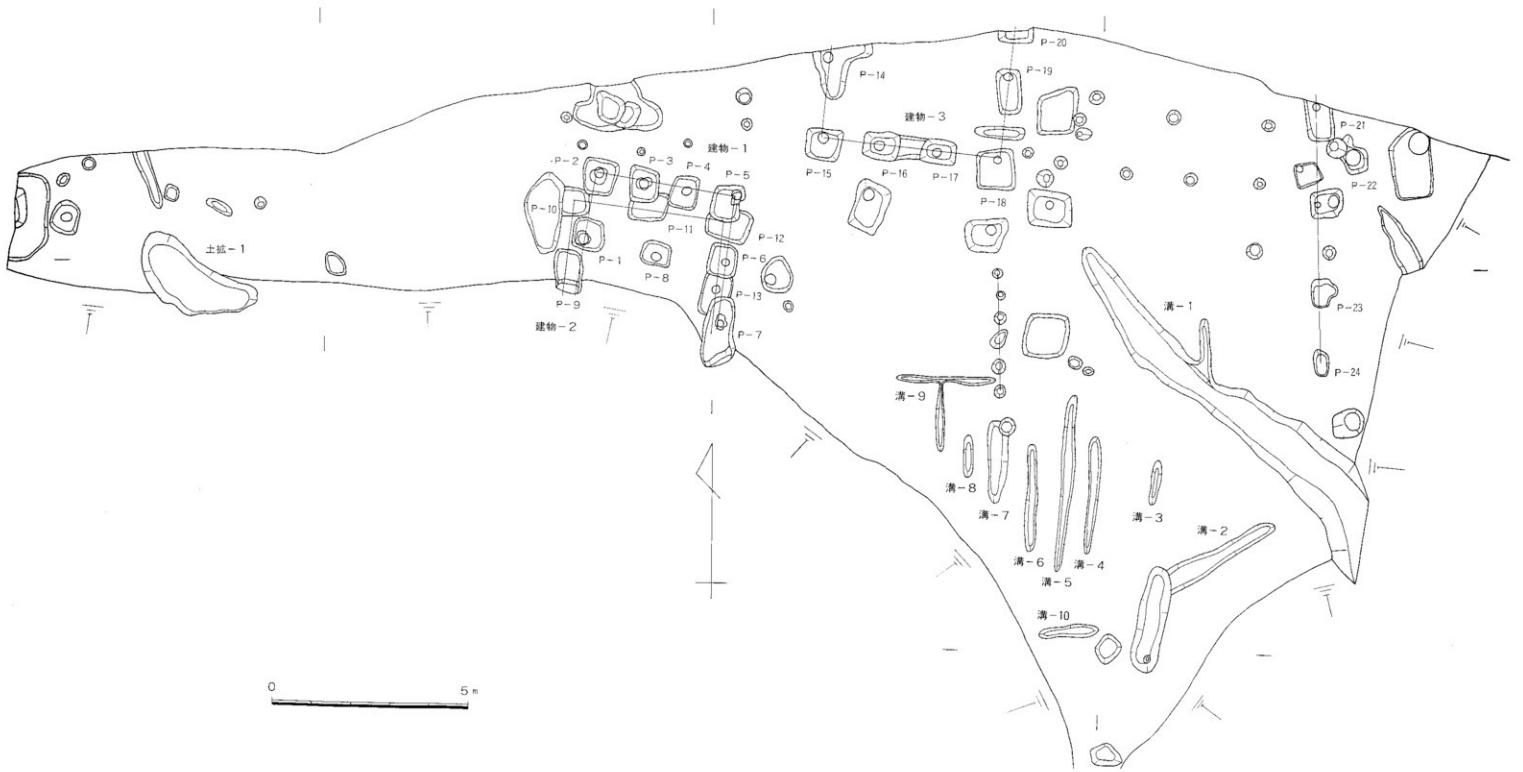


図-24 A地区遺構全体図

がある。柱穴掘方は平均70cm×90cmの規模で、ピット-1・2・3・5・7の底面には柱の沈下を防ぐために、扁平な石が置かれている。石の上面の高さは78.5m前後ではほぼ一定している。柱の直径は約20cmと復元される。ピット-2掘方内から、7世紀第3四半期頃の須恵器杯蓋片が出土しているが、他に時期を示す遺物はみられない。

建物-2は、東西2間、南北1間以上の規模である。建物-1のピット-7が南側で一段下がっていることから、切り合い関係は不明であったが、建物-2に伴うピットの一部と考えることもできる。東西の柱間寸法は196cm等間隔、南北の柱間寸法は180cm、軸はN-8°-Eとなり、建物-1にはほぼ一致する。柱穴掘方は平均70cm×100cmと建物-1よりやや大きく、深さも70cm前後を残し、建物-1より深い。柱の位置は不明なものが多く、また柱穴内の置石はみられない。時期を示す遺物は出土していない。

建物の方位、規模がほぼ一致することから、建物-1は建物-2の建て替えと判断できる。ピット-2から出土した時期を示す唯一の須恵器片を信用するならば、7世紀中葉から後葉にかけての時期を想定することができる。そして、建物建て替えの際には、柱を受ける石を置く技術が採用されている。これは、寺院建築の礎石から考えだされ、転用された技術ではないだろうか。

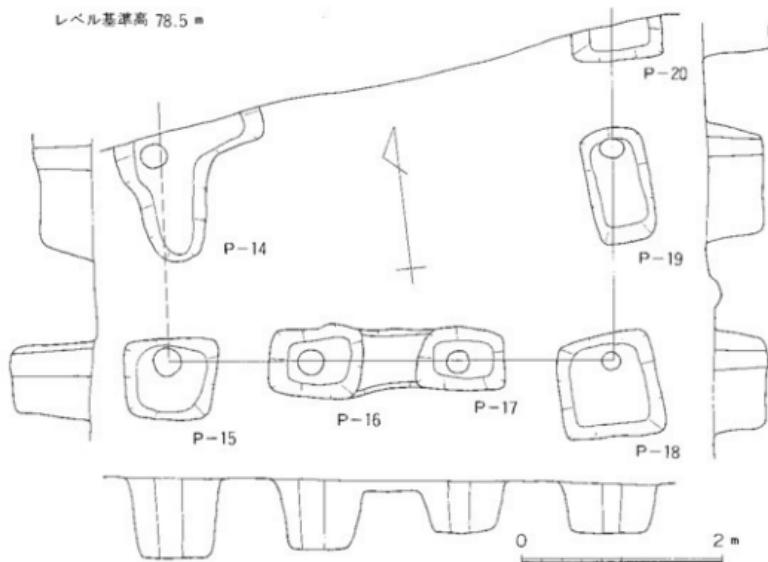


図-25 建物-3 造構図

建物-3は、東西3間、南北2間以上であるが、北側は調査地外へ続いており未確認である。東西の柱間寸法は146cm等間隔、南北は約210cmである。建物の軸はN-7°-E。柱穴掘方の大きさは均一でなく、建物隅角部の掘方が大きくなっている。ピット-14は不整形を呈し、ピット-16・17は浅く掘り込まれた同一の掘方内に、それぞれ掘られている。ピット-19は東西60cm、南北120cmの縦長の掘方内北端に柱が位置する。当初の計画位置より、柱の位置が北へ移動したために、掘方を掘り広げたのではないだろうか。ピット-14が不整形であることと関連するかもしれない。遺物はピット-14から須恵器杯蓋(1)が出土しており、建物-1より若干新しい時期が考えられる。

ピット-21-24は柵列と考えられる。方位はN-2°-Wを示し、柱穴掘方は40cm前後とやや小さい。ピット-22掘方内から須恵器杯蓋(2)と土師器杯(3)が出土している。杯蓋は、つまみが失なわれているが、ほぼ完形品である。

他に、建物柱穴と考えられるピットがいくつかあるが、建物を復元できるものはみられない。また小ピットは航跡と考えられ、規則的な配列を示すものもある。埋土内から須恵器や土師器の小片が出土しているが、時期を決定できるものではなく、性格も不明である。

溝-1は、幅100cm前後で南東へ流れる溝である。壁面は垂直に近い。遺物がほとんど出土しておらず、時期・性格不明。

溝-2は、溝-1と直角をなし、更に掘り下げられた南北方向の溝にとりつく。7世紀後半の須恵器杯蓋片が1点出土している。

溝-3~8は、南北方向へのびる小溝である。断面はU字形を呈し、10cm未溝の深さである。埋土は灰色砂質土。溝間の距離は70~80cmで、ほぼ等間隔である。溝-9はT字状をなし、溝-10は東西方向にのびる。いずれも溝-3~8と一連のものと考えられる。これらの溝は、溝-9・10によって画された南北640cmの範囲内に、南北方向の縦長の区画を造り出したものである。遺物は少量ではあるが、溝-4から須恵器杯蓋(4)が出土し、図化不能な土器の観察も加えて7世紀後半頃の溝と考えられる。掘立柱建物と時期、方位共に一致し、各溝の位置から耕作に関するものではないかと考えている。

土塙-1は、長径約600cm、短径約250cmの楕円形状の土塙である。北西から南東へ斜々に傾斜しており、現在の崖面にかかっているため、一部破壊されていると考えられる。第2層黒灰色砂質土層には多量の焼土・炭化物が含まれているが、上層と下層で時期差は認められない。遺物は残存状態の良好なものが多く、住居址の中心からやや離れていることや、焼土の出土を考えると、その性格を判断することは困難である。7世紀中葉~後葉と考えられる。

以上のように、A地区の遺構は7世紀中葉から末葉にかけての生活跡遺構と考えることができる。

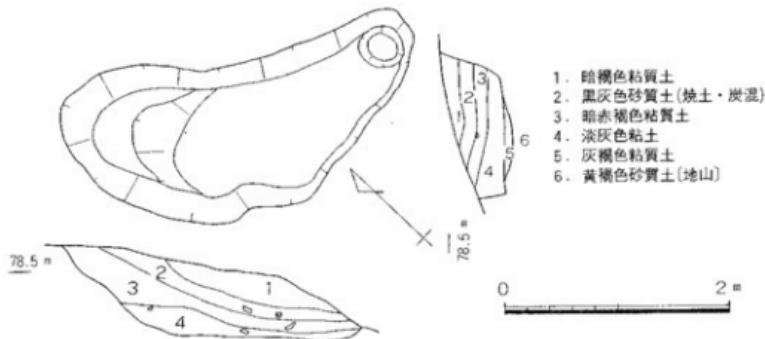


図-26 土塙-1 遺構図

遺物

1は、建物-3に伴うビット-14から出土した須恵器杯蓋である。天井部から口縁部にかけてゆるやかな曲線をなし、内面には低く、鈍いかえりを有する。扁平なつまみを伴うものであろう。口径18.6cm。

2・3は、ビット-22から出土した。2の須恵器杯蓋は、つまみを欠損するが、他は完残する。口縁部は天井部から直線状にのび、内面に低いかえりが付される。3は、ビット-22掘方内から出土した土師器の杯である。口縁部はやや外反する。調整は口縁部ヨコナデ、体部は内外面共にナデ、磨滅が著しいため暗文は不明である。

4は、溝-4から出土した須恵器の蓋。口縁部は直角に下方へ屈曲する。口径11.7cm。

5～15は、土塙-1から出土。5～7は、須恵器杯身。底部は回転ヘラ切り、体部は回転ナデ調整。いずれも口径9cm前後、器高3.3cm前後。

8・9は、土師器杯。8は、深い杯部から口縁部は直立気味に立ち上がる。表面の剥離が激しいが、斜放射二段暗文が部分的に残る。9の口縁部は薄く、外反する。表面剥離のため、調整・暗文は不明。

10は、大形の皿。底部は厚く、半らであり、口縁部はやや外反する。底部ヘラケズリ、体部ナデ、口縁部ヨコナデ。

11は、浅い鉢。器壁は比較的薄い。ナデ調整であろう。

12は、大形の鉢。器壁は厚く、口縁端部は、つまみあげるようなヨコナデを施す。底部はヘラケズリから一部ナデ、体部外面、内面はナデ。内面には正放射暗文が施されるが、下半は磨滅のため不明。

13・14は、小形の甌。13は、やや扁平な体部を呈し、底部は平底に近い丸底、体部は凹凸が

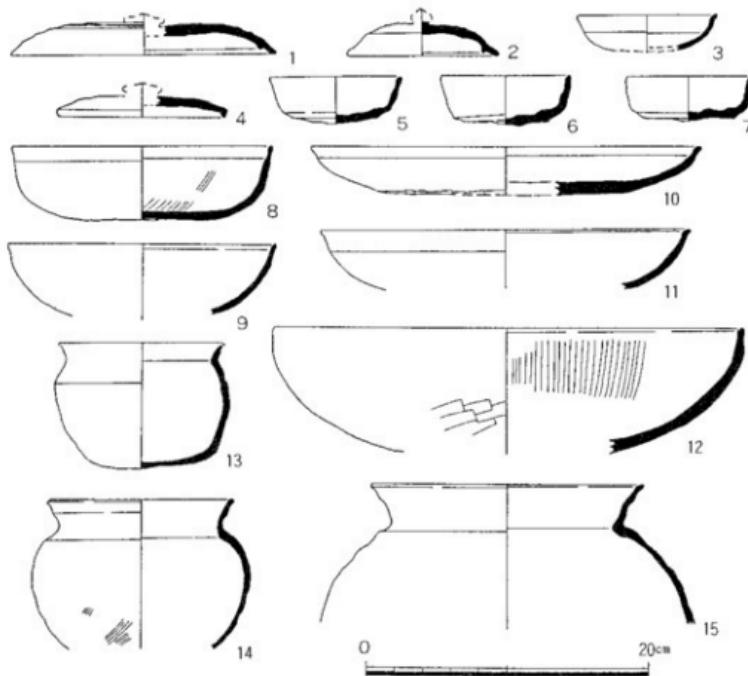


図-27 A地区出土遺物

激しい。口縁部は短く、弱く外反する。口縁端部は欠損するが、尖り気味になると思える。口縁部ヨコナデ、体部内外面共にナデ調整であるが、外面調整が強であるにもかかわらず、内面は丁寧なナデを施す。14は、底部を欠損するが、丸底であろう。体部最大径は肩部にあり、口縁部は外方へ直線状にのびる。口縁部ヨコナデ、外面体部上半はナデ、下半は右上がりのハケメと指頭調整。内面はナデ調整。

15は、胴長の甕であろう。口縁部は外方へ直線状にのび、端部は尖り気味になる。内面の口縁部と体部の境は鋭い。内外面共にナデ調整。外面には凹凸がみられる。

A地区は包含層が薄いため、包含層からの出土遺物には良好なものが少ない。

4. B地区の調査

B地区は、A地区的東側斜面下にあたり、その北端で安堂第5支群16号墳が発見されている。B地区は後世の削平が著しく、ピット12、溝1が検出されているのみである。これらの遺構群の北側には自然地形と考えられる谷状の落ち込みが北西から南東方向へのび、更にその北側には安堂第5支群16号墳の周構がめぐる。遺構群周辺では遺物包含層はほとんどみられず、谷状地形と古墳周溝上層から6世紀から中世にかけての遺物が出土し、谷状地形下層から弥生時代の石鏃1点が出土している。

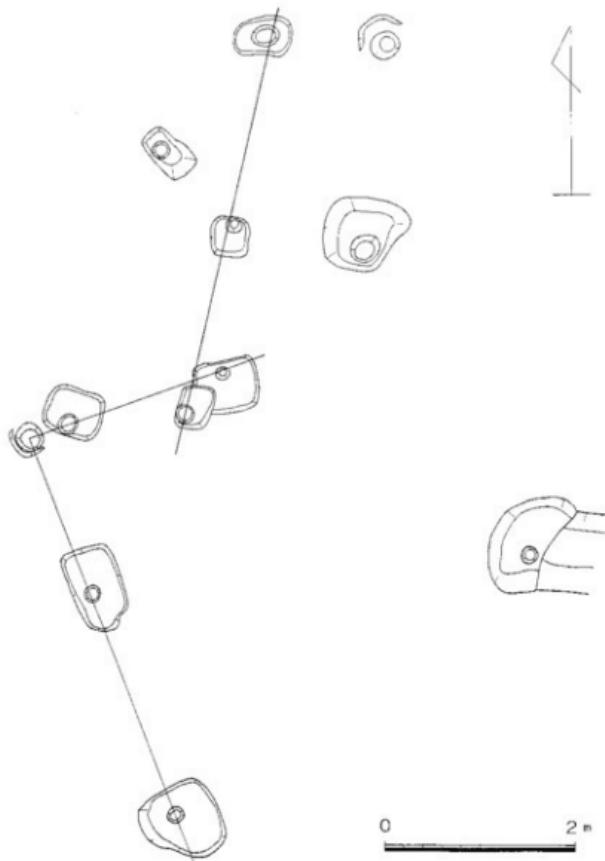


図-28 B地区遺構図

ピットは掘立柱建物に伴うと考えられるが、後世の削平によって、深さ数cmを残すのみであり、消滅したものも多いと思える。その中で、図に示したように、建物の一部を構成すると思える配列を示すピットがあるが、建物を復元するには至らない。遺物は全く出土しておらず、時期は不明。

溝は、一つのピットを切って東へと流れる幅50~60cmの溝である。自然流路と考えられる小溝であるか、埋土からは良好な黑色土器が多数出土している。

遺物

溝内からは、黑色土器の杯と土師器小皿の良好な一括遺物が出土している。

1は、須恵器の短頸彫口縁部。口縁部は強く外反し、端部は丸くおさめる。内外面共に回転ナデ調整。

2は、須恵器杯身。立ち上がりは短かく、内傾する。外面底部は回転ヘラケズリ、他は内外面共に回転ナデ調整。混入遺物であろう。

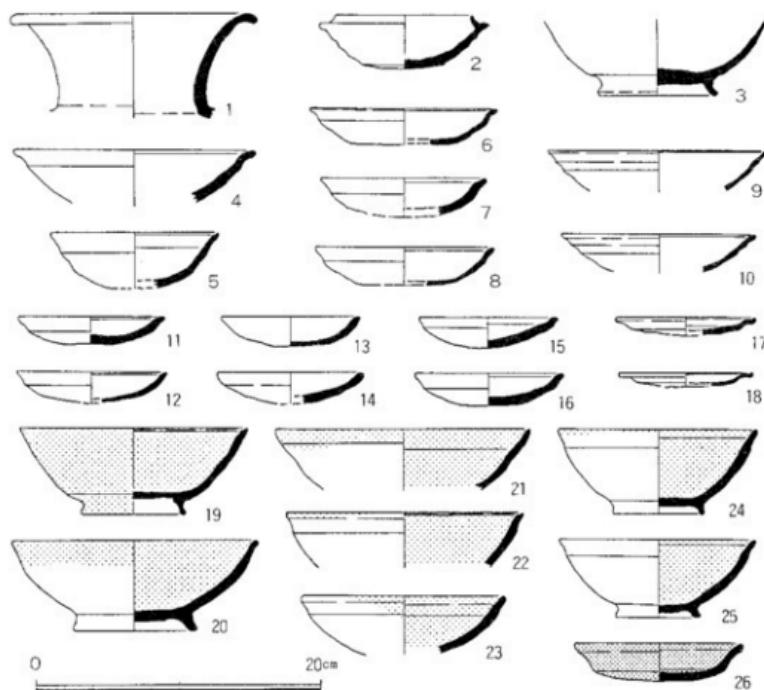


図-29 B地区溝内出土遺物

3は、須恵器の台付壺底部。台部は外方へ広がり、端部は丸くおさめる。底部の器壁は厚いが、体部は非常に薄い。胎土は緻密で、淡灰白色を呈する。内外面共に回転ナデ調整を施すが、内面はナデがやや雜なため、器壁に小さい凹凸がみられる。

4~18は、土師器。

4は、高杯の杯部。口縁端部は、やや外反し、器壁は厚い。内外面共にナデ調整。

5は、杯。口縁端部内面は四線状をなす。口縁部ヨコナデ、体部ナデ。

6~18は、小皿。6~8は、口縁端部やや外反し、器壁は比較的薄い。口径12cm前後、高さ2.7cm前後である。9~10は、口径に比して器高が低い。器壁は薄く、口縁部を三段に強くヨコナデする。口径はそれぞれ15.5cm、13.6cm。11~16は、器壁が厚く、体部から直線的に口縁部に至り、端部は尖り気味になる。口縁部のヨコナデは弱い。口径10cm前後、器高2.2cm前後を示す。17~18は、器壁が薄く、非常に浅い。口縁部は、水平に外方へのびた後、直立気味に肥厚する端部に至る。口径9.5cm前後、器高1.4cm前後である。

19~26は、黒色土器。

19~25は、杯。19は、内外面とも炭素を吸着した杯B、他は全て内面と口縁部外面の一部に炭素を吸着した杯Aである。19は、やや薄いが高い高台を有し、口縁部内面に一条の凹線を伴う。口径15.8cm、器高6.2cm。20は、厚く、斜下方へのびる高台を有する。21~22は、口径16cm前後、23は、口径14.2cm。24~25は、低い高台を伴い、口縁部のヨコナデはやや強い。口径14cm前後、器高6cm前後。

26は、内外面ともに炭素を吸着した小皿。口縁部は二段にヨコナデを施し、外反する端部は丸くおさめる。

遺清に伴う遺物は、溝内出土遺物のみである。包含層からは27~46の遺物が出土しており、その大半は清の北側の谷状地形上層から出土した遺物である。弥生時代の石鏃、6世紀~13世紀の土器が出上している。

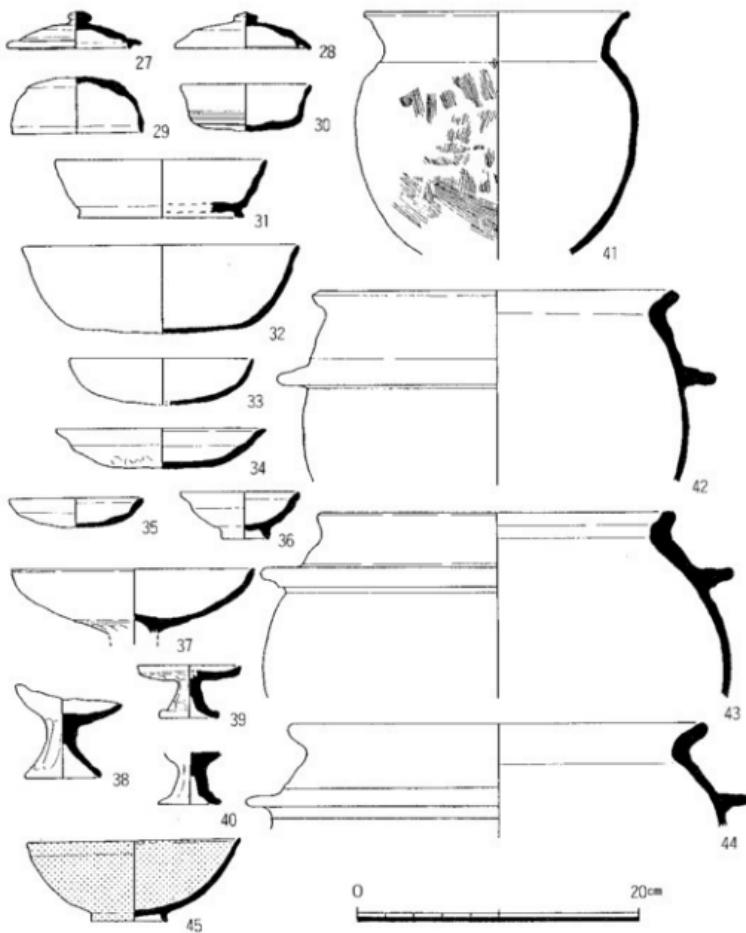
27~28は、須恵器杯蓋。共に宝珠つまみを付し、口縁部内面にかえりを有するが、27は、かえりが口縁端部より下方に至り、28は、口縁端部のはうが下方に位置する。

29は、須恵器蓋。直口壺の蓋であろう。端部は、つまみあげるようなヨコナデを施す。

30~31は、須恵器杯身。30は、口縁部やや外反し、体部下半に3条の沈線を伴う。31は、高台を作り杯身。高台は低く、口縁部は体部から直線状にのびる。

32~44は、土師器。

32は、大形の杯。口縁部ヨコナデ、体部内外面共にナデ調整と思えるが、表面剥離が著しく、暗文は不明。口径19.5cm、器高6.2cm。33は、杯。表面剥離のため、調整、暗文不明。34も杯。口縁部ヨコナデによって、やや外反。体部外面はナデ+指頭調整、内面ナデ調整。やや時期の下る杯である。



图·30 B地区出土遗物

35は、小皿。11~16と同類である。36は、小形の椀。断面三角形状の高台を有し、口縁部は強いヨコナデによって、段状をなす。

37は、高杯杯部。杯部下半に弱い段を有する。口縁端部は尖り気味になる。口縁部ヨコナデ、体部内外面共にナデ調整と思えるが、表面剥離のため詳細不明。38~40は、小形高杯。いずれも、粘土塊から手づくねで製作されたものである。38の杯部口縁は、水平をなさない。全体をナデによって仕上げるが、杯部外面はタテ方向のナデを施す。39は、杯部、脚部ともに、低平である。脚部は外方へ屈曲し、端部は肥厚する。杯部は水平にのび、端部をつまみあげる。脚部は、ねじるようなタテ方向のナデを施す。40は、杯部を欠失するが、粘土塊に尖端の丸い棒状工具をつきさし、脚部を成形する。脚部は外方へ広がり、タテ方向のナデを施す。

41は、甕。体部は球形状を呈し、丸底であろう。口縁部は弱く外反し、端部は丸くおさめる。体部外面ハケメ、内面上半はナデ、下半は指頭調整後のナデ調整。口縁部はヨコナデを施す。

42~44は、土師質の羽釜。42は鉗がやや下向き、口縁部は外反し、端部断面方形状を呈する。43は鉗がやや上向きになり、口縁は直立気味に立ち上がる。体部の張り出しが強い。44は鉗が薄く、水平方向にのびる。口縁は外反し、端部は丸くおさめる。いずれも口縁部ヨコナデ、体部は内外面ともナデ調整で仕上げる。

45は、黒色土器の杯。高台は薄く、低い。体部の器壁は薄く、口縁部は弱く外反する。内外面ともナデによって仕上げる。炭素は内外面全面に吸着するが、吸着はやや甘い。

石製品は石鏃が出土しており、B地区から出土した1点(46)以外に、C地区から出土した1点(47)もここで扱う。46は、淡緑色のチャート製石鏃であり、鈍い光沢をもつ。円基無茎式であるが、先端を欠損する。推定長3.4cm、厚さ0.3cm。刃部には細かい剥離が施される。弥生時代前期であろうか。47は、サヌカイト製石鏃。先端、基部とともに欠損するが、かなり大型の石鏃になるであろう。刃部には非常に細かい剥離が施される。46は、谷状地形の下層から出土しており、他にサヌカイトの原石や剝片も出土している。やはり弥生時代のものと思えるが、土器は全く出土していない。

B地区包含層の遺物には、上方のA地区から転落した遺物も、少なからず含まれていると考えられる。

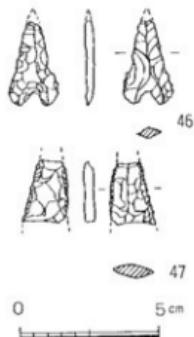


図-31 B・C地区出土土石器

5. C 地区の調査

C 地区は、調査地の南西部にあたり、安堂第 6 支群 3 号墳周辺地域である。A 地区から C 地区にかけては急斜面をなし、過去数回の崩落が生じている。遺構は安堂第 6 支群 3 号墳とその周辺施設、古墳東方で火葬墓 1 基、A 地区南斜面で土師器小皿と白磁碗をセットに埋納した土塙、その他不定形の土塙状を呈する落ち込みなどが確認されている。

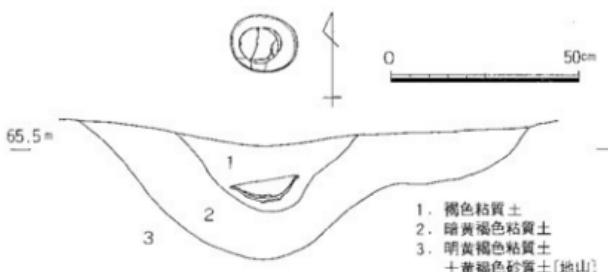


図-32 白磁碗出土状況

白磁碗は、A 地区南斜面、C 地区北側で出土した。白磁碗は、直径約 120cm の円形土塙中層付近に正置された状態で出土し、その内底に土師器の小皿が 1 点置かれていた。現地表下約 160 cm で上塙上面に至り、約 30cm の深さに掘られている。土塙下半を暗黄褐色粘質土で埋め戻した後、白磁碗、土師器小皿が置かれ、褐色粘質土で埋め戻されている。土師器小皿以外には共伴する遺物は認められなかった。上塙上層の削半が考えられるため、盛土がなされていたか否か不明である。しかし、斜面地から出土しており、同時期の遺物が周辺からほとんど出土していないため、墓、もしくは、何らかの祭祀に伴うものと考えられる。

土師器小皿は、淡褐色を呈し、焼成良好。口縁部ヨコナデ、他はナデ調整。口縁部はヨコナデによって外反気味となり、端部は丸くおさめる。口径 8.6cm、器高 1.2cm。白磁碗内底面にややすれた状態で正置されていた。

白磁碗は、口縁部がやや薄い玉縁をなし、高台は低く、やや外開きになる。内底面には一条の沈線がめぐる。釉は淡灰白色、外面は底部から約 3 分の 1 、内面は沈線まで施釉される。胎土は白色を呈し、緻密。焼成は良好堅緻である。中国製白磁である。

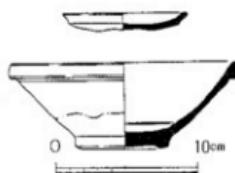


図-33 白磁碗・土師器小皿

古墓

古墓は調査地の南西で検出した。安堂第6支群3号墳の東側にある。周溝外である。

南半が後世の開墾によるものか、削平をうけている。平面は東西、南北とも40cmの隅丸方形状を呈する。深さは20cmである。

埋葬過程は埋土の状況から次のように考えられる。墓坑掘削後、灰色粘質土（5層）をしく。次いで、炭を多量に含む茶褐色土、灰色粘質土（3、4層）を人骨片、土器片とともに埋納する。そして黒褐色土（2層）を入れる。釘の出土はこの層からである。人骨片も検出された。3、4層を含めたその量はわずかである。なお削平が著しいため、古墓を覆っていたであろう盛土の状況は不明である。出土遺物として土師器片、鉄釘がある。

土師器片は2片あるが、破片であるため図化できない。鉄釘は7本出土した。すべて頭部を折り曲げた形態のものである。釘6のみ

が完形で、その他は先端部を欠損しているが、いずれも全長8cm前後と推定される。断面は平均0.35×0.5cmの長方形である。木質の遺存は認められない。

（石田）

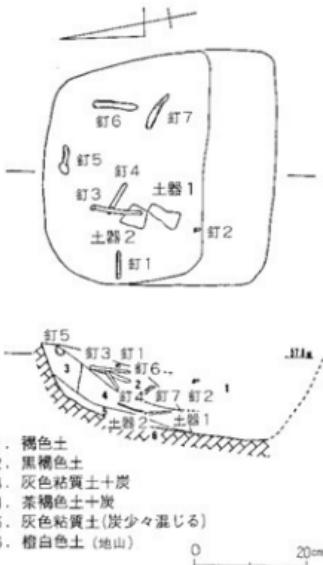


図-34 古墓遺構図

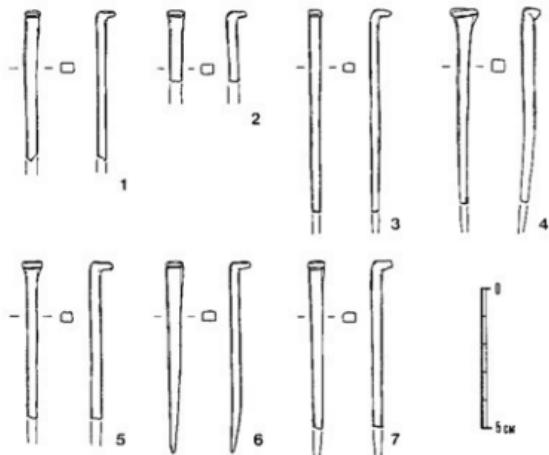


図-35 古墓出土鉄釘

遺物

C地区は数層に分層が可能な2m以上の厚さの包含層がみられ、各土層間には地山の二次堆積土がみられる。しかし、各層は共にA地区周辺の崩壊土の二次堆積層と考えられ、各層の遺物に時期差は認められない。遺物は6世紀から8世紀にかけてのものが認められ、7世紀代の遺物を中心とする。この崩落上は6支群3号墳を覆っており、崩落が6支群3号墳築造後に生じたことが確認できる。6支群3号墳築造に伴う地山削平が崩落の一因とも考えられる。

1~9は、須恵器。

1~6は、杯蓋。1・2は、つまみを伴わず、3~6は、宝珠つまみを有し、内面にかえりがみられる。

7・8は、杯身。7は、口縁部より低く、短い立ち上がりを有する。8は、立ち上がりが消失し、底部回転ヘラ切り未調整。

9は、短頭壺。肩部は直角に近く屈曲し、底部は平底であろう。口縁は強く外反し、端部でほぼ水平となり、やや上方へつまみあげる。全面回転ナデ調整。

10~20は、土師器。

10~12は、杯。10は、表面剥離が著しく、暗文の有無不明。11は、口縁部外反し、内面に正放射暗文を施す。12は、やや器壁が厚く、内面に正放射暗文、内底面にラセン状暗文がみられる。いずれも口縁部ヨコナデ、体部ナデ調整。

13は、小皿。器壁は薄く、口縁は水平に屈曲した後、直立気味に立ち上がり、端部は丸味をもつ。口縁部ヨコナデ、体部ナデ調整。

14は、高杯脚部。脚柱部は太く、短い。脚裾部は水平に近く広がり、端部は肥厚し、やや下方へ屈曲する。外面はタテ方向のヘラケズリによる11面の面取り、内面はタテ方向の指ナデを2段に施し、裾部はナデ調整。暗橙色を呈する。

15~18は、小形高杯。いずれも杯部欠損。粘土枕から手づくねによって製作されたものである。全面、ナデ、指頭調整。

19・20は、甕。いずれも口縁部が短く立ち上がり、胴長になるであろう。19は、口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ。20は、口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後ナデ、指頭調整。内面板状工具によるナデの痕跡残る。

21は、土馬。右前脚下半と尾部を欠損する。胴は横長の扁平な楕円形、脚は円柱状でやや内反りになる。首の断面形は縦長を呈し、頭部は円板状の粘土板を半折し、首に貼り付けられるため、横からは半月状にみえる。耳は頭頂部をつまみあげて表現し、目は竹管状工具の押圧によって表現。鼻から口にかけては、2本の縦の線刻と、ラッパ状につまみ出すことによって表現する。頭部から立髪にかけては手綱を表現したと思われる細い粘土糸の張り付けがみられる。全面、指頭によるナデ、押圧によって調整する。8世紀代に下るであろう。

22・23は、土製品。22は、馬形で、頭部を欠失するが、鐙、鞍、手綱などが写実的に表現される。現存長5.2cm。現存高4.8cm。23は、仏形。蓮弁を表現した台座に、合掌した阿弥陀仏が正座する。衣も表現され、光背も一部で確認できる。底部から円柱状の空洞が開いている。いずれも、型押しによるものであろう。ただし、両者とも、表掲資料である。

24は、砾石。両端破損するが、8面の面をなし、その一面に断面が台形状の溝がみられる。

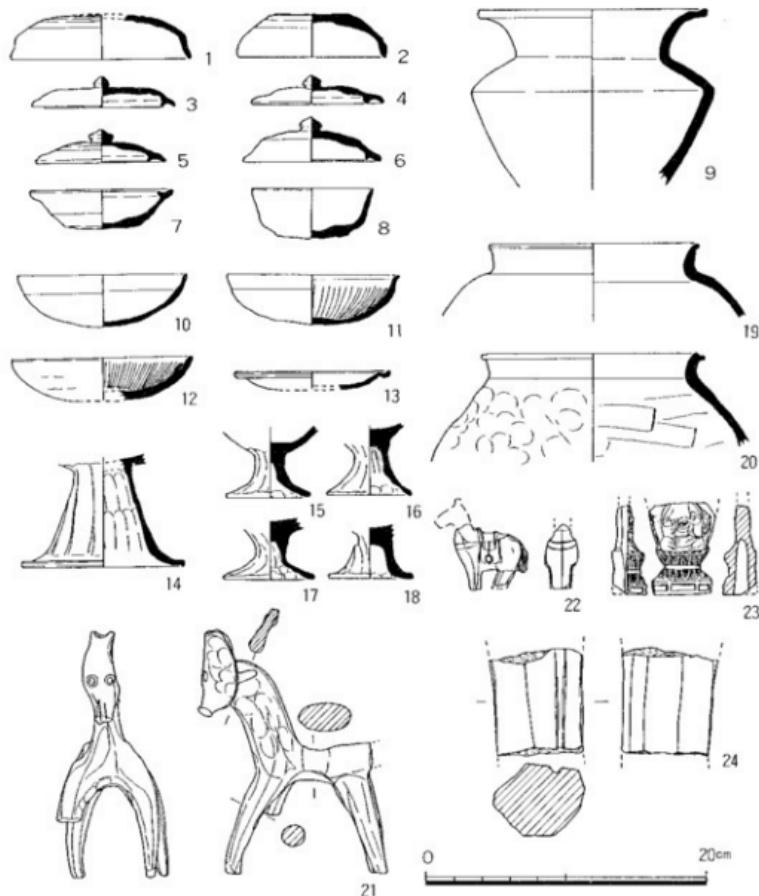


図-36 C地区出土遺物

第4章 古墳の石材について

奥 田 尚

A. 安堂第6支群3号墳

6支群3号墳には石室壁に7石、棺台に16石、石室内の敷石が残存している。これら石材の岩石種とその採取地について述べる。

1. 石室壁の石材

使用石材の岩石種は、中粒黒雲母花崗岩、粗粒黒雲母花崗岩、角閃石黒雲母花崗岩、片麻状黒雲母花崗岩である。

中粒黒雲母花崗岩：色は灰白色である。造岩鉱物は、石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明で、粒径が2mm～5mm、量が中である。長石は白色で、粒径が2mm～7mm、量が多い。黒雲母は黒色板状で、粒径が1mm～5mm、量がごく僅かである。

粗粒黒雲母花崗岩：色は灰白色である。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明で、粒径が3mm～7mm、量が中である。長石は白色で、粒径が5mm～12mm、量が多い。黒雲母は黒色、黒褐色で、粒状、板状である。粒径は2mm～7mm、量が中である。

角閃石黒雲母花崗岩：色は灰白色である。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母、角閃石である。石英は無色透明で、粒径が5mm～7mm、量が中である。長石は白色で、粒径が2mm～8mm、量が多い。黒雲母は黒色板状で、粒径が2mm～3mm、量が中である。角閃石は黒色柱状、粒状で、

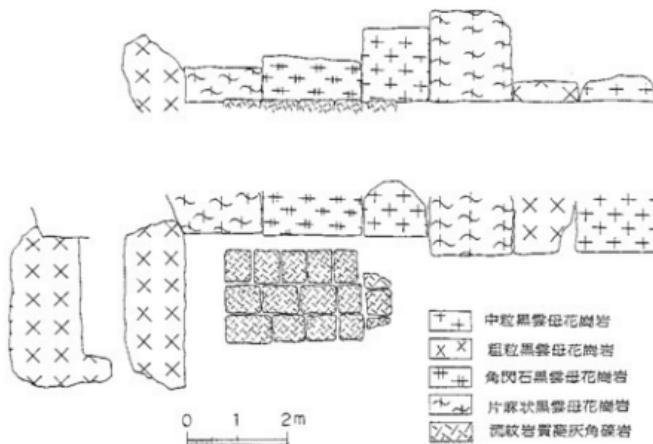


図-37 安堂第6支群3号墳石室石材

粒径が2mm～4mm、量が僅かである。

片麻状黒雲母花崗岩：色は白色である。片麻状構造が顕著で、黒雲母のレンズが片麻状構造と平行に並ぶ。レンズ状部の長さは1cm～2cmで、厚さが1mm～2mmである。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明で、粒径が2mm～3mm、量が中である。長石は白色で、粒径が3mm～7mm、量が多い。黒雲母は黒色板状で、粒径が0.5mm～1mm、量がごく僅かである。

2. 磨石の石材

敷石の石材は全て同質の流紋岩質凝灰角礫岩である。

流紋岩質凝灰角礫岩：色は灰白色で、部分的に黄土色である。構成礫種は流紋岩、松脂岩、軽石である。流紋岩は青灰色、角礫である。礫径は10mm～30mmで、量がごく僅かである。石基は玻璃質で固い。松脂岩は黒色、黒褐色で、角礫、亜角礫である。礫径は32mm以下で、量が中である。軽石は白色、角礫である。礫径は7mm～35mmで、量がごく僅かである。基質は白色、緻密で柔らかい。

3. 石室内の礫數

礫敷に使用されている礫の礫径は3cm～14cmで、4cm～8cmのものが多い。礫形は亜角礫～円礫で、亜角礫、亜円礫が多い。礫種は、黒雲母花崗岩、石英閃綠岩、斑柄岩、アブライト、

礫石種	3cm以下	4cm	5cm	6cm	7cm	8cm	9cm	10cm	10cm以上	11cm	12cm	合計
黒雲母花崗岩	2	18	15	18	12	6	5	1				77
石英閃綠岩		1	6	7	3	1						18
斑柄岩						1	1			1		3
アブライト				2	1							3
石英斑岩	1	7	11	17	6	4	2					48
花崗岩		1	2	1	1							5
玢岩	1	1	3	5	2	1	2	1	1			17
流紋岩					2							2
流紋岩質凝灰角礫岩						2						2
柘榴石黒雲母花崗岩				1								1
安山岩				1			1					2
輝石安山岩		2	5	5	4	4	1	1			1	23
輝岩	2	8	6	9	2	1	1					29
輝質砂岩	1		8	5	10	2	2	2	1			31
砂岩	4	11	24	25	26	16	10		3	2	121	
礫質泥岩					1							1
チヤート	3	6	7	7	8	2	2					35
片麻岩類					1		1					2
庄神岩		3	4	3	1		1					12
破神岩		1	1				1					2
石英		1	1				1					3
合計	14	60	94	105	80	42	28	5	6	3	437	

表-2 安京第6支群3号墳石室敷石の岩石種と長径

石英斑岩、花崗斑岩、玢岩、流紋岩、流紋岩質溶蝕凝灰岩、柘榴石黒雲母花崗岩、安山岩、輝石安山岩、礫岩、礫質砂岩、砂岩、礫質泥岩、チャート、片麻岩類、压碎岩、破碎岩、石英である。砂岩、黒雲母花崗岩、石英斑岩、チャート、礫質砂岩、礫岩、輝石安山岩が多い。

4. 石材の採取地

石室壁石：古墳が位置する付近から、横穴が分布する高井田にかけては新第三紀・第四紀の地層が分布し、古墳に使用できるような石材は得がない。高井田から青谷にかけての付近には、片麻状黒雲母花崗岩が広く、部分的に黒雲母花崗岩、閃綠岩が分布する。当古墳に使用されている中粒黒雲母花崗岩、粗粒黒雲母花崗岩、角閃石黒雲母花崗岩と同質の岩石は、柏原東高校付近から青谷にかけての谷間に巨礫で見られる。岩相の変化は著しい。青谷付近には片麻状黒雲母花崗岩の巨礫が見られる。石室壁石に使用されている石材は、内面、側面が加工されているが、外側には自然面が残る。自然面の形から判断すれば、巨礫を加工したと推定される。以上のことから、壁石の石材は高井田東方から青谷にかけての付近で採取されたと推定される。

敷石の石材：敷石に使用されている流紋岩質凝灰角礫岩は、白色で、流紋岩礫、松脂岩礫が含まれることから、二上層群下部ドンズルボー層の岩相の一部に酷似する。鹿谷寺跡付近では溶結構造が認められ、牡丹洞付近では溶結構造が認められない。よって、牡丹洞付近で石材が採取されたと推定される。

石室内の礫敷：古墳近くを流れる川は大和川と石川である。船橋付近で合流し、江戸時代に付け替えられるまでは北流していた。当古墳近くの石川の礫種は礫岩、砂岩、チャート、石英斑岩、玢岩、花崗岩類を主とし、僅かに火山岩類が含まれる。大和川の礫種は花崗岩類、火山岩類を主とし、チャートが僅かに含まれる。古墳の敷石は砂岩を主とし、礫岩、チャート、玢岩、石英斑岩等が含まれることから、石川の礫種構成に相当する。石川と大和川とが合流すれば、花崗岩類、火山岩類が増加することから、大和川と合流する以南で、柘榴石黒雲母安山岩を流出する飛鳥川と合流する以北付近の石川川原で礫が採取されたと推定される。

B. 安堂第5支群16号墳

5支群16号墳には、石室の壁石・天井石、棺台の石10個、石室に敷かれた敷石、石棺材と推定される破片が石材として残存している。これらの石材の岩石種と採取地について述べる。

1. 石室の石材

使用石材の岩石種は、中粒黒雲母花崗岩、アブライト質黒雲母花崗岩、柘榴石アブライト、斑柄岩、橄欖石輝石安山岩、片麻状黒雲母花崗岩、片麻状角閃石黒雲母石英閃綠岩である。石材の使用傾向として、巨石には、橄欖石輝石安山岩が非常に多く、片麻状角閃石黒雲母石英閃綠岩・アブライト質黒雲母花崗岩が僅かに使用されている。中粒黒雲母花崗岩、斑柄岩、片麻状黒雲母花崗岩は比較的小さい石が使用されている。

中粒黒雲母花崗岩：色は灰色である。石英は無色透明で、粒径が3mm～5mm、量が多い。長石は白色～無色透明で、粒径が3mm～5mm、量が多い。黒雲母は黒色板状で、粒径は1mm～1.5mm、量がごく僅かである。

アブライト質黒雲母花崗岩：色は白色である。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明で、粒径が2mm～7mm、量が僅かである。長石は白色・無色透明で、粒径が2mm～20mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色板状で、粒径が1mm～2mm、量がごく僅かである。

柘榴石アブライト：色は灰色である。造岩鉱物は石英、長石、柘榴石である。石英は無色・暗赤色透明で、粒径が2mm～5mm、量が非常に多い。長石は白色透明で、粒径が1mm～5mm、量が僅かである。柘榴石は赤褐色で、偏菱二十四面体の自形である。粒径は0.5mmで、量は僅かである。

斑柄岩：色は暗緑色である。造岩鉱物は長石、角閃石、輝石である。長石は白色で、粒径が2mm～3mm、量が僅かである。角閃石は黒色で、粒径が2mm～4mm、量が多い。輝石は暗緑色で、粒径が2mm～3mm、量が僅かである。

橄欖石輝石安山岩：風化面では色が灰色であるが、断面では黒褐色である。発泡孔が僅かに見られる。孔径は1mm～1.5mmで、球状である。花崗岩質の捕獲岩が僅かに見られる。粒径は3cmに及び、亜円礫、亜角礫である。造岩鉱物は長石、輝石、橄欖石である。長石は白色・無色透明で、自形である。粒径は1mm～1.5mm、量がごく僅かである。輝石は黒色で、粒径が0.5mm～1.5mm、量が中である。細粒の粒が集まり、粒径3mmの集合体をなす。橄欖石は淡黄緑色透明で、粒径が1mm～1.5mm、量がごく僅かである。石基は黒褐色、緻密で固い。

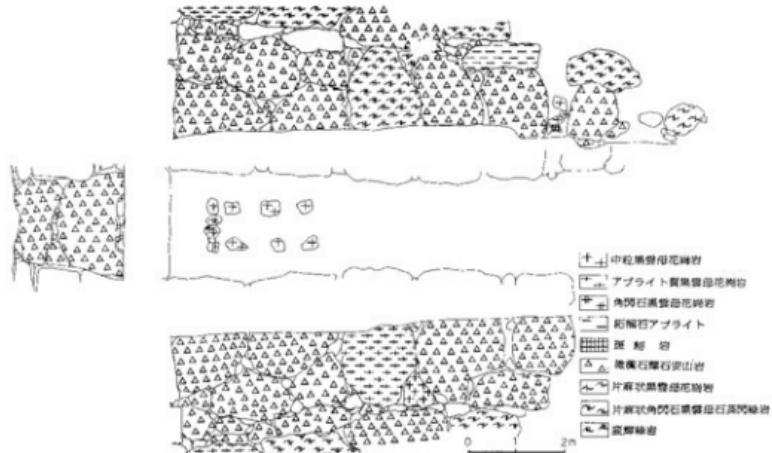


図-38 安堂第5支群16号填石室石材

岩石種	長径(cm)						合計
	<50	50≤<100	100≤<150	150≤<200	200≤<250		
中粒黑雲母花崗岩	2	1	1				4
アブライト質 黑雲母花崗岩				1	1		2
柘榴石アブライト				1			1
透 輝 岩	1						1
橄欖石輝石安山岩	8	1 1	6	9	5	3 9	
片麻岩 黑雲母花崗岩		1					1
片麻狀角閃石黑雲母 黑雲母花崗岩		1		2	2	5	
合 計	1 1	1 4	7	1 3	8	5 3	

表-3 安堂第5支群16号墳・石室壁石・天井石の岩石種とみかけの長径

片麻狀黑雲母花崗岩：色は灰色である。片麻狀構造が顕著である。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明で、粒径が2 mm～5 mm、量が多い。長石は白色で、粒径が2 mm～3 mm、量が多い。黒雲母は黒色板状で、粒径が0.5 mm～1.5 mm、量がごく僅かである。

片麻狀角閃石黑雲母石英閃綠岩：色は灰色である。片麻狀構造が顕著で、レンズ状の長石、黒雲母が集合したレンズ状部の長軸方向と片麻狀構造の方向とは平行である。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母、角閃石である。石英は無色透明、粒径が2 mm～7 mm、量が僅かである。長石は白色で、レンズ状をなす場合がある。粒径は7 mm～15 mmで、量が多い。黒雲母は黒色板状で、粒径が0.5 mm～1 mm、量が僅かである。黒雲母が集合したレンズ状部の長径は5 cm～7 cmである。角閃石は黒色で、粒径が2 mm～5 mm、量が多い。

2. 棚台の石材

岩石種は中粒の黒雲母花崗岩を主とし、変輝綠岩、角閃石黒雲母花崗岩が僅かである。2石の加工石を除けば、他は、亜円礫、円礫である。

中粒黑雲母花崗岩：色は灰白色で、礫形は亜円礫であり、岩相は壁石の中粒黒雲母花崗岩と同じである。

角閃石黒雲母花崗岩：色は灰白色で、表面がなめらかな亜角礫である。岩相は6支群3号墳の角閃石黒雲母花崗岩と同じである。

変輝綠岩：色は暗緑色で、表面がなめらかな円礫である。造岩鉱物は細粒である。

3. 石室内の敷石

敷石に使用されている礫の礫径は、6 cm～15 cmで、6 cm～10 cmのものが多い。礫径は亜角礫が多く、角礫は僅かである。礫種は黒雲母花崗岩、閃綠岩、斑柄岩、輝石安山岩、橄欖石輝石安山岩、チャート、流紋岩質溶結凝灰岩、片麻狀黑雲母花崗岩、片麻狀柘榴石黒雲母花崗岩、石英である。斑柄岩、輝石安山岩が多く、流紋岩質溶結凝灰岩、片麻狀黑雲母花崗岩、片麻狀柘榴石黒雲母花崗岩、石英はごく僅かである。

岩石種	礫径(cm)								合計
	6≤<7	7≤<8	8≤<9	9≤<10	10≤<11	11≤<12	12≤<13		
黒雲母花崗岩	1	3	1					1	6
閃綠岩	2		2						4
斑鷺岩	4	1	4	4		2			15
輝石安山岩	2		3	3	4	2	3		17
橄欖石輝石安山岩		1	3			1	2		7
手サート	1	2	1						4
流紋岩質凝灰岩					1				1
片麻状黑雲母花崗岩					1	1			2
片麻狀軽石黑雲母花崗岩		1							1
石英	1	1							2
合計	11	9	14	7	6	6	6		59

表一4 安堂第5支群16号墳・右室敷石の岩石種と長径

4. 石棺材

加工面が残る岩石片である。岩石種は流紋岩質火山礫凝灰岩である。

流紋岩質火山礫凝灰岩：色は白色である。構成礫種は松脂岩、輝石である。松脂岩は、黒色で、亜角礫、円礫である。礫径は最大20mmで、量は中である。輝石は白色で、亜角礫～円礫である。礫径は最大25mmで、量がごく僅かである。基質は白色、緻密で柔らかい。

5. 石材の採取地

石室の壁石・大井石：石材の多くには加工痕が認められるが、自然石の部分が多いことから、切り出した石を用いたのではなく、巨礫を利用したものである。当古墳付近から高井田にかけては、新第三紀・第四紀の地層が分布する。粘土層中には10cm～30cmの亜角礫の斑柄岩等が礫として含まれる。下部には黒雲母花崗岩、斑柄岩、片麻岩等の巨礫が見られるが、風化したくさり礫である。中粒黒雲母花崗岩は、前述のように高井田東方から青谷付近にかけての範囲で採取されたと推定される。斑柄岩は当古墳東方の尾根部にも見られることから、谷川等の礫を採取されたと推定される。橄欖石輝石安山岩は芝山頂上部に分布する橄欖石輝石安山岩の岩相に一致する。巨礫であることから、芝山付近に転がる橄欖石輝石安山岩の巨礫を採取したと推定される。

棺台の石材：中粒黒雲母花崗岩は加工石も見られるが、亜角礫、亜円礫であり、表面が水磨されたように滑らかであることから川原石であると推定される。角閃石黒雲母花崗岩、変輝緑岩は亜円礫、円礫である。高井田から芝山付近の大和川川原にも同質の礫が見られることから、当付近の川原で採取されたと推定される。

石室内の敷石：斑柄岩は古墳南側の谷川でも類似する岩相の礫が見られることから、谷川で採取されたと推定される。輝石安山岩は亀瀬付近に分布する輝石安山岩に酷似する。花崗岩類、輝石安山岩が多く、砂岩、礫岩等が全く認められないことから、大和川の川原で川原石を採取されたと推定される。採取地としては、橄欖石輝石安山岩が礫としてみられることから、芝山

から石川との合流点までの間の大和川が推定される。

石棺材：石棺に使用されていたと推定される流紋岩質火山礫凝灰岩は、白色で松脂岩礫、軽石礫が含まれ、溶結構造が認められることから、牡丹洞付近に分布する二上層群下部ドンズルボー層の岩相の一部に酷似する。石棺材は牡丹洞付近の下部ドンズルボー層の一部から採石されたと推定される。
(奥田)

奥田氏には御多忙にもかかわらず、古墳の石材について詳細な鑑定、分析をしていただいたうえ、その結果についての原稿まで賜わった。深く感謝している。特に、石材の採取地についての検討は、両古墳建造の背景等を考える際に、重要な問題を含んでいるといえよう。

また、奥田氏に鑑定していただいた石室敷石は、両古墳とも敷石全体の1割程度を占めているにすぎないが、無作為に抽出したものであり、構成礫種やその比率は、ほぼ本来の数値に近いものと思える。
(安村)

第5章 まとめ

今回の調査成果を、周辺遺跡との関係をふまえて、以下、まとめておく。

まず、安堂第5支群16号墳の石棺について検討を加えておくと、本文中で記述のように、石棺はその破片が残っているだけであり、原形を推定することさえ不可能である。しかし、検討の必要があるのは、鳥坂寺の金堂南階段正面に据えられていた凝灰岩製の家形石棺の蓋である。これは、家形石棺の蓋石に、蓋内面や縄掛突起の一部を削り取るなどの加工を加え、上下を逆転させ、拌石として据えたものであろうと報告されている。また、この石棺蓋の下から瓦が出土することから、据え付けられたのは創建を下る時期とされている。石棺蓋は、長さ210cm、幅108cm⁽¹⁾、現存部の高さ42cm、頂部平坦面の長さ156cm、幅53cmである。

安堂第5支群16号墳の棺台が置かれていた範囲は、長さ224cm、幅104cmであり、鳥坂寺の家形石棺の大きさにはほぼ一致する。また、石棺蓋は平坦面が広く、高さが低く、縄掛突起が斜面下方には水平方向にのびるものであり、家形石棺としては比較的新しい時期のものである。石棺から推定される時期と安堂第5支群16号墳の推定築造時期が、7世紀前葉頃とほぼ一致することから、この古墳に安置されていた家形石棺の蓋石を拌石として持ち出した可能性がある。拌石の据え付け時期が創建時を下ると指摘されており、古墳の棺台脇から出土した土師器の風(30)から推定される石棺の持ち出された時期とも矛盾するものでない。

しかし、調査地周辺には後期古墳が多数あり、ほとんどが未調査であることから、同時期の石棺を有する古墳はほかにも存在するであろう。

従って、今回の調査のみで鳥坂寺の石棺が、本古墳から持ち出されたものとは断定できない。但し、その可能性が強い古墳の一つであることは考慮しておく必要があるだろう。

安堂第5支群の他の古墳が未調査であるため、16号墳が如何なる系譜をもつ古墳であるかは理解することできない。

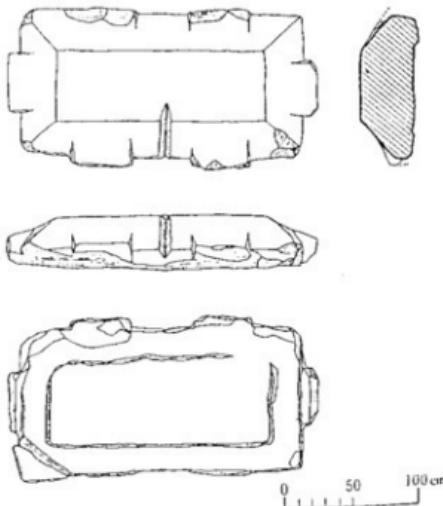


図-39 鳥坂寺跡出土石棺蓋・註(1)より

安堂第6支群3号墳の石室上部構造は不明であるが、奥壁と側壁を密着させるために、奥壁に段を設け、平滑に磨きあげている技法は特徴的なものである。更に、石室床面の凝灰岩切石敷、石室床面周囲の礫敷など類例の乏しい施設がみられる。

安堂第6支群3号墳は、出土した土器から7世紀第4四半期の時期が与えられる。岩屋山式石室の年代は、7世紀第2四半期とする河上邦彦氏の年代説⁽²⁾、7世紀中葉から第3四半期とする白石太一郎氏の年代観⁽³⁾があげられる。奥壁の加工が、岩屋山式石室の中でも比較的新しい時期を示すとしても、第6支群3号墳の年代は、從来の年代観よりかなり新しい時期を示すことになる。凝灰岩敷石下から出土した土器も同時期を示し、敷石と埋葬が同時、つまり7世紀第4四半期に行なわれたことを示す。凝灰岩敷石が古墳築造時のものではなく、2次埋葬に伴う施設である可能性も残されている。しかし、凝灰岩敷石下は床面とは考え難く、木棺や石棺の痕跡も全く認められず、時期の遡る遺物も認められない。つまり、凝灰岩敷石とそれに伴う埋葬が、古墳築造に伴う可能性が強いと考えられるのである。発掘調査がほとんど行なわれていない岩屋山式石室の年代観そのものを、改めて検討する必要があるのでないだろうか。

石室各部の数値からは、石室構築の際に、30cm前後の基準尺度（唐尺か？）を使用している可能性が高いと考えられる。

安堂第6支群3号墳は、その時期、立地等から、鳥坂寺と無関係とは考えられない。この古墳は、鳥坂寺の創建にやや遅れて築造されたと考えられ、鳥坂寺に深く関わった人物の古墳と考えることができる。鳥坂寺と直接の関係を示す遺物等は認められないが、石室床面に敷かれた凝灰岩切石は、鳥坂寺の堂塔の壇上積基壇に使用されている凝灰岩切石と関係があるのでないだろうか。石室床面の凝灰岩切石敷が類例をみないものであるだけに、寺院建築との関係を重視してもよいのではないだろうか。凝灰岩切石の大きさが不揃いであることから、寺院建築の際の廃材等を転用した可能性も考えられる。

また、鳥坂寺の礎石は、上面を丹念に磨き上げて加工したものが多く、石室に使用されている花崗岩の切石を造り上げる技術も、寺院建築に伴う石材加工技術との関係を考えてみる必要があるだろう。

石室掘方内の排水施設については、自生的な技術とは考え難い。石室掘方内まで調査された同時期の古墳が少ないので、未知の例が少なからず存在するのではないかだろうか。岩屋山式石室は柏原市内では初見のものであり、これらの特殊な施設については、類例の増加を待って、改めて検討する機会を得たいと思う。

安堂第5支群16号墳と第6支群3号墳は、立地、築造時期においてかなり異なるが、奥田尚氏の石材鑑定結果から、石室石材は、共に高井田から青谷にかけての地域で採取されたと推定され、石棺材もいずれも二上山牡丹洞付近で採取されたと考えられる点で一致する。その点で、両古墳の築造者に何らかの関係があったことも考えられる。

A地区の独立柱建物群は、安堂第6支群3号墳の築造にやや先行するか、もしくは同時期と考えられる。崖面をなす高台に、かなり大規模な造成工事を行なって建物を建築している。必ずしも、このような高所に生活の場を求めるなくとも、生活は可能であったと思えるが、敢えてこのような場所を選定している。また、そこで生活を営んでいた人々は、円面鏡の出土にみるよう、かなりの知識階級者と考えられ、おそらく、鳥坂寺を氏寺とする鳥取氏一族の生活の場の一端であろう。

柏原市内では、山地斜面を造成し、建物群を築いている同様の例が最近の調査で増加している。いずれも7世紀代の建物群であり、寺院建築が栄んになる時期に一致する。寺院建築開始と共に、生活の場は山地斜面へと移動している。その理由は、今後検討を加えていきたいが、7世紀代に柏原市域の様相が一変したことだけは事実であろう。

このように華やかな生活の舞台となり、現在まで静かに眠り続けてきた遺跡が破壊されいくのは残念な限りである。埋蔵文化財だけでなく、柏原市の最大の特色である豊かな緑に代表される自然環境も少しずつ失なわれていく。時の流れといえば、それまでかもしれない。文化財や自然よりも、現代の人々の生活が大切であるという考えもある。しかし、無味乾燥な現代の生活に入人々が求めているものは、心のやすらぎではないだろうか。祖先の歴史的遺産である文化財や自然環境が、そのやすらぎを与えてくれはしないであろうか。

その中で、安堂第6支群3号墳の石室が、移設とはいえ、人々が見学できる状態で残されるようになったことは、ささやかな成果であろう。外部施設は残すことができないが、石室は、調査地東方の緑地予定地に移設復元されることになっている。復元された石室から、古代の人々の生活の一端を感じて頂けることを期待している。

註

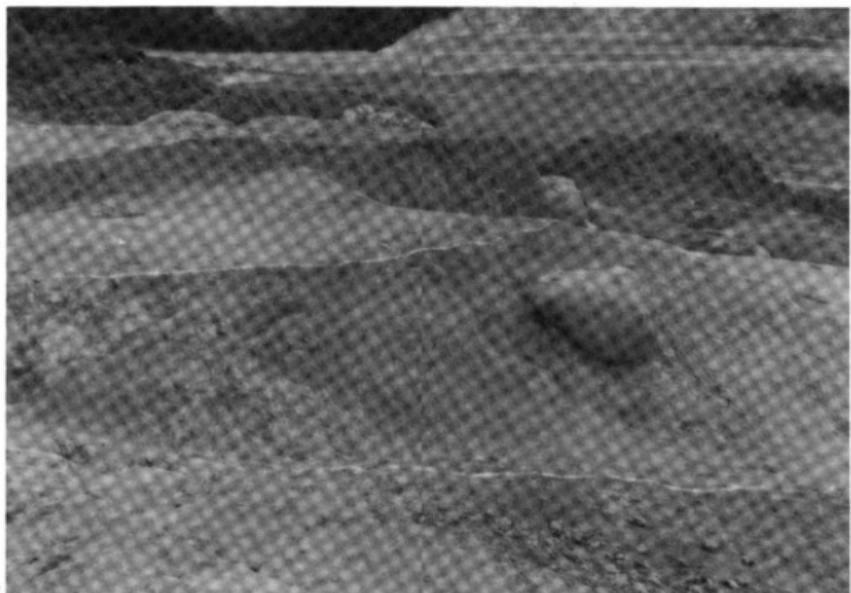
- (1) 大阪府教育委員会『河内高井田・鳥坂寺跡』 1968
- (2) 河上邦彦「大和の大型横穴式石室の系譜」『檍原考古学研究所論集』第四 1979
- (3) 白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告第1集』 1982
- (4) 石室床面に凝灰岩質砂岩が敷かれていた例として、奈良県天理市タキハラ3号墳をあげることができる。しかし、タキハラ例は床面全体に切石が敷きつめられており、安堂第6支群3号墳と異なる。本古墳の場合は、石室に敷きつめることを目的としたものではなく、棺台として敷いたものと考えられる。その周囲に排水機能を兼ねた礫を敷きつめるという技法は、あるいは第5支群16号墳の棺台とその周囲の礫敷にみられる技術を継承、発展させたものである可能性が考えられる。

河上邦彦・上田喜美「タキハラ支群の調査」『天理市石上・豊田古墳群II』奈良県立檍原考古学研究所編 1976

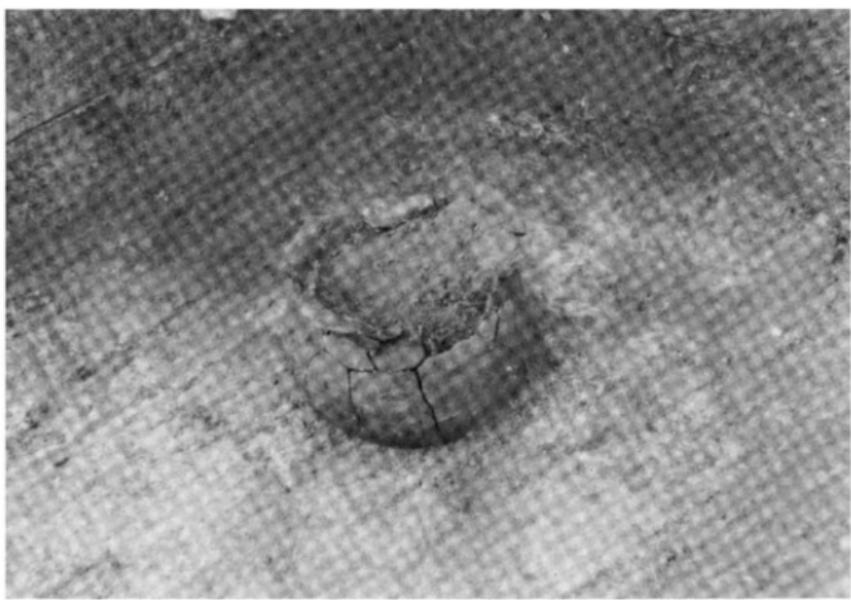
図 版

圖版 1

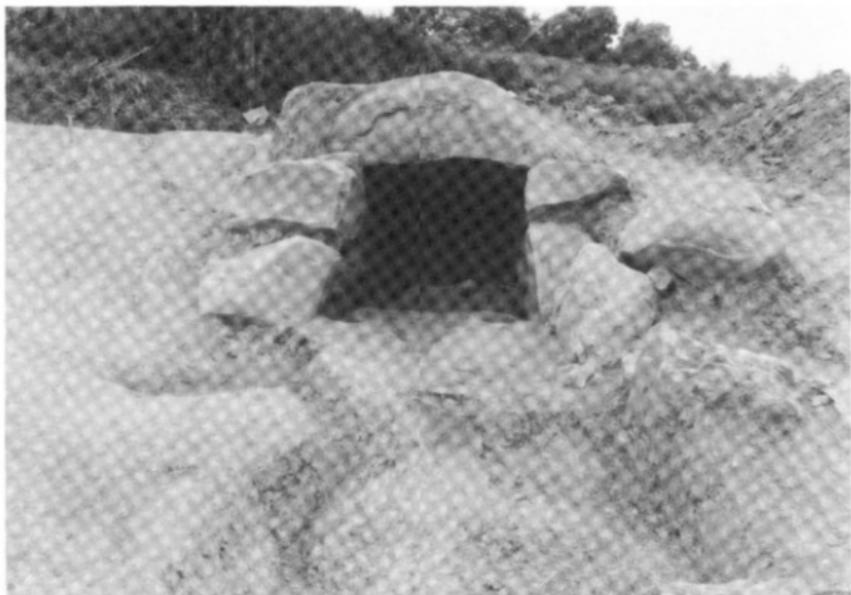
安堂第5支群16号墳周溝



全景



遺物出土狀況



全景

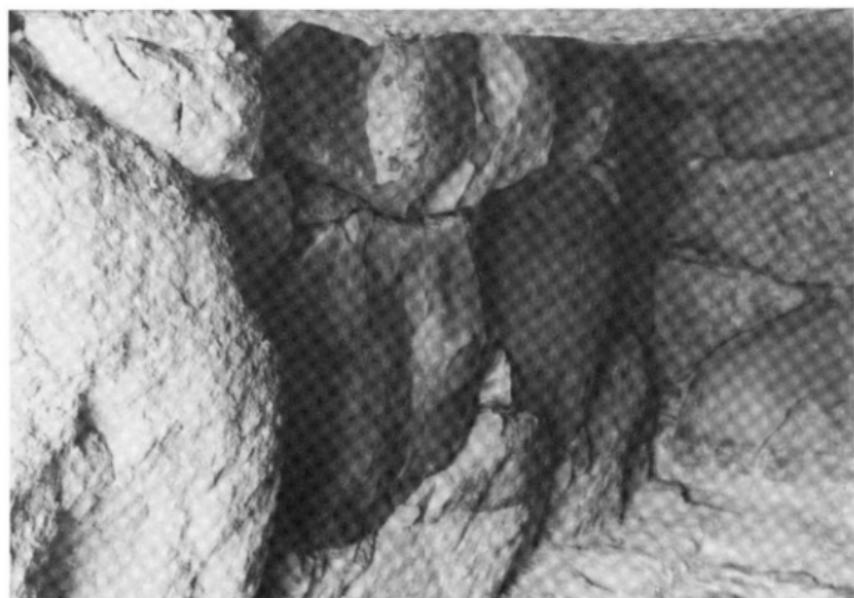


近景

圖版 3
安堂第5支群 16號墳石室



東壁



西壁



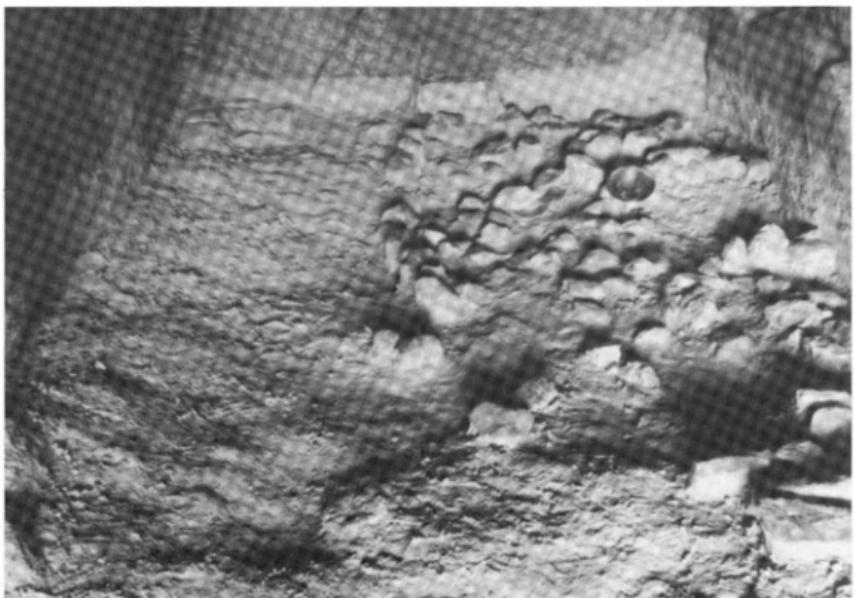
奥壁



奥壁塙方



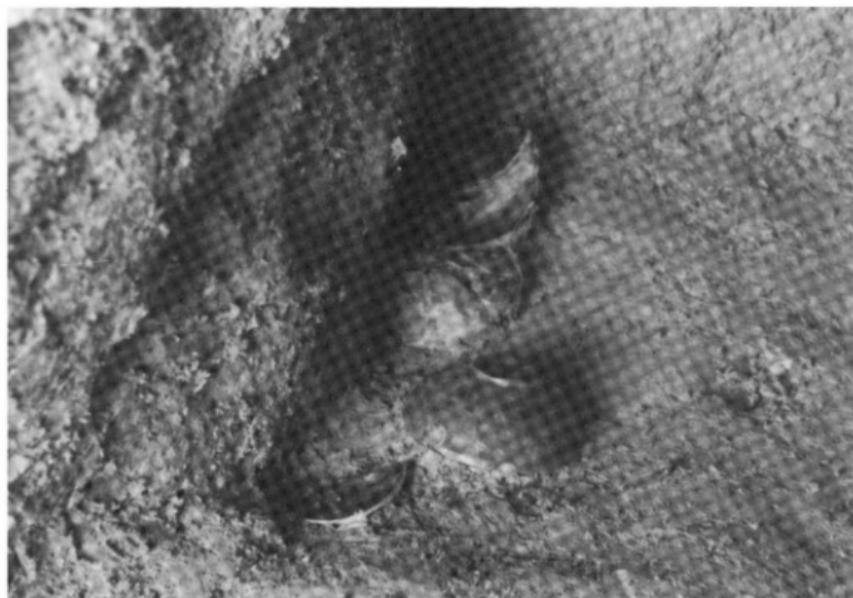
凝灰岩出土狀況



瓦器椀出土狀況



瓦器椀出土狀況（東壁）

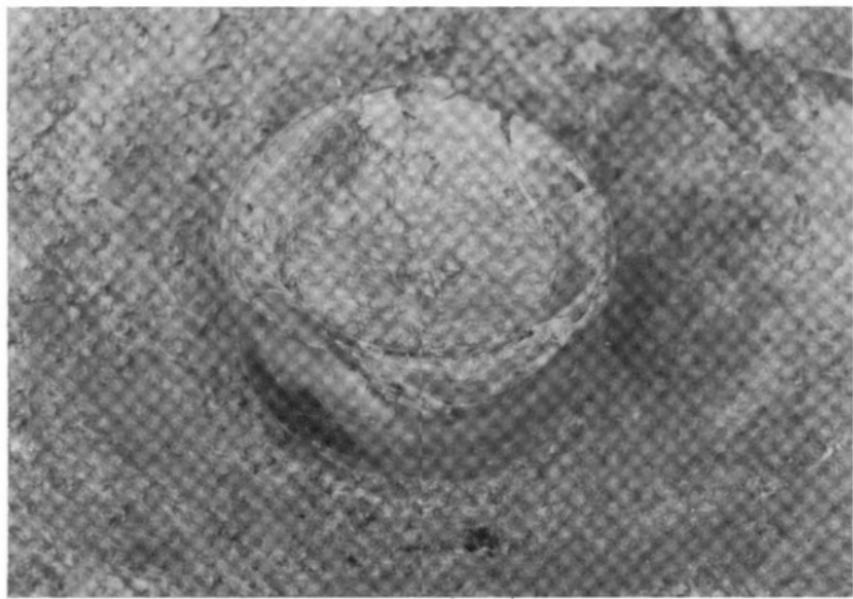


瓦器椀出土狀況（西壁）

圖版 7 安堂第5支群16號填石室床面



石室床面



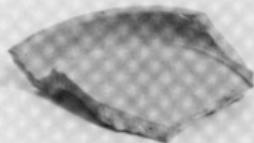
床面遺物出土狀況



1



9



10



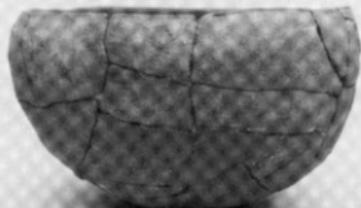
11



13



14

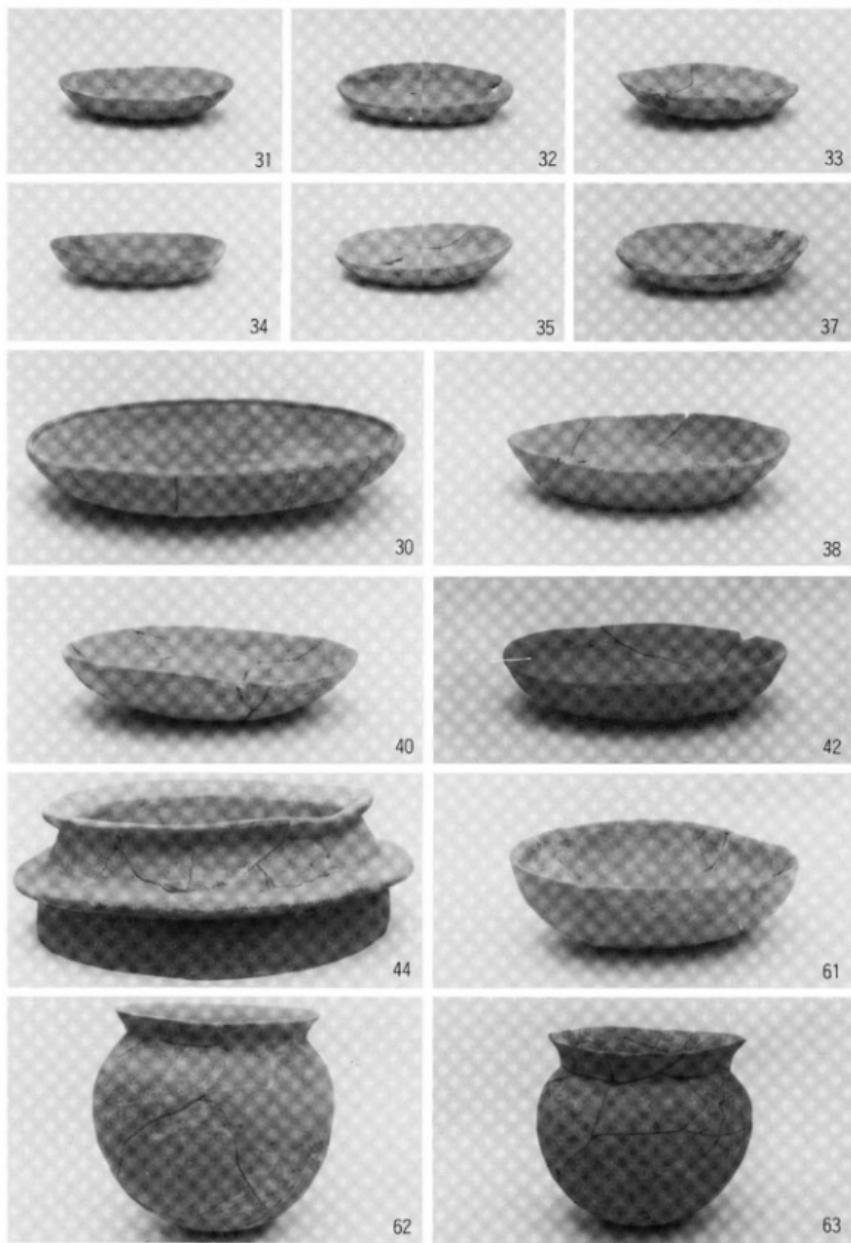


23



25

図版9
安堂第5支群16号墳出土遺物





46



47



48



49



50



52



53



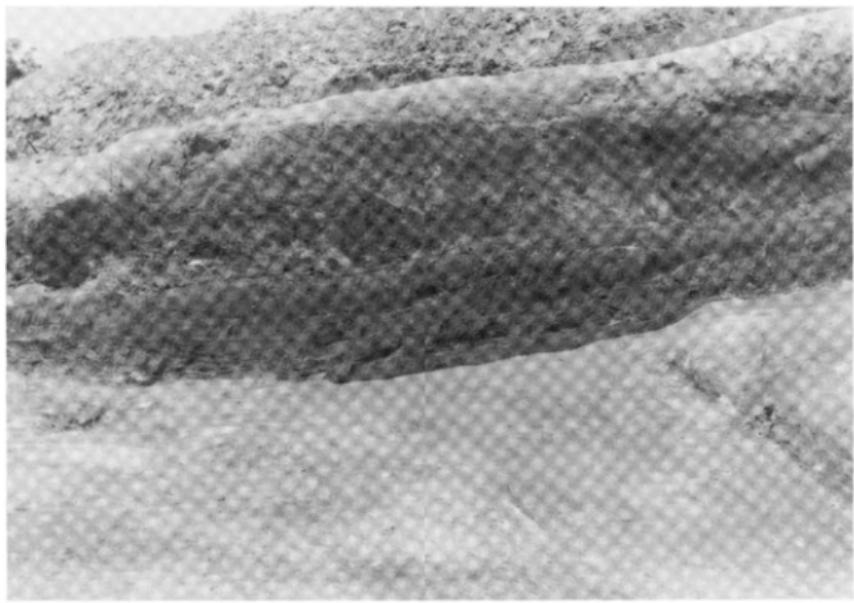
54



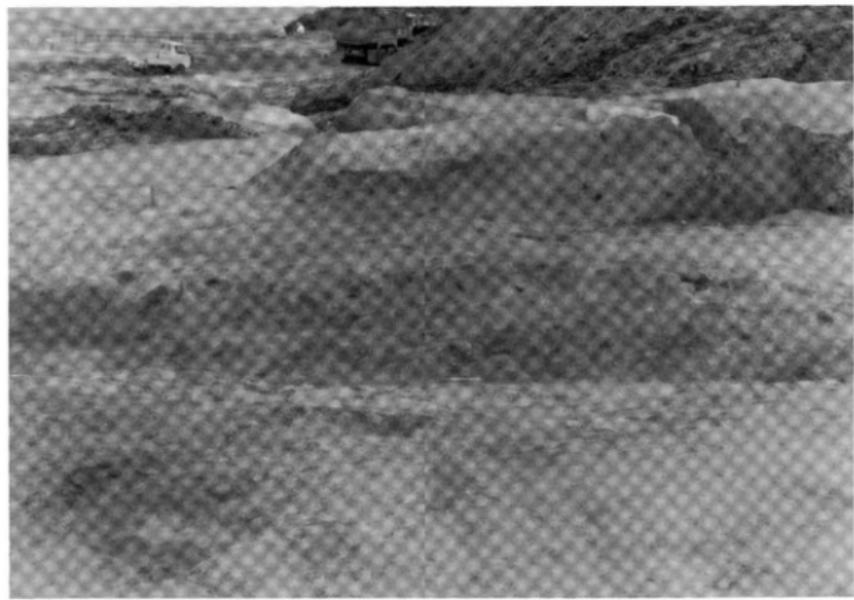
56



59



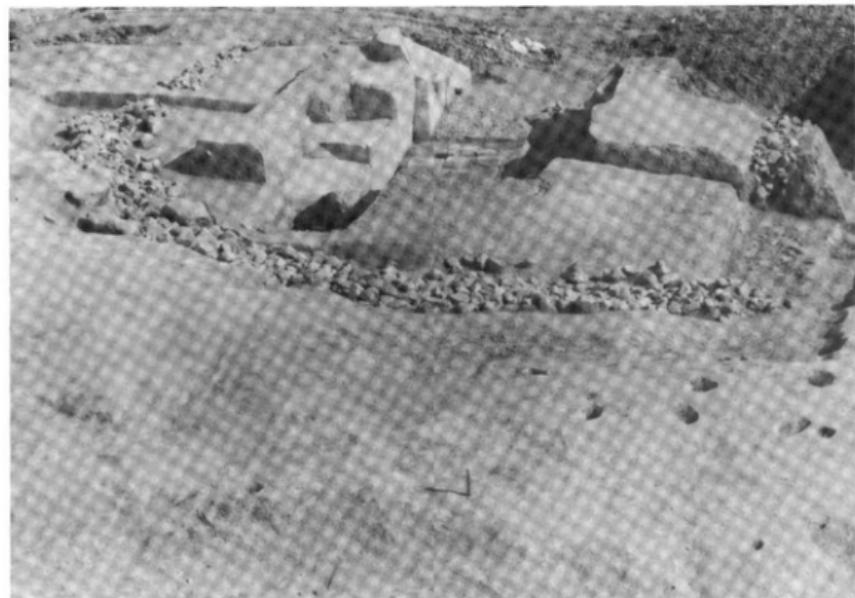
地山整形面



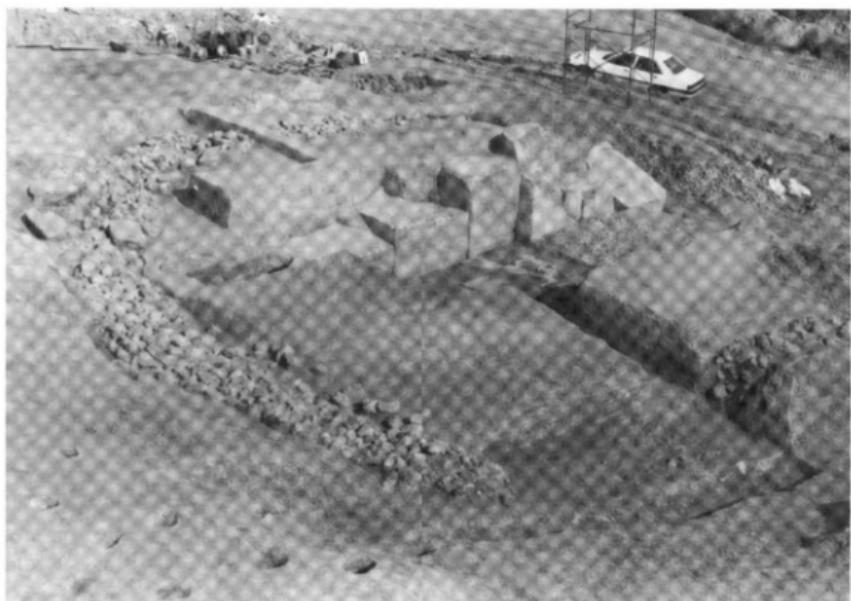
全景



石室と排水施設（南から）



石室と排水施設（北から）



石室と排水施設（北西から）



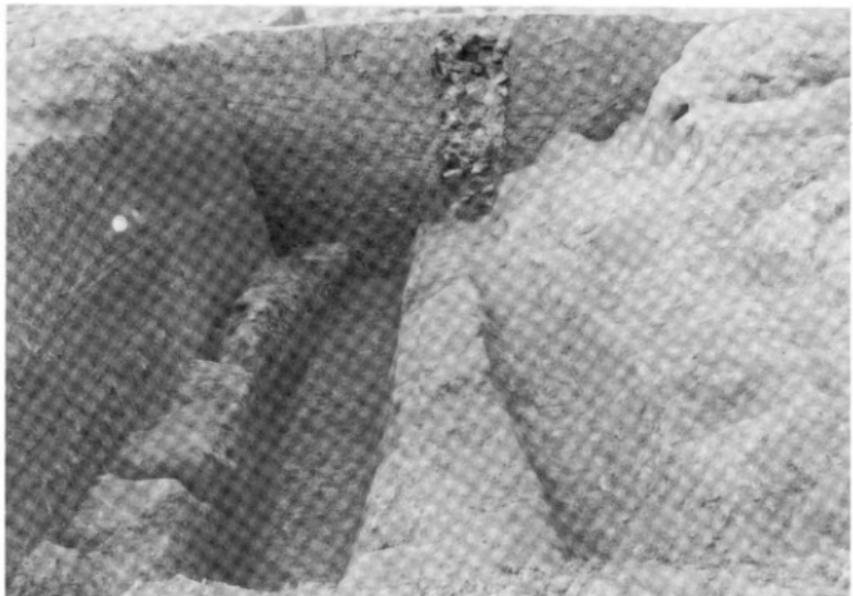
石室と排水施設（西から）



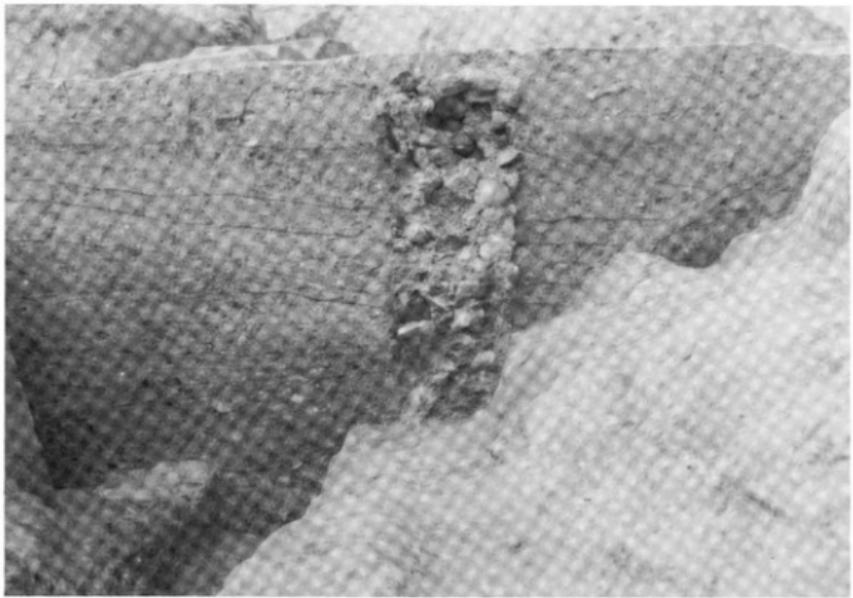
排水施設東側



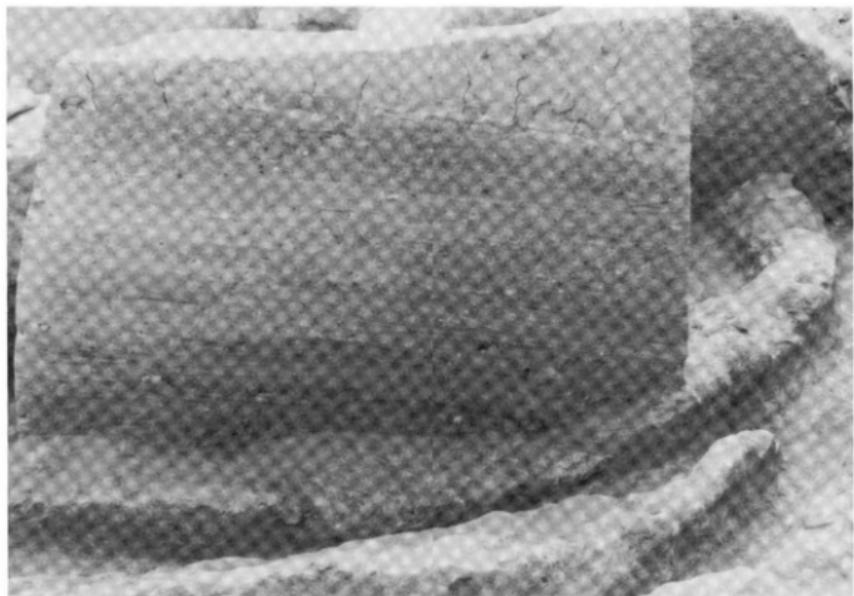
版築と排水施設（東から）



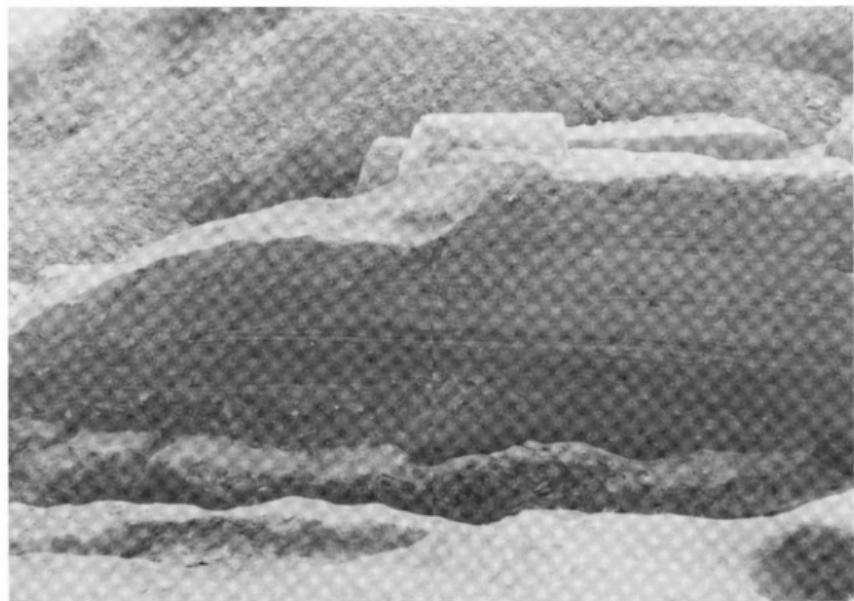
石室掘方東半（南から）



版築と排水施設（南から）



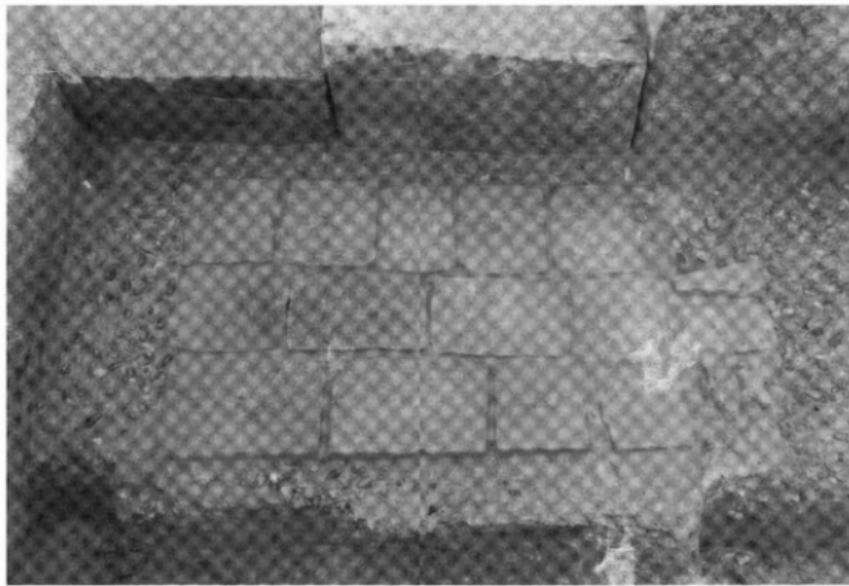
石室擺方北東部（東から）



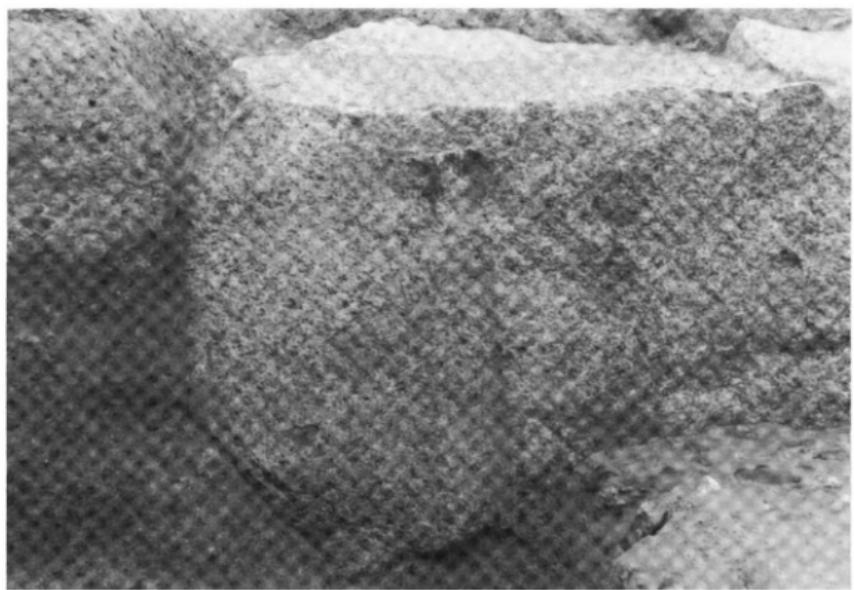
石室擺方版築層（東から）



石室全景（南西から）



凝灰岩敷石（西から）



奥壁くり込み



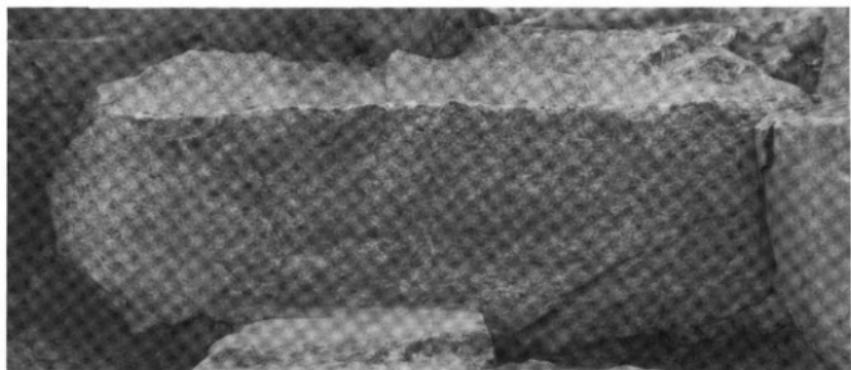
凝灰岩敷石（北から）



玄室（たちわり後 西から）



玄室（同）



奥壁（南から）



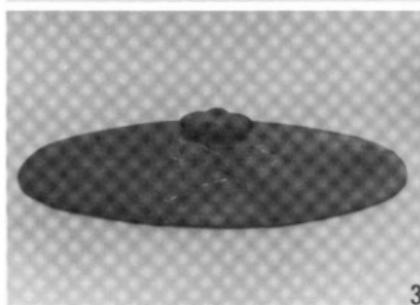
柱穴群（たちわり後 北から）



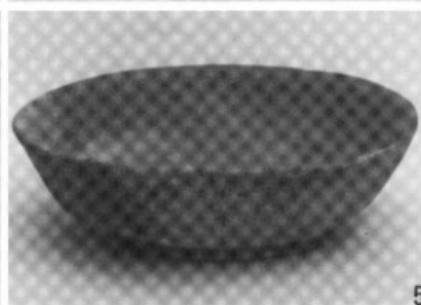
1



2



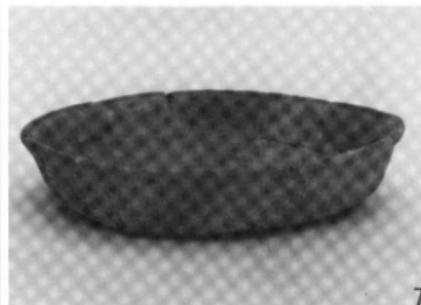
3



5



10



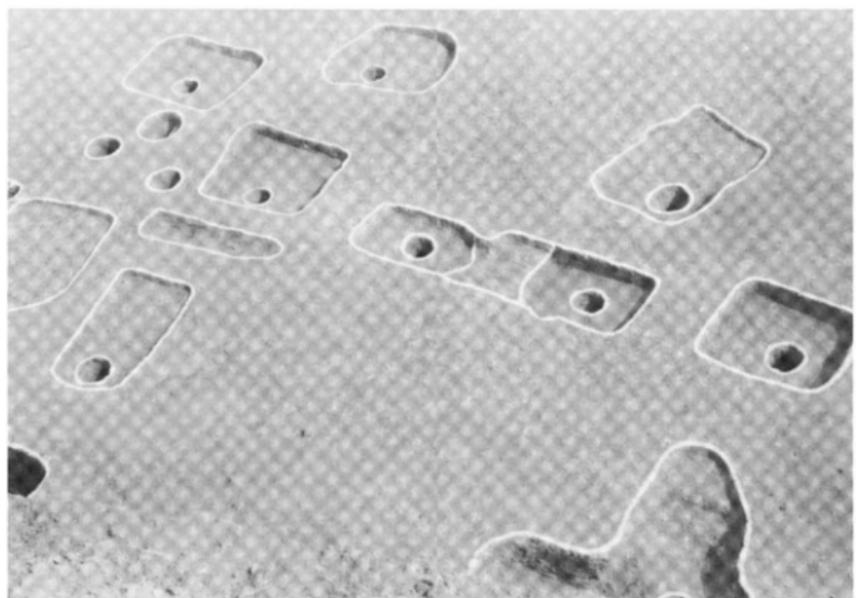
7



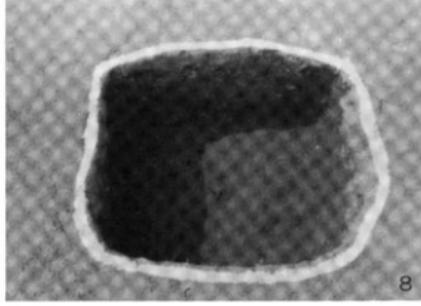
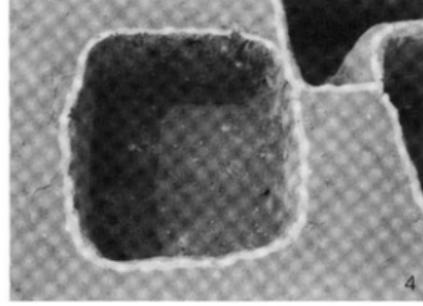
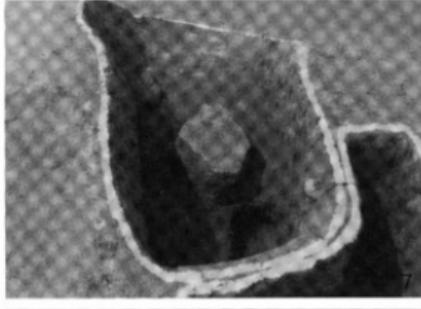
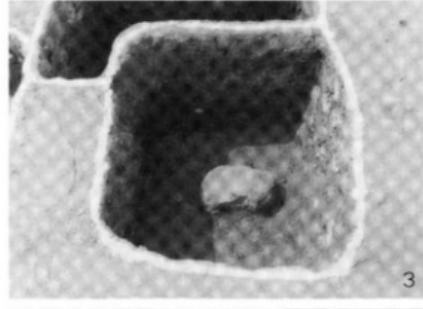
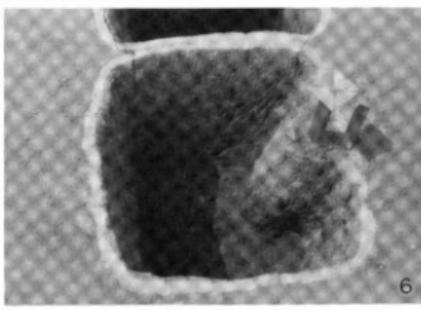
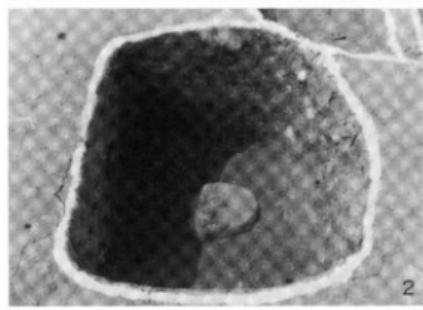
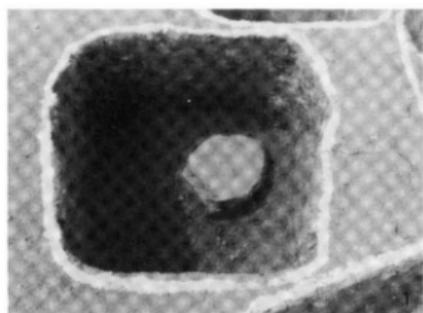
11



建物—1・2

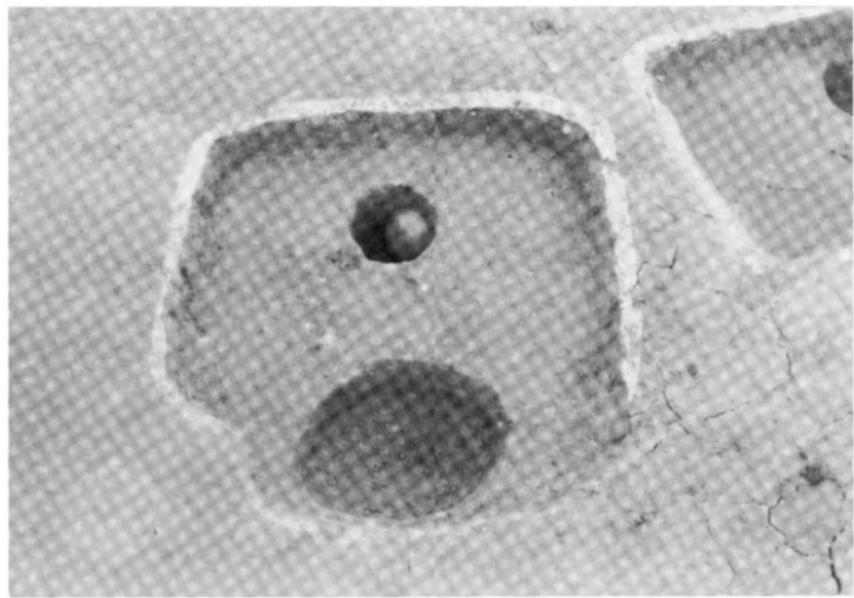


建物—3

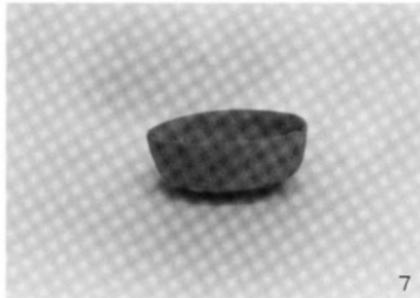




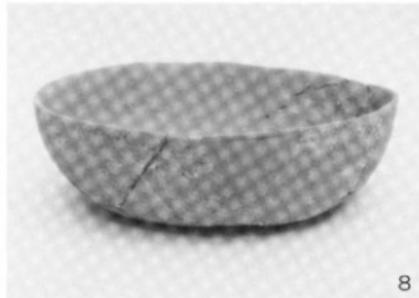
南東部遺構



ピット-22



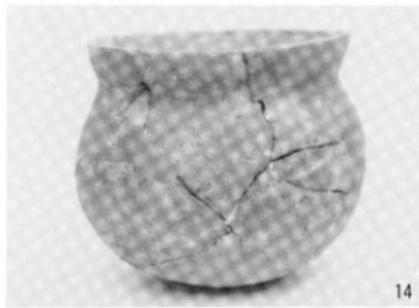
7



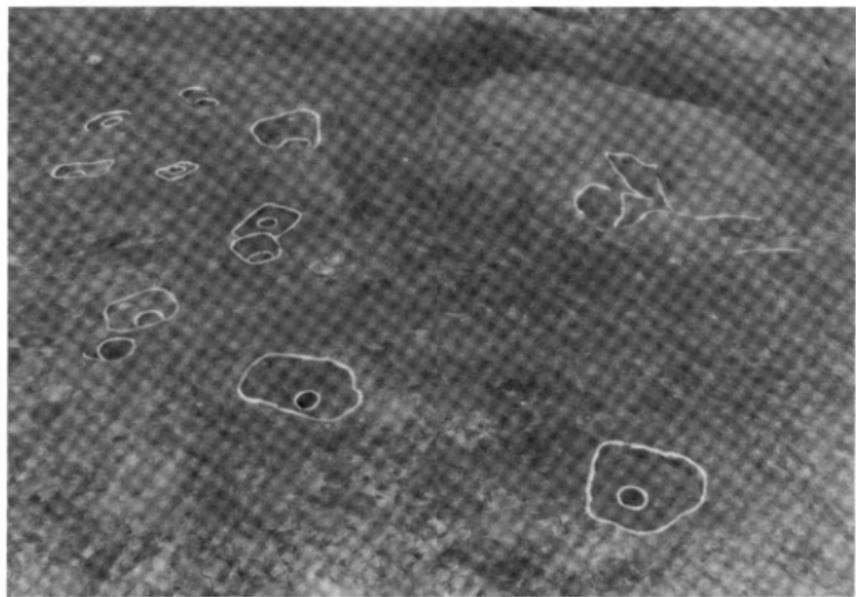
8



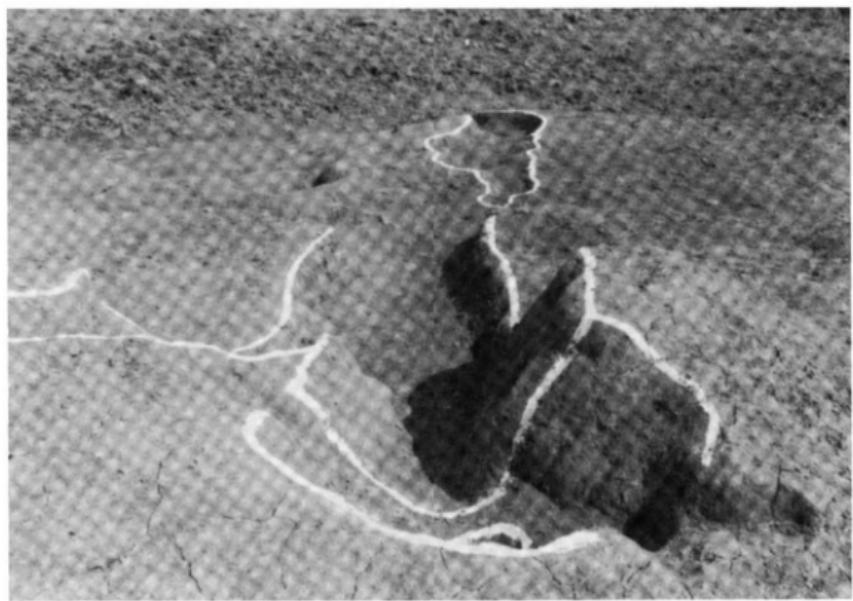
13



14



建物



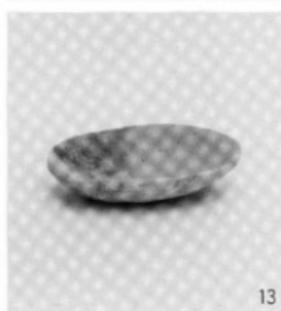
溝



1



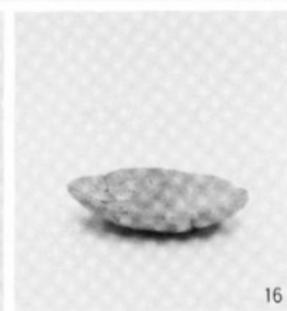
5



13



15



16



20



24



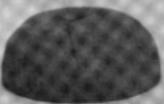
25



26



28



29



34



36

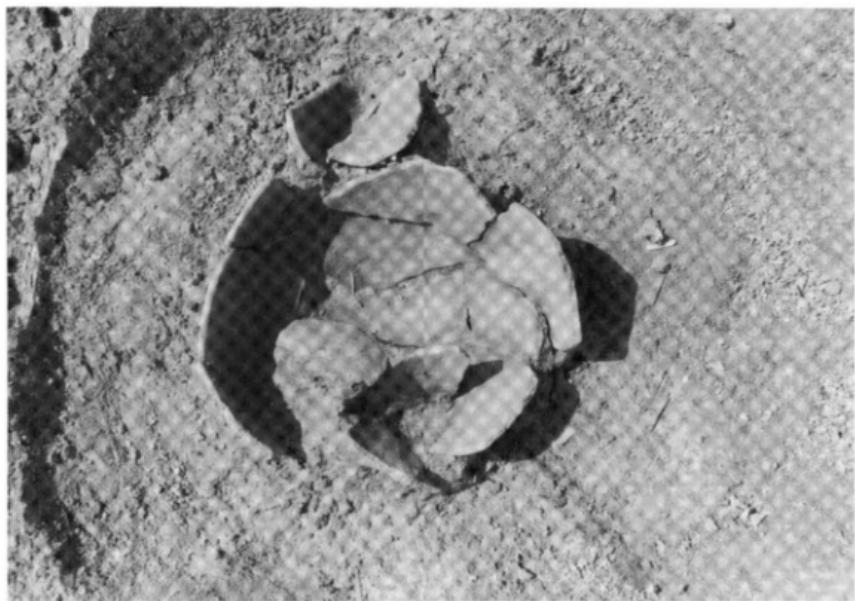


38

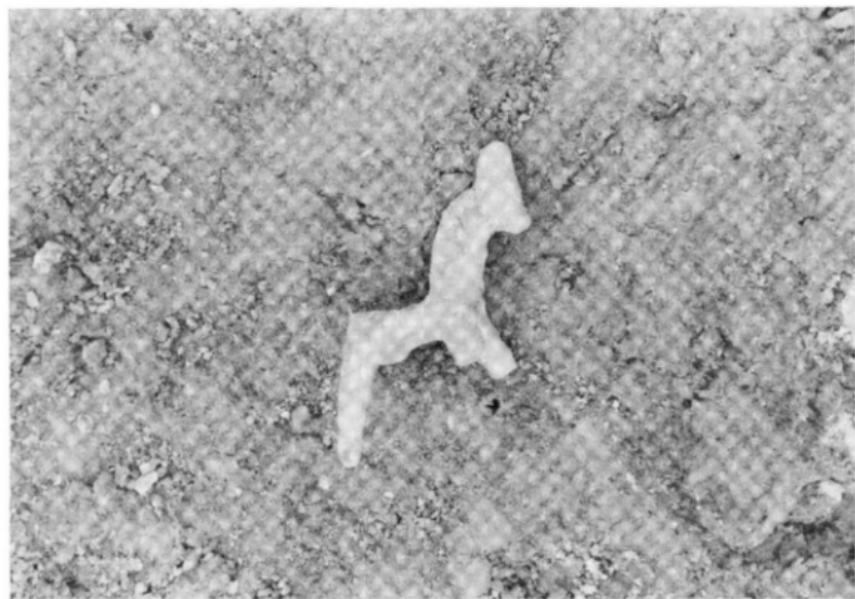


39





安堂第5支群16号墳周溝



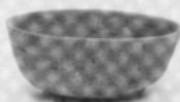
C地区出土土馬



2



6



8



10



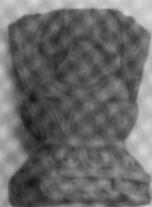
11



12



22



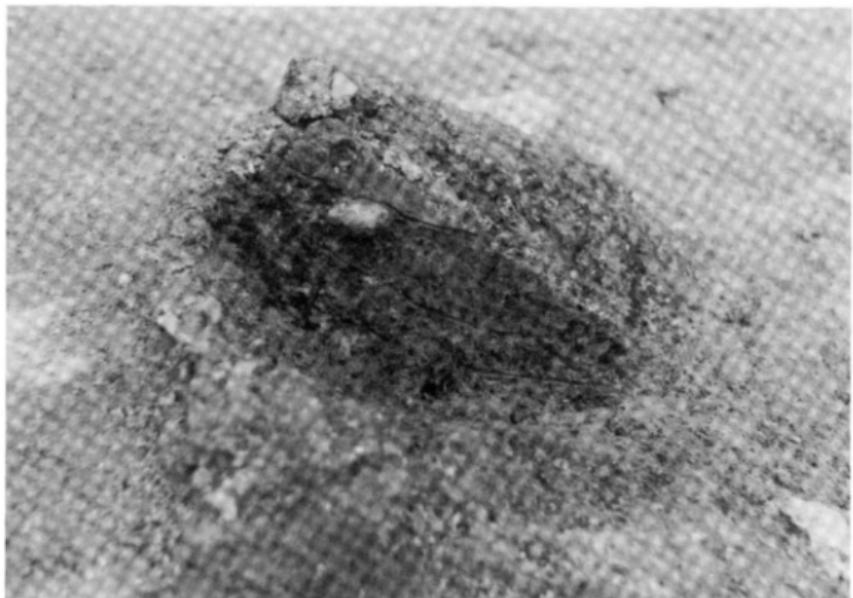
23



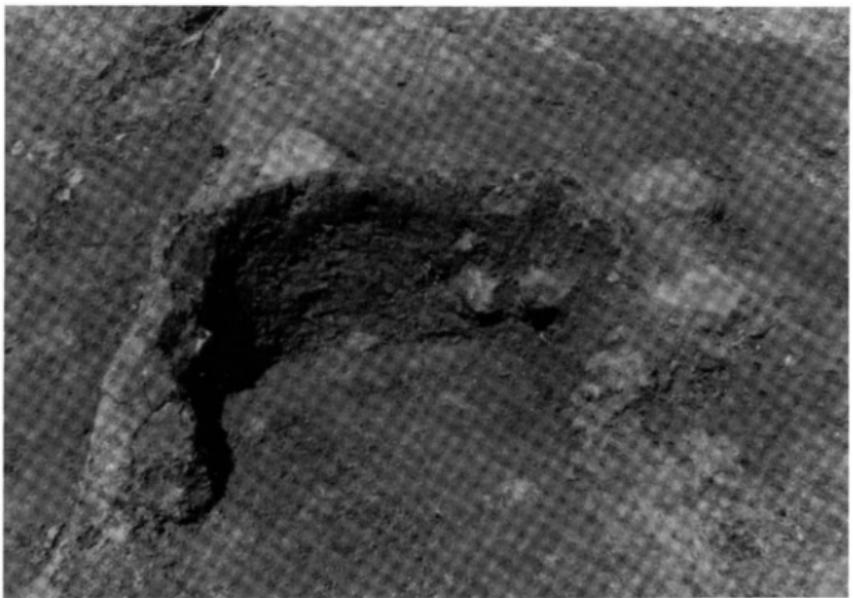
21



24



半掘狀況



全掘狀況

高井田遺跡 I

編集・発行 柏原市教育委員会
〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号
電話 (0729)72-1501 内716
発行年月日 昭和61年3月31日
印 刷 東洋紙業高速印刷株式会社

